



Annual Report
2016

年報

京都大学

地域研究統合情報センター



CENTER FOR INTEGRATED AREA STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

目次

はしがき	2
I 組織の概要	5
1. 沿革	6
2. 組織概要	8
1 運営組織	8
2 研究部門	9
3 図書室	10
4 運営委員会	11
5 協議員会	11
6 スタッフ一覧	12
3. 運営経費	13
II 研究活動の概要	15
1. 共同利用・共同研究拠点としての活動	16
1 共同利用・共同研究拠点	16
2 地域研究コンソーシアムの運営体制と活動	51
3 英国議会資料（BPP）	55
2. 情報資源共有化に向けた活動	56
1 地域情報学の構築に向けた活動	56
2 データベースや情報解析ツール等一覧	58
3. スタッフの研究活動	79
1 個人研究	79
2 外部資金による研究活動	107
3 受賞	113
4. シンポジウム・ワークショップ・研究会等	114
III 国際交流	129
1. 国外客員教員招へいプログラム	130
2. 学術交流協定	130
3. 国際ハブ形成	131
IV 広報・出版	133
1. 出版	134
1 CIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」	134
2 CIAS叢書サブシリーズ「相関地域研究」	134
3 CIASブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」	135
4 雑誌『地域研究』	135
5 CIAS Discussion Paper Series	136
6 JCAS Collaboration Series	137
7 スタッフの刊行物	138
2. 情報発信	139
2015年度の記録	141

はしがき

この年報は、京都大学地域研究統合情報センター（以下、地域研）の2015年度における活動をまとめたものです。

地域研は、全国の地域研究者コミュニティの要請に基づいて、2006年度に「全国共同利用施設（試行）」として発足しました。その後、2008年度に（試行）がとれて正式に全国共同利用施設、2009年度からは「共同利用・共同研究拠点」（以下、拠点）として活動を継続しています。発足から10年を経て、この4月に「地域研究統合情報センター創立10周年記念祝賀会」を挙行いたしました。これは、学内関連部局、大学本部、人間文化研究機構、文部科学省、とりわけ地域研究コンソーシアムを始めとする地域研究コミュニティの皆様のご長年にわたるご支援のおかげです。改めて御礼申し上げます。

21世紀を迎え、世界が複雑化かつ多様化するにともない、国境や文化圏を越えるヒトやカネやモノの量と速度が増大し、一地域における災害やテロなどの変動は直ちに周辺地域あるいは全世界に波及するようになってきました。このような地域を超えた課題に対処するため、対象地域名を冠さない研究組織としての地域研は、グローバルとローカルをリンクしながら地域をデザインする新しい地域研究を推進する中核的な役割を果たすことが期待されています。そのために、特定地域を対象とする地域研究組織との地域横断的および関連学問分野の研究組織との分野横断的な研究活動（相関型地域研究）、さらに情報学を駆使した地域研究情報の共有と分析により地域を多角的に捉える手法の確立（地域情報学）をミッションに掲げた研究活動を展開しています。この意味で、地域研はユニークであると同時に、京都大学の地域研究の伝統である文理融合と学際型共同研究を通じて、地域研究者を有機的に束ねる研究組織となっています。

相関型地域研究を推進するためには、地域横断的かつ分野横断的な共同研究が不可欠です。地域研では、（試行）の段階から共同研究を活動の中心に据えてまいりました。共同研究は完全公募制とし、学外の有識者を交えた専門委員会による課題の設定と選考を行い、毎年春に開催される成果発表会において、全研究課題の成果公表と検証を実施しています。2015年度も、相関地域研究プロジェクト「〈地域〉を測量（はか）る：21世紀の『地域』像」、 「地域情報学の展開」プロジェクト、「災害対応の地域研究」プロジェクト、「地域研究方法論」プロジェクトの4プロジェクトを継続し、計25件の共同研究を実施し、のべ200名以上の共同研究員が参加しました。相関型地域研究の成果としてCIAS叢書の継続刊行、さらにCIAS叢書サブシリーズとして京都大学学術出版会から「情報とフィールド科学」ブックレット3冊、青弓社から「相関地域研究」2冊、京都大学学術出版会から「災害対応の地域研究」2冊を刊行しました。

さらに地域研は、地域研究関連組織が加盟する「地域研究コンソーシアム」（以下、JCAS）の事務局を担っており、その加盟数は2004年度JCAS発足時の46組織から100組織へ

と拡大しました。JCASの情報を発信する「地域研究メールマガジン」は発刊以来週刊頻度で配信し続け、シンポジウムや研究会の案内、JCAS関連組織プロジェクトや公募情報など、地域研究コミュニティの発展に貢献しています。2015年度に地域研が共催あるいは支援した研究活動や集会の数は70件以上にのぼります。研究対象地域や研究者の世代が多様化するなかで、さまざまな組織やプログラムに所属する若手研究者を共同研究員として数多く迎えている点が、大きな特徴となっています。また大学附置研究センターであることを活かし、ポストドクや若手研究者に対して研究活動への参加や運営経験の機会を提供し、地域研究の専門家としての実践的な育成にも貢献しています。

地域情報学は、地域研究者や研究組織が収集あるいは所蔵している文字、画像、動画、音声などの多様な地域研究資源のデータベース化と共有の実現、およびデータ分析や知識発見の支援を目的としています。地域情報学の初期の段階において、地域研では、所蔵資料を中心に公開あるいは非公開を含めて50以上のデータベースを構築しました。また、その過程で蓄積したデジタル化やメタデータ作成に関する技術や経験を研究コミュニティと共有するために、講習会を開催しています。さらに、ネットワーク上に分散している他の研究組織のデータベースとの共有を目指した「地域研究資源共有化データベース」の運用も開始しています。「地域研究資源共有化データベース」は、地域研、京都大学東南アジア研究所、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館の計51データベースの共有化を実現しており、地域研究においては最大規模のデータベース連携と言えます。

このような地域情報学の成果と2009年に実施した外部評価で得た助言をもとに、2010年度より「地域情報学プロジェクト」を立ち上げ、相関型地域研究と地域情報学を両輪とする独自の研究を積極的に展開しております。地域情報学プロジェクトの情報基盤として、個人あるいは小規模研究室が収集した貴重な地域研究資源のデータベース化と公開を支援するMyデータベース、そこに蓄積されたデータの高度利用を支援するREST型API、さらにデータを空間的あるいは時系列的に可視化あるいは分析する時空間情報処理ツールを開発しています。森林写真、儀礼の映像、雑誌記事テキスト、僧侶の移動などの地域研究に関する多様なデータベースが、Myデータベースにより構築されています。またREST型APIを利用して、学術書に付与したQRコードからMyデータベースに蓄積された画像あるいは動画データを表示するマルチメディア刊行物や、イスラム系総合月刊誌『カラム』の画像画面とテキスト画面を連動させた新しいユーザインタフェースなどの開発も進んでいます。

地域研は、拠点のミッションである「相関型地域研究」と「地域情報学」の展開と、京都大学が掲げる「先端的、独創的、横断的研究」を着実に推進し、2015年度に実施された共同利用・共同研究拠点の期末評価において「A：拠点としての活動は概ね順調に行われ

ており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される」という評価を得て、第3期中期目標期間においても拠点としての機能を継続できることになりました。これにあわせて、地域研の強みと特徴を活かした新しい達成目標を明確化しつつあります。相関型地域研究においては、「ラテンアメリカ研究ハブ形成事業」を発展させた「環太平洋ハブ研究事業」が立ち上がります。これは、アメリカ大陸を出発点にオセアニアまで視野を広げるとともに、京都大学で蓄積されてきた東南アジア、東アジア、ユーラシアに関する研究活動と連携することを目指した野心的な地域研究を模索するものです。地域情報学においても、サイバー空間やクラウドやビッグデータなど、急速な進化と変容を遂げているネットワーク社会に対応した次世代地域研究データベースの構築を目指します。そのために、セマンティックWebやテキストマイニングや人工知能などの最新技術を駆使した応用研究を、学内関連部局との連携のもとで開始しています。研究センターとして、また拠点として、学術への貢献と社会的責務をスタッフ一丸となって果たす所存です。

そのためにも、大型予算などの獲得は喫緊の課題であり、東南アジア研究所やアジア・アフリカ地域研究研究科などの学内地域研究関連教育研究組織およびJCAS加盟地域研究関連組織との緊密な協力関係のもとに、地域を越えた課題を軸にした独創的な研究活動の展開が一層重要となります。引き続き学内外からの暖かいご理解とご支援を仰ぎつつ、地域研にたいする皆さまのご支援とご協力を重ねてお願い申し上げます。

2016年6月

センター長 原 正一郎

I. 組織の概要

1. 沿革
2. 組織概要
 - 1 運営組織
 - 2 研究部門
 - 3 図書室
 - 4 運営委員会
 - 5 協議員会
 - 6 スタッフ一覧
3. 運営経費



CENTER FOR INTEGRATED AREA STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

1 沿革

京都大学地域研究統合情報センター（以下、地域研）は、地域研究に関わる全国の研究組織や研究者のさまざまな共同と協力、地域研究の推進と国内外の研究組織とのネットワーク化を強く求める多くの研究諸組織による尽力を背景として生まれた。設置に至る経緯の詳細は『年報』第1号（2006年度）および第2号（2007年度）に記したため、以下ではその概略を述べるにとどめ、設置されてから2015年度までの経過を中心に沿革を紹介する。

1994年、地域研究企画交流センターが世界諸地域の地域研究に関する共同研究の推進、研究成果の発信を目的に国立民族学博物館に設置された。この民博地域研が現在の地域研の前身である。

国立大学法人化にともない、国立民族学博物館が人間文化研究機構に統合されたため、地域研究の全国的な再編に関わる問題は同機構内に設けられた「地域研究推進懇談会」で検討されることになり、①政策的・社会的ニーズをふまえた地域研究の推進、②学術的な研究のネットワーク化支援をめざした人間文化研究機構への「地域研究推進センター」の設置、③情報・資料の共有化をめざした京都大学への「地域研究統合情報センター」の設置からなるわが国の地域研究推進体制の整備方針がまとめられた。

この方針に沿って、京都大学から「地域研究統合情報センターの新設」が2006年度特別教育研究経費の要求事項として提出され、科学技術・学術審議会学術分科会の研究環境基盤部会および総合科学技術会議でのヒアリングを経て、2006年4月、京都大学に全国共同利用施設（試行）として設置されたのが地域研である。前身である国立民族学博物館が大学共同利用機関として設置されていたため、地域研は当初から全国共同利用機能を備えた研究組織として制度設計が図られていた。その後、2007年8月に開催された科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会国立大学法人運営費交付金の特別教育研究経費に関する作業部会のヒアリングを経て「正式に全国共同利用の組織とすることが適切である」との結論が得られ、2008年度から（試行）を外して正式の全国共同利用施設として認められた。

この2008年度は、全国の国立大学附置研究所や学内研究施設としての研究センターのあり方をめぐっ

て、科学技術・学術審議会で検討が始められた年でもあった。その検討結果にもとづいて、2008年7月には学校教育法施行規則が改正され、国公立大学の研究施設を文部科学大臣が共同利用・共同研究拠点として認定するという新たな制度が導入されることとなった。大学に附置された研究所と大学が設置する研究センターというこれまでの枠組みに対して、文科大臣が認定する共同利用・共同研究拠点としての研究所・研究センターおよび大学が設置する研究所・研究センターとに区分するという制度の導入である。地域研は、この制度変更に対応せざるをえなくなり、申請の準備に着手した。申請にあたっては、研究者コミュニティからの支援ないしは要望が必要となり、関連研究組織への依頼を行うとともに、申請に至るには学内でのさまざまなステップを経る必要があった。新たな制度のもとでの拠点認定は2009年度になってからであったが、地域研は全国共同利用施設として認められたばかりであったため、新たにヒアリングをうけて、2009年6月、正式に共同利用・共同研究拠点として認定されることとなった。2006年度の地域研発足に向けた関係諸組織の支援、2008年度の全国共同利用施設認定への支援、2009年度の拠点認定への支援というように、ほぼ2年ごとに組織編成のための申請・審査が繰り返された。そのたびに、関連する諸組織の支援に支えられたことで地域研の今日があるといえよう。

上記のように、何度かの制度面での変遷があったものの、地域研の研究組織は当初から全国共同利用施設として設計されていたため、発足当時から現在に至るまで組織面での大きな変更はない。研究組織としての活動は、「地域相関」「地域情報資源」「高次情報処理（地域情報学）」の3つの研究部門によって設立当初から推進されている。国内客員研究部門は2007年度から客員教員の配置が始まった。国外客員研究部門への教員配置は2008年度から開始し、国際交流委員会を通じて公募されている。また、さまざまな外部資金によって若手研究者を研究員として採用し、その育成を図っている。

地域研発足前後の大きな課題は、地域研究企画交流センターが所蔵していた「京セラ文庫『英国議会資料』」の移転であった。京都大学は、その所蔵施設を附属図書館の地下書庫に新たに設置して、地域研が

その管理と利用を担うことになった。施設の整備や図書
の整理が終了し、京セラ文庫「英国議会資料」の
開設式が挙行されたのは2006年11月21日である。その
後、学内資金によって同年度内に同資料の19世紀分
のウェブ版を、2007年度には20世紀分のウェブ版を導
入して、全国の研究者・学生に開かれた共同利用型
の資源としてこの資料を活用できる体制を整えること
ができた。さらに、人間文化研究機構との共同研究や
学内資金により、原本の地図・図版などのデータベ
ース化も進めた。

地域研究企画交流センターから継承したもう一つの
課題は、地域研究体制の再編・整備の検討の過程で
生まれ、全国の地域研究関連組織の連携・共同を目的
として2004年に発足していた「地域研究コンソーシ
アム (JCS)」の運営であった。地域研は、同センター
が担っていたコンソーシアムの事務局機能を継承し、
設立以来その事務局を務めて現在に至っている。事
務局の運営は地域研の全国共同利用機能の一つとし
て位置づけられており、地域研究コンソーシアムが実
施する研究会、シンポジウム、若手研究者育成などさ
まざまな事業を全国の地域研究関連組織と共同して
実施している。ほぼ週刊頻度で「地域研究メールマ
ガジン」を配信し、地域研究コンソーシアムの学術誌
『地域研究』を2007年度から再刊し、その発行にも尽
力している。また、2011年度に発足した「地域研究コ
ンソーシアム賞」の設置にも貢献した。

稲盛財団が京都大学に寄贈した「稲盛財団記念館」
の2階に、吉田キャンパスの仮住まいから全研究スタッ
フと支援スタッフが移転し、事務担当者が東南アジア
研究所等事務室 (同記念館1階) に移転したのは2008
年12月である。ここは、東南アジア研究所やアフリカ
地域研究資料センター、大学院アジア・アフリカ地域
研究研究科が所在するところともなり、地域研の移転
にともなって地域研究に関連する学内の主要な組織が
一カ所に集まることとなった。全国の地域研究の推進
を担う地域研としては、この移転を機会に一層の学内
協力体制を整え、同記念館を共同利用・共同研究の
拠点施設として活用できるようになった。

共同利用・共同研究拠点化に対応し、共同利用研
究における公募審査法や成果評価法の透明性を高め
るとともに、より適正な外部評価を受けるべく、2009
年度には内規を含めて委員会の位置づけなどを明確
化した。これにより、2010年度より開始された共同利
用研究が、地域研の拠点ミッションに沿い、より実り
多いものとなることを企図した。さらに、2009年度末

に実施した外部評価の結果を受け、2010年度から相
関型地域研究と情報学を両輪とする「地域情報学プ
ロジェクト」を5年計画のセンター内プロジェクトとし
て発足させた。設立から5年を経て、地域研ならではの
研究活動成果を発信する体制をようやく整えるに
至った。

2015年度の成果としては、関連型地域研究の成果
としてCIAS叢書の継続刊行、さらにCIAS叢書サブシ
リーズとして京都大学学術出版会から「情報とフィール
ド科学」ブックレット3冊、青弓社から「関連地域
研究」2冊、京都大学学術出版会から「災害対応の地
域研究」2冊を刊行したことが挙げられる。また、地
域研究を支援する情報システムとして、研究資源の
データベース化と公開を支援するMyデータベース、
そこに蓄積されたデータの高度利用を支援するREST
型APIなどの情報システムの改良を進めた。さらに、
ネットワーク上に分散している地域研究関連データ
ベースの共有を目指した「地域研究資源共有化デー
タベース」は、地域研、京都大学東南アジア研究所、
国立民族学博物館、総合地球環境学研究所、北海道
大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大
学アジア・アフリカ言語文化研究所、カリフォルニア
大学バークレイ校東アジア図書館の計51データベース
の共有化を実現した。地域研は、京都大学が全学的
に掲げる「先端的、独創的、横断的研究」の推進に
寄与しつつ、共同利用・共同研究拠点として着実な
歩みを重ね、2015年度に実施された共同利用・共同
研究拠点の期末評価においてA評価を得て、第3期中
期目標期間においても拠点としての機能を継続するこ
ととなった。

2 組織概要

1 運営組織

地域研究統合情報センター（地域研）は、「地域研究における情報資源を統合し、相関型地域研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供すること」（京都大学地域研究統合情報センター規程第2条）を目的に設置された。この設置目的を遂行するために、京都大学は、発足前の地域研設置準備委員会において以下のような設置理念を掲げている。

1. 京都大学の基本理念ならびに近年における地域研究の発展を踏まえ、国内外の地域研究への学術的社会的要請に応えるために、世界の多様な地域を対象とした地域研究の研究推進・情報拠点として地域研究統合情報センターを設置する。
2. 京都大学は、「全国共同利用研究を使命とする附置研究所や研究センターの活動を通じて、全国の研究者に開かれた研究拠点としての機能をさらに発展させる」という中期目標に沿って、地域研究統合情報センターを全国共同利用施設として設置し、国内外の地域研究コミュニティに開かれた研究拠点とする。
3. 京都大学がアジア・アフリカ地域等を対象にこれまで築いてきた地域研究の蓄積と伝統に、あらた

に地域研究統合情報センターの研究活力を加えて地域研究の一層の推進を図る。

これらの理念に沿って、地域研は後述する3つの研究部門、2つの客員研究部門および図書室からなる研究組織で発足した。また、組織運営の全般にわたる議決機関・協議機関として、協議員会、運営委員会、教授会が設けられている。

独立部局としての意思決定を担う教授会は2015年5月に協議員会承認事項として発足し教授・准教授により構成され、地域研の教育研究活動全般についての検討を行っている。

なお、教授会発足以前は、地域研教員全員で構成する教員会議および地域研究専門部局である東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科から選出された兼務教員7名を加えた拡大教員会議を組織し、共同利用・共同研究拠点やその他の研究活動あるいは部局間の連携に関する審議・検討を行っていた。

組織運営にとっての重要事項を審議決定する、学内関連部局から選出された協議員と地域研教員からなる協議員会および2010年4月より共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の

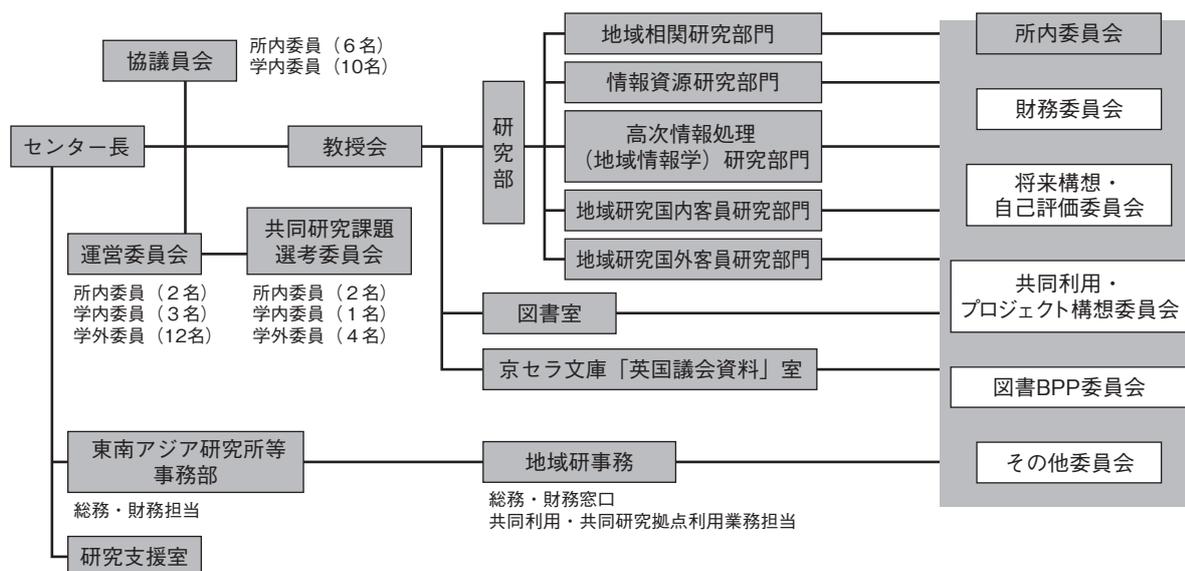


図 I-1 地域研究統合情報センター組織図

推進拠点」に認定されたことに伴う、共同利用・共同研究拠点の企画・運営を担う学内外の地域研究者と地域研教員で構成される運営委員会が、地域研の活動全般にわたる審議機関として組織されている。

独立した事務部はなく、東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科およびアフリカ地域研究資料センターとともに4部局担当の事務部として東南アジア研究所等事務部が設置されており、地

域研を担当する再雇用職員が配置されている。

なお、全国の地域研究関連組織の連携・協力を推進するために、地域研は、2004年に発足した地域研究コンソーシアム（JCS）の事務局を務めており、その事務局を担う教員・事務補佐員を措置している。この他、研究活動や運営に関わるセンター内委員会を設けて業務の分担体制をとっている。

2 研究部門

地域研は、設置目的に沿って3つの研究部門と2つの客員研究部門を設置している。各研究部門には、特定の地域を対象に研究する地域研究者と情報学の手法を応用して地域研究に迫ろうとする研究者が配置され、各スタッフが対象としてきたそれぞれの地域に関する研究を深化するとともに、共同研究を通じて、相関型地域研究の推進や地域情報資源の共有化、地域情報学の構築に向けたさまざまなコラボレーションを推進している。

1. 地域相関研究部門

グローバル化の進展のもと、地域間の比較や地域横断的な課題設定による地域研究（相関型地域研究）の必要性が高まっている。この部門では、国内外の地域研究機関との連携を強化し、地域間の比較研究を軸にした共同研究を推進するとともに、多様な媒体を利用した研究成果の公開を行う。教授1名、准教授2名、助教1名が配置されている。

教授	Wil de Jong	熱帯林管理、自然資源管理
准教授	帯谷 知可	中央アジア地域研究、中央アジア近現代史
准教授	村上 勇介	ラテンアメリカ地域研究、政治学
助教	中山 大将	北東アジア地域研究、サハラ以南太史、農業社会史、移民史

2. 情報資源研究部門

多様な形態を含む地域研究関連情報を活用する地域研究では、情報資源の概念を深化させ、地域研究コミュニティと研究対象社会の双方がともに情報資源を共有できるシステムの構築が求められている。この部門では、各地域の情報資源の体系的な収集、その蓄積・加工・発信方策の検討、地域研究情報資源の横断的活用に関する研究を行い、地域情報資源の分

散型共有化システムを開発する。教授1名、准教授2名、助教1名が配置されている。

教授	貴志 俊彦	日中関係史、東アジア情報・通信・メディア史研究、移民研究
准教授	西 芳実	東南アジア地域研究、多言語・多宗教地域の紛争・災害対応過程
准教授	山本 博之	マレーシア地域研究、イスラム教圏東南アジアの現代政治史
助教	谷川 竜一 (2015年9月まで)	アジア近現代都市・地域空間論、建築史・都市史

3. 高次情報処理研究部門

地域研究に関する多岐・多様な情報資源を対象に、情報処理の高度化や高精度化に関する研究を行うとともに、情報学的手法を導入して、情報学と地域研究のコラボレーションによる新しい研究パラダイムの確立をはかり、学際領域としての地域情報学の構築を推進することを目的としている。教授2名、准教授1名、助教1名が配置されている。

教授	原 正一郎	情報学
教授	林 行夫	東南アジア民族誌学、宗教と社会の地域研究
准教授	柳澤 雅之	生態史、ベトナム地域研究
助教	亀田 克宙	情報学

4. 国内客員研究部門および国外客員研究部門

相関型地域研究の推進、地域情報資源の共有化、地域情報学の構築のためには、国内外の研究機関との協力・共同が不可欠となる。国内客員研究部門では、以下の教授2名、准教授2名が就任している。

教授	大矢根 淳	災害社会学 (専修大学人間科学部社会学科教授)
----	-------	----------------------------

教授	松田 正己	社会医学
	(東京家政学院大学現代生活学部健康栄養学科教授)	
准教授	村上 薫	トルコ地域研究、ジェンダー論
	(日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター主任研究員)	
准教授	北本 朝展	メディア情報学
	(国立情報学研究所コンテンツ科学研究系准教授)	

国外客員研究部門では、2015年度は以下の1名を招へいした。

准教授	Gaia Caramellino	招へい期間	2015年
	(イタリア・トリノ工科大学建築デザイン学科上級研究員)		8月1日～10月31日

3 図書室

地域研図書室は、京都大学図書館機構に属する部局図書室として、2007年3月に、工学部4号館（現総合研究2号館）地下1階に開設され、地域研の稲盛財団記念館への移転に伴って2008年12月に同記念館1階に移転した。所蔵資料は書庫およびマイクロ資料室（東南アジア研究所と共用）に保管され、受付カウンターは共通資料室（東南アジア研究所と共用）内に置かれている。

地域研図書室は、共同利用・共同研究拠点としての機能を高めるべく、またセンター内部で進めるプロジェクト（関連地域研究プロジェクト、地域情報学プロジェクト、災害対応の地域研究プロジェクト、地域研究方法論プロジェクト）を支援するために、京都大学における地域研究関連部局、特に東南アジア研究所および大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と連携しつつ、所蔵資料の拡充に努めている。

図書室の運営は図書BPP委員会が担当している。また、地図資料の共同管理や共通資料室・マイクロ資料室の運用について検討するため、東南アジア研究所と共同で共通資料室運営委員会が設置されている。

図書室のホームページ：<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/library>

1. 所蔵資料

所蔵資料は、旧国立民族学博物館地域研究企画交流センター（民博地域研）が所蔵していた図書、雑誌、マイクロ・フォーム、地図、映像資料などを基盤に、中東、中央アジア、ラテンアメリカなどについて比較的まとまった貴重なコレクションを形成している。また、アメリカ、イギリス、旧ソ連などの外交・政治文書や国際関係分析資料、植民地等関係資料など、系統的な収集にも努めている。雑誌については、政治学、国際関係論などの領域を中心に、基本的な欧文雑誌が大半を占めている。この他に、中央アジアや中東地域の国別地図、エジプト映画・インド（タミル語）映画・タイ映画、マレーシア映画などの映像資料、世界の諸

地域の希少資料のデジタル複製版など、多様な情報資源が含まれる。

また、2008年度には、日本における地域研究のパイオニアの一人である故石井米雄京都大学名誉教授の約1万4千冊におよぶ蔵書の一括寄贈を受けた。東南アジア研究のみならず、宗教研究や地域研究の発展に関する貴重な蔵書であり、現在、整理を進めている。

所蔵資料の概要は以下の通りである（2016年3月末、登録済のみ）。

- ・ 図書：総冊数（所蔵ID数）57,169点（うち和書：7,432点、洋書：49,737点）（マイクロフィルム約5,200リール、マイクロフィッシュ約20,000枚を含む）
- ・ 雑誌：総タイトル数1,406点（うち和雑誌557点、洋雑誌849点）
- ・ 映像資料：約2,000点
- ・ 光・磁気媒体資料：約600点
- ・ 地図：3,234枚

地域研の所蔵資料のうち最大のコレクションである英国議会資料約1万3千冊（下院文書1801～1986年、上院文書1801～1922年）については、「京セラ文庫『英国議会資料』」として附属図書館地階で公開している。また、英国議会資料下院文書のウェブ版House of Commons Parliamentary Papers（18世紀～現在）も導入されており、図書室を始め、学内LANでの利用が可能である。同文庫については、II. 1. 3を参照。

2. 2015年度の主な活動

- (1) 資料収集：2015年度は、地域研究関連の写真集および地域研スタッフの著作物を重点的に揃えたことが特記される。
- (2) 資料整理：故石井米雄京都大学名誉教授の個人蔵書については、書庫への配架および請求記号の付与に加えて、登録作業を継続した。
- (3) ホームページの改良：図書室の広報充実の観点から、図書室HPの大幅なりニューアルの第一歩として、

主な所蔵資料コレクションについて地域研教員による解説を掲載した。

(4) **未登録資料の登録**：民博地域研から移管された資料のうち未登録のものについての登録作業を継続している。

(5) **データベース化**：2010年度より、情報資源の共有化の観点から「マレーシア映画データベース」「トルキスタン集成データベース」「タイ映画データベース」を公開している。

3. 月別利用者数

図書室の月別利用者数は次の表の通り。

2015年度月別利用者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
学内	94	105	72	87	93	51	65	61	34	37	64	38	801
学外	2	0	1	0	3	1	2	10	0	2	2	0	23
計	96	105	73	87	96	52	67	71	34	39	66	38	824

4 運営委員会

全国共同利用施設（試行）として出発した地域研究統合情報センター（地域研）は、全国の地域研究コミュニティの意見を反映し、かつ広くコミュニティに開かれた運営が可能となる体制を当初から整えてきた。また、2008年4月から全国共同利用施設となり、さらに、2010年4月には共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」に認定された。地域研究統合情報センター規程に基づき、学内外の地域研究の識者によって組織される運営委員会がその機能を担っている。運営委員会は、センター長の諮問による実質的な審議機関として、共同利用・共同研究拠点としての研究の企画や実施、出版、地域研究コンソーシアム（JCAS）などのネットワーク構築等地域研の運営にかかわる重要事項について検討を行っている。

2015年度の運営委員会は、学外の有識者12名、学内の地域研究者3名、地域研教員2名の17名で構成された。学外委員には、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、東京大学東洋文化研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、大阪大学大学院人間科学研

究科、長崎大学熱帯医学研究所、青山学院大学文学部、上智大学総合グローバル学部、日本貿易振興機構アジア経済研究所、国立民族学博物館、国立情報学研究所など、国内の主要な地域研究関連研究教育機関の教員・研究員に、また学内からは学術情報メディアセンター、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科および東南アジア研究所の教員に委員を委嘱している。

2015年度は、第1回（2015年7月13日）、第2回（2016年3月2日）の2回の運営委員会が開催され、稟議による運営委員会が2回行われた。

各委員会会合での主要議題は、第1回が2014年度の共同利用・共同研究拠点の実施報告、2015年度の共同利用・共同研究拠点の実施計画、規定の制定・改廃、2015年度予算、第2回が次期運営委員会委員および共同研究課題選考委員会委員の構成などである。委員会では、地域研の年度予算の執行計画や決算、概算要求事項などの報告が行われ、地域研から提出した共同利用・共同研究拠点としての研究活動、出版、情報資源共有化、さらに地域研究コンソーシアムにおける役割などについて、忌憚のない、かつ建設的な議論が交わされている。

5 協議委員会

協議委員会は、地域研究統合情報センター規程に基づき、地域研究統合情報センター（地域研）の運営の重要事項にかかわる審議機関として設置されている。2015年度の協議委員会は、文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、人文科学研究所、地球環境学学、アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所、学術情報メディアセンター、図書館機構、生

存圏研究所、理学研究科、経済学研究科の学内他部署から10名、地域研からセンター長、教授全員、および互選による准教授2名の計16名の協議員によって構成された。

協議委員会は、「協議委員会から教授会に付託又は委任する事項に関する申し合わせ」に基づいて日々の運営にかかわる事項は教授会に付託または委任しているも

の、その他の運営にかかわる重要事項について審議・決定し、地域研という小規模なセンターの研究活動と運営を支えるという重要な機能を持っている。

2015年度には、第1回（2015年7月23日）、第2回（2016

年2月5日）の2回の協議員会が開催された。各回の主要議題は、センター長候補者の選考、予算・決算、概算要求事項、規定の制定・改廃などである。

6 スタッフ一覧

地域関連
研究部門 教授 Wil de Jong
准教授 帯谷 知可
准教授 村上 勇介
助 教 中山 大将

情報資源
研究部門 教授 貴志 俊彦
准教授 西 芳実
准教授 山本 博之
助 教 谷川 竜一（2015年9月まで）

高次情報処理
研究部門 教授 原 正一郎
教授 林 行夫
准教授 柳澤 雅之
助 教 亀田 堯宙

地域研究
国内客員
研究部門 客員教授 大矢根 淳
(専修大学人間科学部社会学科教授)
客員教授 松田 正己
(東京家政学院大学現代生活学部健康栄養学科教授)
客員准教授 村上 薫
(日本貿易振興機構アジア経済研究所
地域研究センター主任研究員)
客員准教授 北本 朝展
(国立情報学研究所コンテンツ科学研究系准教授)

兼務教員

東南アジア研究所 教授 三重野 文晴
准教授 甲山 治
小林 知
アジア・アフリカ 教授 東長 靖
地域研究研究科 准教授 片岡 樹
高田 明
山越 言

研究員等

特任教授／特任研究員 柴山 守
白眉准教授 王 柳蘭
特任助教／特任研究員 山田 協太
特任研究員 Andrea Yuri Flores Urushima
教務補佐員 大岡 宰
須羽 新二
事務補佐員 赤松 陽子
伊藤 ゆかり
大鹿 梨恵
片岡 稔子
川島 淳子
友井田 貴砂子
中村 佳代
西 賀奈子
二宮 さち子
引地 尚子
山口 敏朗

【東南アジア研究所等事務部】（2016年3月31日現在）

事務長 石田 忍
事務長補佐 豊田 和彦
総務掛 掛長 白石 賢一
主任 山川 美恵
再雇用職員 富坂 進
事務補佐員 日高 未来
事務補佐員 中島 由貴
教務掛 掛長 福村 輝美
主任 神田 愛子
事務職員 山崎 景

3 運営経費

地域研究統合情報センター（地域研）の主要な運営経費は2006年度概算要求に基づいて措置された特別教育研究費であったが、2011年度からは特別経費の扱いとなり、2015年度には21,227千円が措置された。また地域研が主体部局を務める学知創生ユニットにかかる経費として20,800千円の特別経費が措置されたことで、2015年度の特別経費の総額は42,027千円となった。

2015年度は、共同利用・共同研究拠点として共同研究の実施、共同利用に供する京セラ文庫「英国議会資料」室の維持・管理と同資料の整備、地域研究コンソーシアム（JCAS）を通じた全国の地域研究関連組織の連携・共同の推進など、引き続き共同利用・共同研究拠点に関連する予算の確保を運営の基本として経費管理を行った。

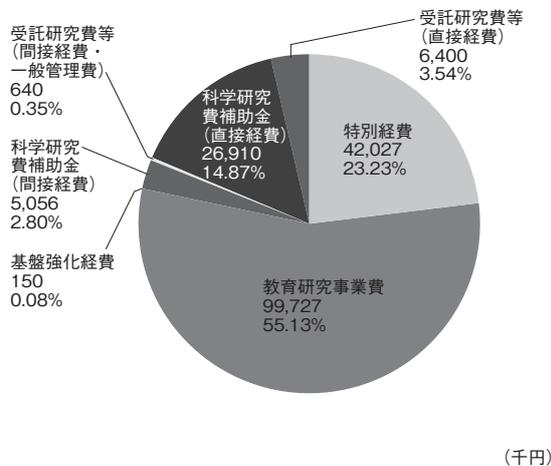
図I-2および表I-1に示したように、2015年度の地域研予算額は、総額180,910千円、その内、科学研究費補助金や受託研究費などの直接経費を除く運営経費は計147,600千円で、2014年度にくらべて約21,106千円の増額となった。科学研究費補助金は、2014年

度は65,000千円に対して、2015年度は26,910千円となった。収入のうち、直接経費を除く財源について一般管理費および研究経費として支出された経費別支出額を示したのが図I-3および表I-2である。

2015年度の研究経費の支出総額は図I-3および表I-2に示したとおり約140,039千円となった。全国共同利用経費として支出されたものには、共同利用・共同研究拠点推進のための経費の他に地域研究コンソーシアム事務局運営に関連する経費などが含まれており、英国議会資料関連経費および資源共有化のための情報基盤整備なども含めて総計すると、約26,386千円が共同利用・共同研究拠点に係る経費として支出された。

図I-2や図I-3に示した研究経費以外に、科学研究費や受託研究費などの直接経費や寄付金も地域研の研究推進に大きな役割を果たしている。

科学研究費による研究課題のなかには、情報資源共有化や地域間の比較研究を課題として掲げているものがあり、これらの課題の実施が地域研のミッション遂行にあたって大きな貢献を果たしている。



図I-2 2015年度地域研予算

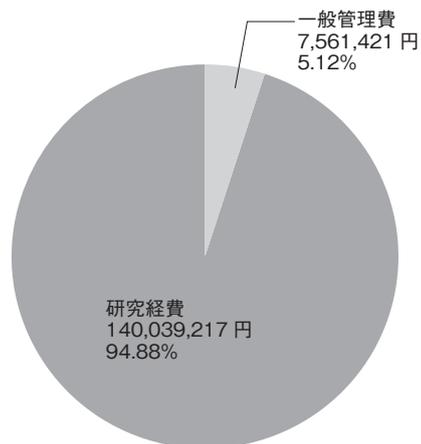
表I-1 2015年度地域研予算 (円)

特別経費	42,027,000
教育研究事業費	99,727,000
総長裁量経費	0
基盤強化経費	150,000
研究支援人材経費	0
科学研究費補助金間接経費	5,056,638
受託研究費等間接経費・一般管理費	640,000
小計	147,600,638
科学研究費補助金 (直接経費)	26,910,000
受託研究費等 (直接経費)	6,400,000
その他 (寄付金)	0
直接経費の小計	33,310,000
総計	180,910,638

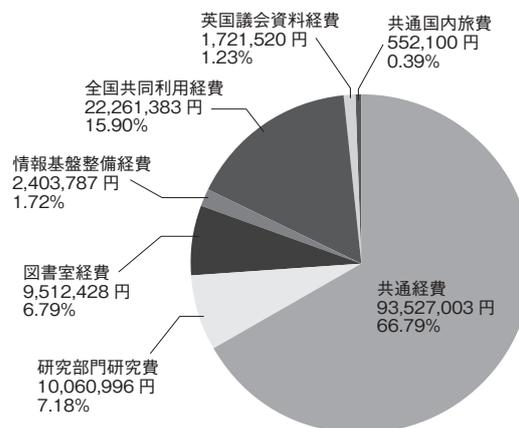
表I-2 2015年度一般管理費・研究経費の費目別支出額 (円)

一般管理費	小計	7,561,421
	共通経費	7,382,942
	共通国内旅費	178,479
研究経費	小計	140,039,217
	共通経費	93,527,003
	研究部門研究費	10,060,996
	図書室経費	9,512,428
	情報基盤整備経費	2,403,787
	全国共同利用経費	22,261,383
	英国議会資料経費	1,721,520
	国際シンポ開催経費	0
	共通国内旅費	552,100
総計		147,600,638

(直接経費を除く)



図I-3 2015年度経費別支出額
(直接経費を除く)



図I-4 2015年度研究経費の費目別支出額
(直接経費を除く)

II. 研究活動の概要

1. 共同利用・共同研究拠点としての活動
 - 1 共同利用・共同研究拠点
 - 2 地域研究コンソーシアムの運営体制と活動
 - 3 英国議会資料（BPP）
2. 情報資源共有化に向けた活動
 - 1 地域情報学の構築に向けた活動
 - 2 データベースや情報解析ツール等一覧
3. スタッフの研究活動
 - 1 個人研究
 - 2 外部資金による研究活動
 - 3 受賞
4. シンポジウム・ワークショップ・研究会等



1 共同利用・共同研究拠点としての活動

関連型地域研究、情報資源共有化の推進および地域情報学の構築をセンターのミッションとする地域研は、共同利用・共同研究拠点として、次の4つの柱を中心に研究活動を展開してきた。

1. 共同研究による研究推進
2. 地域研究情報資源の共有化
3. 英文叢書シリーズなど地域研究の国際発信の強化
4. 地域研究コンソーシアムなど地域研究ネットワーク化の促進

また、公募研究や公募原稿出版の導入、国内外の地域研究者が参加しうる双方向的な情報プラットフォームの構築など、活動の企画、実施、成果刊行と評価のすべての段階において開かれた運営を図るといふ基本的方針に沿って活動を行っている。

共同研究は、研究代表者の所属にかかわらず完全に公募制度により採用されるプロジェクトである。

1 共同利用・共同研究拠点

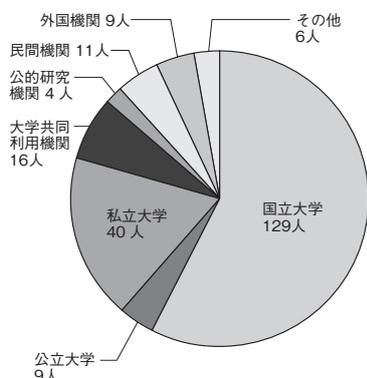
地域研は、共同利用・共同研究拠点として、関連地域研究プロジェクト「〈地域〉を測量（はか）る：21世紀の『地域』像」、地域情報学プロジェクト「地域情報学の展開」、災害対応の地域研究プロジェクト「強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性」、地域研究方法論プロジェクトの4つのプロジェクトのもとで、国内外の地域研究機関と連携して共同利用・共同研究を推進してきた。それぞれのプロジェクトのもとで、複数の複合同共同研究ユニットと個別共同研究ユニットをツリー状に配置し、研究対象となる地域や分野を超えた共同研究を実施している（図Ⅱ-4）。複合同共同研究ユニットの研究テーマは地域研究コミュニティの助言および要請を受けてセンターが設定し、個別共同研究ユニットはいずれかの複合同ユニットの研究

テーマのもとに位置づけられる。なお、複合同共同研究ユニットは関連する個別共同研究ユニットに基盤を置きながら運営される。

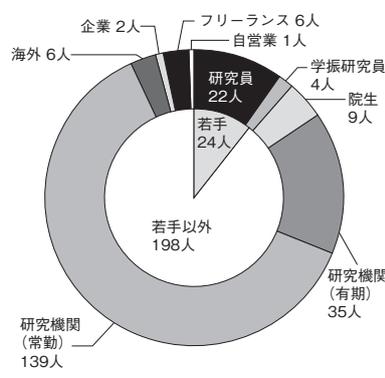
上記4つのプロジェクトは、いずれも基本的に6年間の研究期間により研究が進められている。共同研究員の所属については、図Ⅱ-1及び図Ⅱ-2に示したとおりである。

地域研の特色のひとつとして、地域・分野横断型の関連型地域研究の実施があげられる。共同研究員の研究対象地域については、図Ⅱ-3に示した。

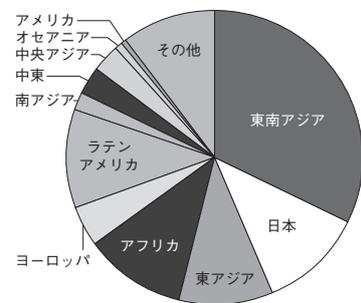
なお、2016年4月24日には、稲盛財団記念館にて、全ユニットによる共同利用・共同研究の2015年度成果報告会が行われた。



図Ⅱ-1 共同研究員所属分布①



図Ⅱ-2 共同研究員所属分布②



図Ⅱ-3 共同研究員の研究対象地域

1. 関連地域研究プロジェクト 〈地域〉を測量（はか）る：21世紀の「地域」像（統括班）

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

1. ネオリベラリズム以後の新興民主主義国の多様性：ポスト社会主義国を軸として
2. 体制転換における軍と政党：中東とラテンアメリカの比較研究
3. 中央アジアの社会主義的近代化と現在：イスラームとジェンダーの観点から

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

1. 現代アフリカ社会における植物利用の持続可能性と地域植生の管理
2. 熱帯森林 - 都市関係の社会生態学的比較研究

3. 宗教実践の時空間と地域

1. 仏教をめぐる日本と東南アジア地域：断絶と連鎖の総合的研究

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開（統括班）

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

1. フィールドノートを対象としたテキストマイニングに関する研究
2. 地域研究における時空間情報の実践的活用

2. 非文字資料の共有化と研究利用

3. CIAS所蔵資料の活用

1. 1950・60年代の東南アジア・ムスリムの社会史

3. 災害対応の地域研究プロジェクト 強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統括班）

1. 災害・紛争と復興

1. ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究

2. 記録・記憶と社会の再生

1. 危機からの社会再生における情報源としての映像作品：東南アジアを事例として
2. 地域の集会的記憶の再編を支援する「メモリーハンティング」の展開と防災・ツーリズムへの応用
3. メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態

4. 地域研究方法論プロジェクト

1. 地域研究方法論

図Ⅱ-4 共同利用・共同研究による4つのプロジェクトと複合および個別共同研究ユニットの構成

1. 関連地域研究プロジェクト 〈地域〉を測量（はか）る： 21世紀の「地域」像（統括班）

◆研究期間

2010～2015年度

◆代表

林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

国家をはじめ、人びとはなんらかのシステムのなか
に暮らしている。近代は、国民国家を頂点とするピラ
ミッド型の構造をとり、それまでに形成されていた地
域世界を国家に回収するように再編してきた。だが、
国家や地域の境界を越える人びとの活動が顕著と
なった今日、既存の統治システムの境界を跨ぐように、
あるいは相互に重なるようにしてネットワーク型の社
会圏や実践的な共同体を生んでいる。さらに、そのよ
うな関係や活動を基盤とする〈地域〉世界も生まれて
いる。こうした現象は、従来の国家統治システムから
すれば周縁的な現象であるが、制度の隙間に生じた
世界や境域における現象を理解するには新たな「もの
さし」が必要になる。地域社会を「包摂と排除」の関
係から捉え、〈宗教〉からみた時空間マッピングを作
成することや新自由主義の浸透と社会への影響に関し
て地域間比較研究を行うことは、新たな「ものさし」
を探る試みとなる。また、こうした社会政治文化的行
為の地盤をなす地球規模の生態システムを個々の生
活世界を基礎づける「単位」として再検討し変動す
る自然資源と地域社会を再考することは、そのような
「ものさし」をより包括的なものにする作業を導く。す
なわち、複数の個別事例の相関と相対化を通じて、互
いに異なる構えをもつ自然科学のアプローチと人文社
会科学の思考を交差させて統合する試み、これが本
統括班の目的である。国家を超え、あるいは国家間を
架橋するような現象の一方で、地球上の国家の数は
減っていない。新たな国家は新たな内実を創成して
いるかもしれない。従来の国家もその仕組みを変えて
いるかもしれない。いずれの場合でも、既存のシステム
の周縁に視座を据えることで、制度の中心部分を新た
な諸相のもとに照らすことになる。

研究報告検討会を3回実施した。地域研10周年を記
念するワークショップを本統括班の成果報告とするこ
ととなり、各メンバーが担当する複合ユニットの成果
を抽出するかたちで、「21世紀の国家」「国籍と国境」「生
態区分と国家の境界」「制度と実践宗教」の4点につ
いて議論を重ねた。法制度をはじめとする秩序を形成
し人間の諸活動を統御するシステムとして整備されて
きた国家と、国家がうまれる以前から人間の情動と社
会を秩序づけてきた宗教を両極におき、領域をもって
国境、国籍をうみだしてきた国家の世界秩序のなかで
の位置づけ、および国家間でのかかわりが築く現実、
国境を超える生態系をめぐる地域の生業と社会のあり
かたをとらえることにより、立体的に現代世界の抱え
る諸問題を浮き彫りにしようとした。

1. 相関地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

村上 勇介 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

末近 浩太 (立命館大学国際関係学部)

仙石 学 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

帯谷 知可 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

1980年代以降、世界各地に波及し、各々の社会のあり方を変動させたグローバル化は、今日、踊り場にさしかかっている。一方では、中東革命を筆頭に体制移行・民主化が現在進行形で進んでいる地域・国があり、新自由主義経済路線は基調として様々な地域に影響を与え続けている。情報化も引き続き世界各地での変容を加速させている。だが他方では、「勝者」と「敗者」が明瞭となり新自由主義路線の見直しや反対が広まっているほか、中央アジアなどの旧ソ連圏での権威主義体制の存続や、中東民主化にともなう国家のイスラーム化、ラテンアメリカにおける民主主義体制の後退例などが観察される。本研究は、グローバル化の潮流が前世紀末のような支配的、一方的な傾向ではなくなっている今世紀初頭の位相について、社会変動の中心的力学を生みだす国家社会関係の観点から分析し、今後を展望することを目的とする。実施にあたっては、体制移行・民主化、福祉、教育など、地域横断的な課題設定を行い、研究対象とする地域がことなる研究者から構成される個別共同研究ユニットを立ちあげ、地域間比較研究を基軸にする。

2015年度の 研究実施状況

個別共同研究ユニット毎に研究活動を行うとともに、個別共同研究ユニットを基盤とした研究活動として、シンポジウムを2回、ワークショップを5回、「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」研究会を2回実施した。

●第1回シンポジウム

2015年6月22日

(上智大学中央図書館棟9階921会議室)

テーマ「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題」

趣旨説明

・村上勇介「今世紀のラテンアメリカ政治：ネオリベラリズム期以降の政党政治を中心に」

第1部 安定的な政党政治とその課題

・舛方周一郎(神田外語大学外国語学部)「近年のブラジル政治における二大政党化への収斂と『幸運な自由化』の反転」

・馬場香織(日本貿易振興機構アジア経済研究所)「三大政党制の融解?：近年のメキシコ政治にみるPRDの危機と左派再編の可能性」

・安井伸(慶應義塾大学商学部)「形骸化の進むチリの民主主義：硬直した政党政治と投票率の低下」

第2部 格差や紛争に直面する民主主義

・千代勇一(上智大学イベロアメリカ研究所)「ポストネオリベラリズム期のコロンビアにおける政治の不安定化：国内紛争と和平プロセスの視点から」

・坂口安紀(日本貿易振興機構アジア経済研究所)「チャベスなきチャビスマ：権威主義化を強めるベネズエラ・マドゥロ政権」

・村上勇介「小党分裂化するペルー政治」

●第2回シンポジウム

2015年10月10日

(あすか会議室日本橋会議室 あすか4+5)

テーマ「BRICs諸国のいま：2010年代世界の位相」

・村上勇介「BRICsのいまを分析する意義」

・押川文子(京都大学名誉教授)「経済成長下のインド社会と政治：『中間層』と民主主義」

・宇山智彦(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)「権威主義ロシアの『帝国』化の賭け：旧ソ連諸国統合・反米主義・対中接近」

・渡邊真理子(学習院大学経済学部)「高度成長期後の中国の姿：開放をめざす経済政策と締め付ける政治」

・舛方周一郎「混迷化するブラジルの政治社会と世界経済の政治的トリレンマ」

●第1回ワークショップ

2015年6月1日

(京都大学稲盛財団記念館3階小会議室I)

Carlo Nasi (Universidad de Los Andes, Colombia) “El proceso de paz con las FARC en Colombia”

●第2回ワークショップ

2016年1月8日

(京都大学稲盛財団記念館3階小会議室II)

細野昭雄(JICA研究所)「ラテンアメリカにおける政策改革、産業構造の高度化と包摂的成長」

● 第3回ワークショップ

2016年1月23日

(京都大学地域研究統合情報センターセミナー室)

Enrique Peruzzotti (Universidad Di Tella, Argentina) “Del kirchnerismo al ‘macrismo’: legados, continuidades y rupturas”

● 第4回ワークショップ

2016年3月4日

(京都大学稲盛財団記念館3階小会議室)

原洋之介 (政策研究大学院大学) 「中所得国の罫」

● 第5回ワークショップ

2016年3月5日

(京都大学地域研究統合情報センターセミナー室)

Eduardo Nuñez (Instituto Nacional Democrático-Guatemala) “Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas”

● 「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第14回研究会

2015年9月12日

(京都大学稲盛財団記念館中会議室)

テーマ「新自由主義を促進するもの、妨げるもの」

- ・小森宏美 (早稲田大学教育・総合科学学術院) 「危機意識が支えるエストニアの『ネオリベラリズム』」
- ・馬場香織 (日本貿易振興機構アジア経済研究所) 「メキシコの労働法制改革：新自由主義初期に維持された労働法制はなぜ近年改革されたのか」
- ・松本充豊 (京都女子大学現代社会学部) 「台湾における自由化をめぐる政治」

● 「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第15回研究会

2016年1月9日

(早稲田大学早稲田キャンパス 16号館10階社会科学科室)

テーマ「新自由主義の受容過程の比較」

- ・上垣彰 (西南学院大学経済学部) 「経済移行過程におけるリベラル思想の受容：ロシアと中国との比較」
- ・安井伸 (慶應義塾大学商学部) 「ラテンアメリカにおける新自由主義の導入：チリの事例を中心にして」

成果

世界の幾つかの地域における近年の国家社会関係の変動を分析すると、各国の国内過程の動きが地域秩序の動向を強く規定する要因となっていることが共通していた。例えば、ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国など強国に翻弄されてきた中東では、20世紀の終わり頃には、アメリカ合衆国との同盟・敵対関係を基調とした二極化状況による一定の安定が醸成されていた。だが、今世紀に入ってからアメリカ合衆国の対テロ戦争の展開によって、そうした安定は徐々に揺らぎ、「アラブの春」によってその不安定化が決定的と

なった。「アラブの春」による権威主義体制の崩壊が民主化に帰結しないなか、域内外の各国が自らの利害のためにマキャベリスティックな介入・干渉を強め混乱が拡大し、シリアでの内戦の激化を契機として、「イスラーム国」という、近代以降に欧米が造ってきた「中東」のアンチテーゼが拡大した。

またEUとロシアに挟まれた中東欧は、冷戦終結後、EUやNATOとの結びつきを強めたが、今世紀に入り、ロシアの台頭、アメリカ合衆国とロシアの関係修復、EUの統一の乱れといった国際環境の変化が生じる。すると、経済社会変動を背景とする国内の政治勢力関係の変化にともない、EUとの協調にコンセンサスのあるバルト三国と、EUとは距離をおくチェコ、スロバキア、ハンガリー、ポーランドの違いが明確となり、冷戦終結後のEU接近という地域的な基調は消滅した。

地域的な基調の消滅という点では、ラテンアメリカでも、新自由主義改革路線の見直しや反対を求める声は今世紀に入り高まるなか、新自由主義派の国が残る一方、同路線の全面的な見直しを求める急進左派とその部分的修正を提起する穏健左派の三つの主要な潮流が生まれ、地域統合の動向にも大きく影響してきた。アメリカ合衆国の圧倒的な影響力の下での一定の方向性という20世紀の間に観察された基調はすでにない。

1. 相関地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

1. **ネオリベラリズム以後の新興民主主義国の多様性：ポスト社会主義国を軸として**

個別共同研究ユニット

- ◆研究期間
2015年度
- ◆代表
仙石 学 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)
- ◆メンバー
磯崎 典世 (学習院大学法学部)
上垣 彰 (西南学院大学経済学部)
小森 宏美 (早稲田大学教育・総合科学学術院)
月村 太郎 (同志社大学政策学部)
林 忠行 (京都女子大学現代社会学部)
村上 勇介 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

本研究課題は、2013年度から2014年度にかけて実施している地域研の研究ユニット「地域内多様性と地域間共通性の比較政治経済分析：ポスト社会主義国を軸として」の研究課題を発展させるもので、社会主義体制が解体した後の中東欧諸国の政治経済に現れている多様性について、特にネオリベラリズム的な政策実施の有無、政策実施時期の相違、およびリーマンショックやギリシャ経済危機などを経験した後のいわゆる「ポストネオリベラル」の時期の状況の相違に注目して検討を行うことを、主たる目的としている。中東欧のポスト社会主義国においては、エストニアのように早期からのネオリベラル的な政策を継続している国もあれば、ハンガリーのように一度はネオリベラル的な政策を実施しながらその後距離を置いている国、チェコやスロヴァキアのように21世紀に入ってからネオリベラル的な政策を実施した国、ポーランドのように「ポストネオリベラル期」に入って再度ネオリベラル的な政策を実施している国、そして南東欧やバルカンのようにネオリベラル的な政策とは距離を置いている国があるというように、歴史的経緯やおかれた国際環境において共通性の高い諸国の間でネオリベラル的な政策のあり方に相違があることが確認されている。このような多様化が生じた理由について、ネオリベラル的な政策の実施に形について、同じような多様化が確認できるラテンアメリカや東アジア諸国の事例

とも比較を行いつつ検討していくこととしたい。

2015年度の
研究実施状況

今年度は本研究ユニットと、村上勇介准教授が研究代表者となっている研究ユニット「体制転換における軍と政党：中東とラテンアメリカの比較研究」との共催により、従前より実施している「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」研究会を2回実施した。概要は以下の通りである。

●「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第14回研究会
2015年9月12日
(京都大学稲盛財団記念館中会議室)

- テーマ「新自由主義を促進するもの、妨げるもの」
- ・小森宏美「危機意識が支えるエストニアの『ネオリベラリズム』」
 - ・馬場香織(日本貿易振興機構アジア経済研究所)「メキシコの労働法制改革：新自由主義初期に維持された労働法制はなぜ近年改革されたのか」
 - ・松本充豊(京都女子大学現代社会学部)「台湾における自由化をめぐる政治」

●「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第15回研究会
2016年1月9日(早稲田大学早稲田キャンパス 16号館10階社会科学科室)

- テーマ「新自由主義の受容過程の比較」
- ・上垣彰「経済移行過程におけるリベラル思想の受容：ロシアと中国との比較」
 - ・安井伸(慶應義塾大学商学部)「ラテンアメリカにおける新自由主義の導入：チリの事例を中心にして」

成果

今年度は上記の通り、東欧とラテンアメリカに、同様の環境にある台湾を加えたネオリベラリズムのあり方の比較、およびロシア・中国とチリにおけるネオリベラリズムの導入のあり方の比較を行う研究会を実施した。1回目の研究会においては3カ国の比較を通して、現在ネオリベラル的な政策を進める理由はグローバル化やEU統合といった「共通要因」ではなく、それぞれの国における要因が重視されるというこれまでの議論が確認されると同時に、各国におけるナショナリズムとネオリベラリズムの関係、ネオリベラリズムと安全保障の関係、あるいは「リベラル」を要求しない新たなグローバルアクターとしての中国の存在とネオリベラリズムの関係などが議論の対象とされた。2回目の研究会においてはロシアとチリにその中国を加えたネオリベラリズムの流入の比較が行われ、チリでは軍事政権のもとでシカゴボーイズによりネオリベラル的

な政策が実施され、また中国は一党独裁のもと政策形成には外国人を関与させず政権寄りの（留学した）自国の経済学者を登用してきたのに対して、ロシアの場合は外国人専門家が政権内部に入り実質的に政策形成に関与したという相違があり、これがそれぞれの国において異なる形でネオリベラル的な政策が実施される背景になっていることが示された。ただしここでも、それぞれの国における「ネオリベラル」的なものの中身や、それぞれの政権とネオリベラル的なものを媒介するものについて議論が行われた。

1. 相関地域研究プロジェクト (地域)を測量(はかる):21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

2. 体制転換における軍と政党： 中東とラテンアメリカの比較 研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

末近 浩太 (立命館大学国際関係学部)

村上 勇介 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

内田 みどり (和歌山大学教育学部)

浦部 浩之 (獨協大学国際教養学部)

遅野井 茂雄 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

吉川 卓郎 (立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部)

住田 育法 (京都外国語大学外国語学部)

仙石 学 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

高橋 百合子 (神戸大学大学院国際協力研究科)

田中 高 (中部大学国際関係学部)

浜中 新吾 (山形大学地域教育文化学部)

林 忠行 (京都女子大学現代社会学部)

松尾 昌樹 (宇都宮大学国際学部)

目的

本研究は、2010年末からの「アラブの春」と呼ばれる政治変動を経た中東と、発展途上地域においてもっとも早く体制転換を経験したラテンアメリカを比較し、体制転換の過程とその分析枠組を系統的に究明することを目的とする。体制転換の過程を比較し、両地域における共通性と相違点を明らかにし、地域を超えた共通性や相違の有無を検証し、共通性や相違が発生する背景や条件、過程を探究する。そうした作業を行ったうえで、両地域の地域性について再考する。中東で体制転換が起きた国は、20世紀の後半に共和制への移行を経験した国々で、そこで成立した権威主義体制が、新自由主義を含むグローバル化の波の中で正統性を失っていた。開発モデルの破綻を背景にしたラテンアメリカの体制転換過程とは具体的な発現現象は異なるものの、体制転換の原因として、社会経済面での構造的な背景があることは共通している。そこで、本研究では、これまでの研究で体制転換において重要な役割を果たしたことが分かっている軍と政党に焦点を絞り、体制転換プロセスについて地域間の比較分析をより詳細に実施し、体制転換の背景と過程を究

明するとともに、今後の展望について考察をくわえる。

2015年度の
研究実施状況

中東に関する視点からのアプローチは、日本比較政治学会2015年度大会において「社会運動の比較政治学」と題した部会を組織し（6月28日）、国家・社会関係を規定する非公的アクターとしての社会運動の発生要因およびその政治的な帰結（民主化、内戦、再独裁化など）を規定する要因に関して、ラテンアメリカ、東南アジアの事例と比較する分析を行った。

他方、ラテンアメリカからの探究は、政治経済の今日的位相を検証する過程で、ラテンアメリカにおける政党のあり方を分析し、1970年代末から90年にかけての体制移行期の時期との比較そして軍をとりまく状況の違いについて分析する形で実施した。日本ラテンアメリカ学会西日本部会研究会において「低成長期ラテンアメリカの政治経済」を開催した（12月19日）ほか、ラテンアメリカの政軍関係を分析するうえで重要な事例であるコロンビア、アルゼンチン、グアテマラについて、専門家を招聘したセミナーを開催し（それぞれ6月1日、1月23日、3月5日）、体制移管と軍の関係性について検討した。

成果

方法論的な課題を探った中東を主軸とした比較分析では、従属変数としての政治的帰結の定義と操作化が困難であることがあらためて確認されたものの、従来の比較政治学の体制論が公的アクターを中心に議論されてきたことを踏まえると、社会運動の役割と意義を分析するための枠組みの整備が急務であり、また、社会学と政治学との接点の模索や従来の「政治」イメージの問い直しなどの契機となることが明らかになった。

体制転換過程における軍の役割については、両地域の間での体制転換期における政治経済社会や国際環境の違いにより相違がみられる。ラテンアメリカでは、半世紀以上にわたり地域で共通して追求されてきた「国民国家」建設をめざした国家主導型発展モデルの破綻状況、その破綻状況が軍政下で深刻化した情勢、アメリカ合衆国（カーター政権）による人権外交の逆風、といった要因から、軍は追われるように兵舎に戻った。

これに対し、中東で起きた「アラブの春」の過程では、主に2つの異なったあり方が観察された。ラテンアメリカと同様に、軍は「アラブの春」で動揺するこ

となる権威主義体制を支える要因であったものの、ラテンアメリカとは異なり、軍が統治全体に直接責任を持つことはなかった。第一のパターンは、軍の専門職業化が進んだ場合で、典型的にはエジプトである。専門職業化にともない、軍は政治を握る特定の個人との利害を異にする存在となった。第二のパターンは特定の個人の家産化（私兵化）が起きた場合で、リビアやシリアなどの例である。そうした違いから、「アラブの春」の後に、エジプトでは権威主義体制後の政治を支える政党が脆弱で無秩序化を前に軍が強い影響力を持ったのに対し、リビアやシリアでは個人の支配者とともに政権を追われ軍閥化するか、その擁護のために戦い続け、内戦を帰結した。そうした状況は、アメリカ合衆国、ロシア、ヨーロッパ、さらには中東の他の国など干渉しようとする勢力により、一層複雑となっている。

1. 関連地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

3. 中央アジアの社会主義的近代化と現在：イスラームとジェンダーの観点から

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

帯谷 知可 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

宗野 ふもと (国立民族学博物館)

中村 朋美 (京都大学大学院人間・環境学研究所)

村上 薫 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

和崎 聖日 (中部大学全学共通教育部)

Babadjanov Bakhtiyar (ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所)

目的

本研究は、科学研究費・基盤研究(B)「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族：『近代化』再考のための視座の構築」(研究代表者：帯谷知可、研究期間：2012～2015年度)の研究成果もふまえ、イスラームとジェンダーの観点からソ連体制下の中央アジアにおける社会主義的近代化の実態とそのソ連解体後の現在への影響を提示することを目的とした。さらに、それらの孕む問題群を近代化の再考につなげる、グローバルな意味を持つものと位置づけて、ソ連解体後の中央アジアにとっての近代化の意義を問い直すとともに、他地域を対象とする研究に接合することが可能となるような論点を抽出することも射程に入れた。

2015年度の
研究実施状況

本年度は国際ワークショップの開催に向けてインテンシヴに研究打ち合わせおよび研究会を行い、ウズベキスタンからの参加者4名を含む13名の参加者により国際ワークショップを実施、その後ワークショップの成果を年度内に刊行した。具体的活動は以下の通り。

- ・2015年6月27日(京都大学地域研究統合情報センター) 研究打ち合わせ
- ・7月25日(京都大学地域研究統合情報センター) 研究会(国際ワークショップ事前準備)
- ・10月17日(京都大学地域研究統合情報センター) 研究会(国際ワークショップ事前準備と報告予定者による第一次プレゼンテーション)
- ・11月30日(京都大学地域研究統合情報センター)

研究会(国際ワークショップ日本側予行演習)

- 国際ワークショップ“Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society”
12月26日
(京都大学稲盛財団記念館中会議室)

総合司会：小松久男(東京外国語大学)

- ・帯谷知可“Politics of the Veil” in the Context of Uzbekistan”
- ・Bakhtiyar Babadjanov(東洋学大学東洋写本センター、ウズベキスタン)“Paradise at the Feet of Mothers and Women: SADUM in the Struggle for Emancipation of Muslim Women”
- ・Nodira Azimova(科学アカデミー歴史学研究所、ウズベキスタン)“Modern Uzbek Family: Marital Relations”
- ・宗野ふもと“Women, Marriage and Market Economy in Rural Uzbekistan”
- ・和崎聖日“Jahri Zikr” by Women in Post-Soviet Uzbekistan: Survival of a Sufi Traditional Ritual through Soviet Policies and Its Future”

コメント：Bakhtiyar Islamov(ロシア経済大学ウズベキスタン分校)、Shakhzoda Karimova(社会学センター説明と助言、ウズベキスタン)、菊田悠(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)、村上薫
・2016年3月

成果報告書として、Obiya, Chika(ed.), *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (CIAS Discussion Paper No. 63), Kyoto: CIAS, 2016. を刊行

成果

本研究では旧ソ連中央アジアの1国であるウズベキスタンに焦点を当て、イスラームとジェンダーの観点からソ連時代の社会主義的近代化を再検討し、そこで達成された(はずの)ものはソ連解体後の政治・経済・社会変容の中でどのような様相を呈しているのかを考察した。研究成果は大別すれば以下ようになる。

(1) 事例の蓄積、言説・表象からのアプローチ

中央アジアの社会主義的近代化において、本研究課題にそくしていえば脱イスラーム化・世俗化や男女平等・女性解放に関連する制度や法律はよく整備され、その成果が大規模に喧伝されたものの、特に婚姻や家族をめぐる規範といった領域では漸次的かつ部分的な変化しかもたらされなかったことが指摘されてきた。本研究では、共産党およびロシア人主導の女性解放運動の矛盾と皮相性、国家の側に立つムスリム宗務局の女性解放運動擁護のイスラームの文脈からのロジック、ソ連時代を生き抜いた女性によるイスラーム神秘主義儀礼などを明らかにすることによって、従来の議論をさらに補強する事例を積み重ねた。さらに、解放された理想的な女性、逆に根絶されるべき悪しき伝統に絡め取られた女性に関する言説とイメージとを

提示し、それらがいかに「伝統／近代」「進歩／後進」「抑圧／自由」という二項対立的なものであったかを読み解いた。

(2) 体制転換・政治経済社会変容と女性・家族

ソ連解体という大変動によって、一方で伝統的規範や価値観の復活がありながら、家族や女性のありようは大きな変化を余儀なくされていることを認識した。とりわけ国外への出稼ぎ移民の増大は、伝統的な家族規範に反して、核家族化を促すなどの現象が見られ、一部には深刻な社会問題も生んでいる。また、従来の研究では女性は概してこうした体制転換の大変動の犠牲者になっているとの見方が強かったが、限定的な条件の中でも女性たちは主体的に、一定の規範の中で小さいながらも生きがいを見出そうとしながら生きており、そうした主体性を汲み上げるような着眼点がむしろ必要であるとの認識にいたった。

(3) 視点1：グローバルな言説と権威主義体制の結びつき、そのもとでのイスラームとジェンダー

社会主義的近代化の過程に見られたような強い国家、弱い社会という構図はソ連解体後の中央アジアの権威主義体制に多かれ少なかれ引き継がれていることを認識することが重要である。例えば、社会主義時代に「悪しき伝統」としてイスラーム・ヴェールを排斥した植民地主義的思考は、19世紀ヨーロッパに根源をもち、ソ連時代に社会主義的イデオロギーにより変形・強化され、ソ連解体後の為政者たちに受け継がれ、対テロ戦争の正義という言説によって補強されて、ヴェール着用者を「他者」として排除することにつながっている。あるいは、ソ連時代に女性のイスラーム指導者には当局の目がおよびにくかったことから細々と維持されてきた女性による伝統的儀礼が今日になってイスラーム過激主義への懸念から実践できなくなるなどの事例が生じていることを示した。

(4) 視点2：中東ジェンダー研究とポスト社会主義研究の架橋

中央アジアの現実をよりよく理解するためには、①中東ジェンダー研究により提言されてきた、「伝統／近代」の二項対立に陥らずに、近代性と女性の進歩や解放を安易に同一視しない視点、同時に、②ポスト社会主義研究により提言されてきた、現在も人々の内に骨肉化されている社会主義的経験に着目しつつ、伝統や、資本主義的あるいは欧米的近代化の矛盾にも目配りをする視点の双方を持つ必要があるとの知見を得た。

1. 相関地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

Wil de Jong (京都大学地域研究統合情報センター)

柳澤 雅之 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

赤嶺 淳 (一橋大学大学院社会学研究科・社会学部)

Youn Yeo-Chang (Seoul National University, Department of Forest Science)

Liu Jinlong (Renmin University of China, School of Agricultural Economics and Rural Development)

Pia Katila (Luke, Finland)

Benno Pokorny (Freiburg University)

Ben Cashore (Yale University)

目的

世界の気候変動とそれによる影響、食の安全、安全な水の確保、健康問題や生物多様性の保全など、自然環境資源をいかに確保するかという大きな課題は国内的にも国際的にも大きな関心事となっている。本複合共同研究「地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦」は、ローカルなひとびとの自然環境との実践的なかわりに焦点を絞った地域研究のアプローチにより、これらの世界的課題の解決に貢献することを目指す。これまでは地域研究の分野で行われてきたローカルな自然環境資源関連の研究課題をサポートし、ローカルな自然環境資源とのかかわりや実践をグローバルなプロセスと関連づける課題も含め、現在進行中の研究課題や萌芽的なアイデアを持つ研究課題とリンクし、さらに、より大きな枠組みでの研究ともリンクすることで、議論のためのより大きなプラットフォームを形成し、新たな価値を見出すことを目的とする。

2015年度の
研究実施状況

Collaborators in the project explored legality in the forest sector, focusing particularly on timber consuming countries, Japan, China and South Korea. The project organized a dialogue between private sector, civil society organizations and members of academia in Kyoto, February 29. A complementary study in Peru,

implemented in collaboration with IUFRO, assessed how timber legality verification along global supply chains can be mobilized to enhance communal control and ownership over forests.



The research on timber legality in consumer countries resulted in a broadly publicized workshop attended by private sector, civil society and academia representatives from Japan, China, South Korea, Europe and the USA, and a summary of findings that was put in the public domain through the IISD Forest Policy Info List (FORESTS-L). The study on Peru is reported in the IUFRO document: Cashore et al. 2016. Can Legality Verification enhance local rights to forest resources? Piloting the policy learning protocol in the Peruvian forest context.

1. 相関地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

1. 現代アフリカ社会における植物利用の持続可能性と地域植生の管理

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

藤岡 悠一郎 (東北大学東北アジア研究センター)

◆メンバー

伊谷 樹一 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

大石 高典 (東京外国語大学世界言語社会教育センター)

大山 修一 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

片桐 昂史 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

木村 大治 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

桐越 仁美 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

近藤 史 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

手代木 功基 (総合地球環境学研究所)

友松 夕香 (東京大学東洋文化研究所)

原子 壮太 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

平井 将公 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

藤田 知弘 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

村尾 るみこ (立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科)

八塚 春名 (日本大学国際関係学部)

山越 言 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

山科 千里 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

山本 佳奈 (京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センター)



政治経済のグローバル化や社会の流動化が進む現代のアフリカ社会において、地域の植生や植物などの自然資源は、グローバル市場での流通が進み、特定種の希少価値が高まるなど、自家消費を中心とした過去の利用形態とは形を変えつつある。グローバルな変動のなかで、人々の植物利用は画一化する方向に向かうのではなく、ローカルな固有性に根差した動きが多様化する傾向が見いだされる。現代のアフリカ社会における植物利用の持続可能性を検討するためには、グローバルな変動のなかで発現するローカリティに目を向け、地域の植生環境の変化に留意し、地域性に即した管理のあり方を模索していく必要がある。申請者らは、これまでに実施した2つの共同研究を通じて、アフリカの植物利用に関する知見を蓄積し、データベース(Aflora)を構築してきた。本共同研究では、デー

データベースや個別の研究報告会で蓄積した知見を整理し、アウトプットとして成果を出版することを目的とする。その過程において、地域植生の変化のプロセスや植物利用の知恵や技術の継承など、植物利用の持続可能性に関する論点について討議を行い、グローバルな持続可能性を見据えた地域植生の管理のあり方について議論する。

2015年度の 研究実施状況

本共同研究では、研究会の開催、データベースの構築、学術誌における成果公表およびその準備を進めてきた。研究会は計3回（うち2回は公開シンポジウム）開催した。第1回研究会は5月15日に開き、本グループがこれまでに進めてきた共同研究の内容について整理した後、今年度の活動方針や進め方について議論した。第2回研究会は民族自然誌研究会との共催として7月18日に開催し、「トチノキをめぐる社会生態誌：滋賀県高島市朽木を事例に」というテーマで共同研究員2名が発表した。これは、現代の植物利用について、アフリカと日本との地域間比較をすることを企図したものである。2月19～20日には「現代アフリカ社会における植物利用の持続可能性と地域植生の管理」というテーマで公開の研究会を2日間連続で開催し、共同研究員4名と若手研究者2名が発表した。さらに、本研究テーマに関する特集企画を学術誌『アジア・アフリカ地域研究』および*African Study Monographs*において進めている。

成果

成果の第1点目は、学術誌における成果発表と特集企画の準備を進めた点である。現段階で、アフリカの植物利用に関する論考を『アジア・アフリカ地域研究』誌に3本、*African Study Monographs*誌に3本投稿中（一部予定）であり、小特集としての掲載を目指している。さらに、共同研究員の個々の論文として、昨年度中に8本の論文を発表した。

第2点目は、アフリカおよび他地域との比較検討を通じ、地域の植生や植物が有する機能や人々との関係性に関する多様な事例を抽出できた点である。現代社会における森林と人々との関係性は、グローバルな視点で見ると環境保全や非木材林産物販売による経済的な価値などに注目が集められる傾向があるが、各地域における研究事例からは、植物と地域住民との幅広い関係性があることに気づかされる。森林保全や植物の経済価値について検討する際にも、そのよう

な幅広い視野で植生を捉えていく必要性を再認識させられた。

第3点目は、昨年度に引き続き、アフリカの植生および植物利用のデータベース整備を進めることができたことである。共同研究員の新しい知見をデータベースに加えるとともに、データについて学名のスペルチェックをおこない、新体系の植物分類による種名を併記するなど検索の際にヒットしやすいような工夫を加えた。また、別の研究者のデータについて日本語記載データの英訳も進めた。

第4点目は、若い研究者も参加するなかで、本研究テーマの課題や将来的な継続を確認した点である。先行研究で提示されているアフリカ植生図の改訂などを視野に入れ、現段階での課題を抽出した。そして、今後も継続して共同研究会を実施し、本研究を発展させていく予定である。

1. 相関地域研究プロジェクト (地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)
2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦
2. 熱帯森林-都市関係の社会生態学的比較研究
個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

阿部 健一 (総合地球環境学研究所)

◆メンバー

石丸 香苗 (岡山大学地域総合研究センター)

大石 高典 (東京外国語大学世界言語社会教育センター)

大橋 麻里子 (一橋大学大学院社会学研究科)

小泉 都 (京都大学総合博物館)

笹岡 正俊 (北海道大学大学院文学研究科)

嶋田 奈穂子 (京都大学東南アジア研究所)

竹内 潔 (元・富山大学人文学部)

竹ノ下 祐二 (中部学院大学子ども学部)

服部 志帆 (天理大学国際学部)

松浦 直毅 (静岡県立大学国際関係学部)

宮内 泰介 (北海道大学大学院文学研究科)

山越 言 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Wil de Jong (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

本研究では、ヒトとモノの動態に焦点を置いて、主として、東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカの熱帯森林と都市との関係を明らかにするものである。現在の熱帯森林地域は周地的・閉鎖的な「僻遠の地」ではなく、周辺都市を含むより大きな社会経済的コンテキストの中に埋め込まれている。具体的には、周辺都市との間で、換金作物・野生獣肉・食用淡水魚類、その他の森林産品と日用雑貨の物流がさかんにおこなわれており、また、相互に人が移住し、あるいは移住者の還流が生じている。人的移動についてみれば、森林地域の住民が多様な社会経済的機会を求めて都市に移住する一方で、都市住民から見れば、熱帯森林は、経済的貧困、人間関係の軋轢、内戦状況などの危機的状況の際の「避難場所」となっており、ときにはこのような森林への人口移入は土地をめぐるコンフリクトなどの問題を惹起する。本研究は、このような状況を把握するために、都市と熱帯森林を社会生態学的枠組みの中で捉え直し、ヒト・モノの動態について地域間の事例比較をおこない、グローバリゼーションの中の「現代の熱帯森林」の諸相を浮き彫りに

することを目的とする。

2015年度の
研究実施状況

研究会を3回開催し、(1) 熱帯諸地域における森林と都市の関係について議論をおこない、(2) ディスカッションペーパーの草稿の相互査読と討論をおこなった。(1) では、コロンビア・アマゾンの集落間の関係やグローバルな政治経済動向が地域社会に及ぼしている影響についての事例をもとに討論をおこなった。また、「山村と都市が共生・共育するまち」を標榜している静岡市北部の中山間地において、地域振興の取り組みについて実地見学をおこなった。(2) では、ディスカッションペーパーに載せる論考が相互に有機的な関係を持つよう草稿作成時及び各自の原稿完成後に、集中的な討論をおこなった。

成果

(1) 都市社会学や都市人類学では、都市-農村の連続性が強調されてきたが、熱帯森林帯では、地域によって、ヒト、モノ、情報の流通が、森林-農村-都市の3層構造になっており、他の地域で都市が持っている流通の結節点の役割を農村が担っている。都市-熱帯森林の関係について地域間比較をおこなう際には、農村の役割に注目する必要がある。

(2) 近年の熱帯森林諸地域では、都市から、ヒト、モノ、情報が流入し、また、グローバルな価値観が地域社会に浸透していたり、外部アクターが地域のなかで重要な位置を占めるようになっており、従来の外部世界/森林、ローカル/グローバル、地域住民/外部アクターといった二項対立的な視点では捉えきれない多相かつ重層的な状況が生起している。このような状況を理解する視座として、「地域社会」を「在来」の「地域住民」の社会としてではなく、「地域住民」内外の多様なアクターを包摂した動的なアリーナとして位置付け、その上で、アクター間の関係性や交渉の動態を分析し、解釈することが重要となる。また、そのような状況においては、研究者は、かつてよりも重要なアクターとして「地域社会」の動向やガバナンスに関与している。したがって、研究者も、調査や研究プロジェクトを通じた自身と他のアクターとの交渉について自覚的な検討をおこなう必要がある。

1. 相関地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

複合共同研究ユニット

- ◆研究期間
2013～2015年度
- ◆代表
林 行夫 (京都大学地域研究統合情報センター)
小林 知 (京都大学東南アジア研究所)
- ◆メンバー
今中 博之 (アトリエ インカーブ)
桶谷 猪久夫 (大阪国際大学国際コミュニケーション学部)
片岡 樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)
川田 牧人 (成城大学文芸学部)
熊谷 誠慈 (京都大学こころの未来研究センター)
藏本 龍介 (南山大学人類学研究所)
小島 敬裕 (京都大学東南アジア研究所)
小嶋 博巳 (ノートルダム清心女子大学文学部)
志賀 市子 (茨城キリスト教大学文学部)
菅根 幸裕 (千葉経済大学経済学部)
村上 忠良 (大阪大学大学院言語文化研究科)
守川 知子 (北海道大学大学院文学研究科)
山田 仁史 (東北大学大学院文学研究科)
柴山 守 (京都大学国際交流振興機構/地域研究統合情報センター)
原 正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター)
山田 協太 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

人々の暮らしのなかで繰り返される宗教実践が生む時空間と、その実践が創出する共同性や絆の様態と動態を、相関型地域研究の視点から比較検討することにより、宗教および地域の概念を再構築するとともに、研究資源を調査対象地や当該の人々を含めて共有する仕組みを考案する。前複合ユニットでは、国境を越えて広がった宗教的関心にもとづく人の移動、経典や聖具の伝播に焦点をあててそこに生きる人々の視点から地域空間の様態を解明した。その成果を踏まえつつ、概念としての宗教の超越性を前提とせず、宗教に関連した様々なモノやコト（聖地や施設、経典・図像、神話・伝承、宗派・儀礼行為）のマッピングと情報の共有化を推進させることにより、宗教実践の時空間が構築される歴史的な過程とその動態を明らかにする。

2015年度の
研究実施状況

本複合ユニットは、一年度限りの新規個別ユニット「仏教をめぐる日本と東南アジア地域：断絶と連鎖の

総合的研究」を組み込んで、計2度の研究会を実施した。計5本の報告を通じて時空間マッピングとデータベース化の手法を検討するとともに、移動の可視化に進展がみられた近世日本の六十六部巡礼のトラッキングマップを作成した。個別ユニットは4回の開催で21本の報告があった。複合・個別のそれぞれの最終回を合同開催とした(2月20～21日)。第1回目の研究会(7月5日)では、時空間マッピングとデータベース化の手法をめぐってこれまでの成果のレビューと改善発展すべき課題について情報学と地域研究の両観点から相互に検討した。第2回(合同開催)では、史資料から得られたデータを地図上におとしこむ日本の六十六部巡礼のケースを、個別ユニットの課題(明治期から昭和にかけての日本の宗派仏教の海外での活動と地域事情の相互性と複合性)の今後の展開に資するものとして提示した。

成果

本複合ユニットは、特定の地域社会を輪郭づけながらも、地域を越えてみられる宗教実践を研究対象として、時空間を軸にしてパターン化、分析し、可視化することを目的としてきた。この目的を達成するためには、各地の宗教実践に関する資料・データを収集し分析する地域研究者と情報学の専門家の相互理解と共同作業が必要であるが、残念ながら、全体として両者の距離は期待したように縮まらなかった。ただしそのなかで、複合ユニットの最終年度の活動として、新規の個別ユニットの今後の展開を考慮しつつ進めた六十六部巡礼のトラッキングマップの作成は、歴史研究者、民俗学者と情報学の専門家との間のコラボレーションが目に見える形で結実した点で、複合ユニットのねらいを反映した最大の成果である。次いで、東南アジア大陸部の上座仏教徒社会の仏教施設と僧侶の移動のマッピングと可視化についても、地域研究者と情報学の専門家との共同作業が進展した。一方で、個別ユニットは21本の研究発表を軸に、明治期以降の日本仏教および新興宗教の東南アジアでの活動をトレースする多様な史資料の発掘と共有を進めた。その成果は『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』(アジア遊学196号、勉誠出版、2016年3月)として公刊された。3年にわたり個別ユニットとの研究主題と知見の共有を試みてきた複合ユニットとしての成果は、マッピングと可視化作業が途上にあるいくつかの研究課題、およびすでに公開済みの個別ユニット群の成果をふくめ、次年度以降にCIASディスカッションペーパー

(日本巡礼マッピング)や叢書等で公開する予定である。叢書では、宗教実践が現出させるヒトやモノの移動、地域の歴史・文化的な構成や地域間の交流、断絶の関係を浮かび上げ、特定地域や時代を横断する宗教実践の諸特徴を統合的に分析する手法を提示する。

1. 相関地域研究プロジェクト
(地域)を測量(はか)る:21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

1. 仏教をめぐる日本と東南アジア地域：断絶と連鎖の総合的研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

大澤 広嗣 (文化庁文化部宗務課)

◆メンバー

奥山 直司 (高野山大学文学部)

神田 英昭 (高野山大学密教文化研究所)

北澤 直宏 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

小島 敬裕 (京都大学東南アジア研究所)

中西 直樹 (龍谷大学文学部)

藤本 晃 (誓教寺)

村上 忠良 (大阪大学大学院言語文化研究科)

吉永 進一 (舞鶴工業高等専門学校)

林 行夫 (京都大学地域研究統合情報センター)

山田 協太 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

本研究は、明治以降現在に至るまで東南アジア地域に関与した日本人仏教者の活動と論理に焦点をあてて、宗教をめぐる地域間の交渉と現実を、歴史、比較の観点から明らかにする。

東南アジア大陸部にはタイ、ミャンマー、ラオス、カンボジアに上座仏教、ベトナムや各地の華人社会には大乘仏教が伝播する。明治期から同地域に関わった日本仏教者は、現地に赴いて経典を求め、あるいは出家して学僧・研究者として調査・旅行を行い、戦時中には日本軍の軍属など、様々な立場から関与した。戦後では、南方戦線の戦没者慰霊と現地仏教界との親善交流に関わった仏教者があり、現在では、上座仏教の外国人仏教指導者が日本で活動を行い、現地で瞑想を実践し書物を著す日本人がいる。こうした事象について個々の事例研究や短報はあるものの、地域相互の関係を含めて全体を俯瞰する研究は皆無であった。日本と現在の世界趨勢を築いた過去150年間に東南アジア地域に関わった日本人仏教者の動向を軸にして、仏教をめぐる人と社会、地域間の動態と推移を総合的にとらえることが本研究の目的である。

本年度は、計4回の研究会を実施した。研究会では、共同研究員及びゲストスピーカーからの発題を行い、共同研究で目指すべき課題と問題点を共有した。実施した日程は、次のとおりである。

- ・ 第1回研究会（2015年6月11、12日）。研究発表は大澤広嗣「宗教研究からみた『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』」ほか計5本。
- ・ 第2回研究会（2015年7月18、19日）。研究発表は山田協太「近代仏教建築と京都」ほか計5本。
- ・ 第3回研究会（2015年11月22、23日）。研究発表は藤本晃「テラワダは三度、海を渡る：日本仏教の土壌に比丘サンガは根付くか」ほか計5本。
- ・ 第4回研究会（2016年2月20、21日）、複合共同研究ユニット「宗教実践の時空間と地域」と合同開催。中川未来（愛媛大学法文学部）「『南洋』経験と『アジア主義』の形成：志賀重昂と稲垣満次郎を中心に」ほか計4本。

成果

本共同研究での成果は、従来の仏教史観を更新したことである。インドに発生した仏教は、中国を経て、日本に伝播した。いわば、これまでの仏教界・仏教学界では「仏教三国史観」が主流であったため、東南アジアは傍流かつ周縁に扱われてきた。しかし本共同研究では、東南アジアと南アジアが、重要な経路であったことを指摘した。

第一の理由として、航路の整備にともなう、人の往来が容易になったことである。明治期に日本郵船の欧州航路が開設されると、スリランカのコロomboとインドのボンベイが寄港地となった。通商活動が盛んになったが、仏教発生の地であるインド、パーリ語経典が残されているスリランカへの仏僧らの接近が容易になったのである。さらに足を伸ばして、タイに向かった僧侶もいた。欧州留学組の仏僧たちのなかで、アジア留学組は評価が低かったが、欧州留学組とはいえ、その寄港地であるコロomboやボンベイにて、仏教の学知に接していたのであった。

第二には、仏教が外交に果たした役割が大きかったことである。東南アジアには、植民地化を免れ独立を保っていたタイが、日本と同じ仏教国であることから、仏舎利や聖典をアイテムとして、相互の連携と紐帯の強化を行ったのである。共に皇室・王室を尊崇する国柄であったことも背景となった。以降、明治から

戦時中にいたるまで、仏舎利を用いた外交と同盟の締結が数次にわたって行われていたことは、注目すべき点である。

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開（統括班）

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

地域研究の課題の一つは、変化・連動し影響しあう地域の理解である。そのためには「比較」を通じて各地域の個性をより明確に把握するとともに、地域と地域がどのように相互に「関係」しながら世界の一部を構成しているかという視点が不可欠である。この「比較」と「関係」というキーワードは情報学的手法の展開が期待される場所である。

しかし、情報学は明確なノルムと手続きによりデータを計量的に処理することを目指しているのに対して、地域研究を構成する人文学研究領域では定性的あるいは非数値的な内容を解釈的に処理することが多く、統計処理などに代表されるコンピュータ処理には馴染みにくい。これが相関型地域研究への地域情報学の展開が遅延として進まない原因の一つであると考えられる。

一方で、人文学史資料であっても時空間属性や主題（人物、事件、事象等）に注目した計量化はある程度可能であり、地域情報学ではその研究を継続している。同時に地域研究においても基本史資料のデジタル化が進んでおり、情報学的分析の素地が整いつつある。

そこで本統括班では、地域情報学および地域情報資源共有に関わる複合研究プロジェクトとの協働により、これまでの成果を駆使しつつ、相関型地域研究への地域情報学からの展開の可能性を試みる。

2015年度の 研究実施状況

本統括班のもとに、「『地域の知』の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開」（代表：原正一郎）、「非文字資料の共有化と研究利用」（代表：貴志俊彦）、「CIAS所蔵資料の活用」（代表：柳澤雅之）の3つの複合班を配置した。地域情報学の今後を展望するために、学外の研究プロジェクト等との共同研究会を4回実施した。

●第1回（情報知識学会・情報知識フォーラム）

2015年12月12日（同志社大学）

- ・武田英明（国立情報学研究所）「Linked Dataによる分野連携型データベースの枠組み：大規模知能データベース」
- ・後藤真（国立歴史民俗博物館）「人文社会系大規模データベースへのLinked Dataの適用：推論による知識処理」
- ・柴崎亮介（東京大学空間情報科学研究センター）「さまざまな社会公共サービスを支える共通データ基盤としての空間情報：場所による知識処理」
- ・関野樹（総合地球環境学研究所）「時間情報基盤の構築と活用：時間に基づく知識処理」
- ・山田太造（東京大学史料編纂所）「フィールドノートに記述された場面を特徴付ける：語彙による知識処理」
- ・亀田克宙（地域研究統合情報センター）「地域情報学のこれまでとこれから：地域研究統合情報センターの実践事例を通して」

総合討論

●第2回（社宅研究会との共同開催）

2016年2月19～20日（熊本県立大学）

挨拶、趣旨説明 原正一郎

- ・関野樹「時間情報の活用と基盤構築」
- ・山田太造「地域研究史資料に対するテキストマイニング適用の試み」
- ・後藤真「人間文化研究機構が持つ統合検索データベースとその未来」
- ・池上重康（北海道大学）「日本建築学会編歴史的建築総目録データベースの位置情報」
- ・永田好克（大阪市立大学）、内藤求（株式会社ナレッジ・シナジー）「東北タイ地名履歴のトピックマップ化試行」
- ・柴田祐（熊本県立大学）「GISによる土地利用評価」
- ・鎌田誠史（有明工業高等専門学校）、山元貴継（中部大学）「土地台帳、地籍図、空中写真を用いた景観復元について」
- ・辻原万規彦（熊本県立大学）「外地における地理情報を用いた社宅街の復元」

総合討論

●第3回（日本人口学会関西地域部会との共催）

2016年3月5日（総合地球環境学研究所）

開会の挨拶 川口洋（帝塚山大学）

第1報告 司会：平井晶子（神戸大学）

- ・酒井高正（奈良大学）「昨今のGISデータと人口分析」

第2報告 司会：平井晶子

- ・奥貫圭一（名古屋大学）「江戸・明治初期の村ポリゴンデータの作成とその分析」

第3報告 H-GISセッション「時空間分析のための情報技術」

司会：川口洋

- ・関野樹「時間に基づいた情報の可視化と解析」
- ・山田太造「テキストデータを使うとどのようにフィールドが分類できるか？」
- ・原正一郎「データベース構築支援ツール『Myデータベース』」

第4報告 司会：中澤港（神戸大学）

- ・川口洋・加藤常員（大阪電気通信大学）「牛痘種痘法の普及過程を復原する歴史GISの構築」

第5報告 司会：中澤港

・飯島渉（青山学院大学）「医療・公衆衛生資料の整理・保存と利用の可能性」

特別講演 司会：原正一郎

・谷村晋（三重大学）「人の移動と感染症流行のモデリング」

閉会の挨拶 原正一郎

●第4回（東京大学空間情報科学研究センターとの共催）

2016年3月25日（東京大学史料編纂所）

開会の辞、趣旨説明

- ・藤原直哉（東京大学空間情報科学研究センター）「人流データを用いた感染症数理モデルの、エラーに対する頑健性」
- ・川口洋「明治8（1875）年の足柄県における種痘の普及：希少史料から歴史像・地域像・民衆像を提案する道程」
- ・早川裕式（東京大学空間情報科学研究センター）「地考古学現場における高精細計測の最新動向と景観復元の試み」
- ・桐村喬（東京大学空間情報科学研究センター）「小地域統計による長期的な都市内部構造の変化の分析」
- ・柳澤雅之「地域情報学の読み解き：発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析」

パネルディスカッション

閉会の辞

成果

詳細は各複合ユニットの報告を参照。

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開（統括班）

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

原正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

飯島 渉（青山学院大学文学部）

石川 正敏（東京成徳大学経営学部）

桶谷 猪久夫（大阪国際大学国際コミュニケーション学部）

川口 洋（帝塚山大学経営情報学部）

五島 敏芳（京都大学総合博物館）

後藤 真（国立歴史民俗博物館）

関野 樹（総合地球環境学研究所）

内藤 求（株式会社ナレッジ・シナジー）

山田 太造（東京大学史料編纂所）

柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

「地域の知」に関する情報学的な手法の開発を試みる。そのため、これまでの時空間属性に加えて、語彙の構造に注目した地域情報学の構築を目指す。複合研究ユニットとして、以下の2点に主眼を置く。

(1) 地域情報学の地域研究への展開

複合および個別研究ユニットから幾つかのテーマ（例えばフィールドノートや記述疫学）を選び、地域研究情報基盤を構成するMyデータベース、REST型API、共有化メカズム、時空間情報処理ツール等を駆使したデータ収集、組織化、計量化、可視化、分析等を主体とした、情報学パラダイムに基づく地域研究を推進する。

(2) 研究プロジェクト等とのコラボレーション

これまでの地域情報学では未着手であったテキストデータの処理と曖昧な時空間表現に関する研究に着手する。テキストデータには5W1Hに関する多様な記述が含まれているが、これらを識別するマークアップ（あるいは準ずる記述）と構造化（意味的な関連づけ）を施さなければ、コンピュータによる処理は困難である。また識別できたとしても「頃」や「辺り」など曖昧な表現のままでは利用できない。これらをどのよう

に処理したらよいか、語彙および時空間の視点から実証的に研究を進める。

2015年度の 研究実施状況

各個別ユニット「地域研究における時空間情報の実践的活用」(代表: 関野樹)、「フィールドノートを対象としたテキストマイニングに関する研究」(代表: 山田太造)と共同で7回の研究会を実施した。内4回については、地域情報学の今後を展望するために、総括班「地域情報学の展開」と共同で、学外の研究プロジェクト等との共催で施した。研究懇談会を3回開催した。

○研究会

- ・第1回 (2015年5月30日、京都大学地域研究統合情報センター)
- ・第2回 (2015年9月12日、京都大学地域研究統合情報センター)
- ・第3回 (2015年12月12日、同志社大学今出川キャンパス弘風館)、情報知識学会・情報知識フォーラムとして開催
- ・第4回 (2016年1月29日、東京大学史料編纂所)
- ・第5回 (2016年2月19~20日、熊本県立大学)、社宅研究会と共催
- ・第6回 (2016年3月5日、総合地球環境学研究所)、日本人口学会関西地域部会との共催
- ・第7回 (2016年3月25日、東京大学史料編纂所)、東京大学空間情報科学研究センターと共催

○研究懇談会

2015年 6月27日、8月10日、12月1日

成果

「地域研究における時空間情報の実践的活用」(代表: 関野樹) および「フィールドノートを対象としたテキストマイニングに関する研究」(代表: 山田太造)の各報告を参照。

研究者あるいは小規模プロジェクト等が収集した地域研究資料の蓄積・公開・利活用を支援する「Myデータベース」の可用性の向上を目指した。

次世代資源共有化システムモデルとしてRDFを基盤とした情報システムの研究開発を進めた。具体的には、歴史地名辞書データベースのSPARQL End Pointを利用した時空間エディタを試作した。

空間情報処理ツール (HuMap) の機能拡張 (ネットワークの可視化) を継続した。

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開 (統括班)

1. 「地域の知」の情報学: 時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

1. フィールドノートを対象としたテキストマイニングに関する研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

山田 太造 (東京大学史料編纂所)

◆メンバー

大向 一輝 (国立情報学研究所)

小野原 彩香 (同志社大学大学院文化情報学研究科)

後藤 真 (国立歴史民俗博物館)

清野 陽一 (奈良文化財研究所)

関野 樹 (総合地球環境学研究所)

永崎 研宣 (人文情報学研究所)

帯谷 知可 (京都大学地域研究統合情報センター)

原 正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター)

柳澤 雅之 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

本研究では、地域研究に関する史資料、特にフィールドノートを対象とし、そこに記述されている場面の時空間的特徴を、テキストマイニング手法を用いることで、定性的ではなく定量的に表現・解析する手法の確立を目指す。特に以下の2点に着目する。

(1) フィールドノートからの時空間的特徴の抽出と場面の構造化

テキストから各場面を特徴付ける用語とともに地名・日付を抽出する。この結果を用いることで、各場面に対する定量的解析可能なデータ表現モデルの確立を目指す。

(2) フィールドノート情報の利用

(1) で表現した場面を検索できるフィールドノート検索システムのプロトタイプを行う。このとき地域研究者が必要とする検索機能を突き止めていく。また、HuTime/HuMapでの利用やセマンティックWeb (Webページに記述された内容をコンピュータ分析できるように記述する方法) の技術を用いるなど、(1) で表現した場面データの二次利用を図る仕組みの実現を目指す。

2015年度の 研究実施状況

複合共同研究ユニット「『地域の知』の情報学: 時間・

空間・語彙に注目した地域情報学の展開」および個別共同研究ユニット「地域研究データにおける時空間情報の実践的活用」との共同で、研究会を5回開催し、人文科学領域における時空間情報処理の可能性について、多様な研究領域の研究者が、考え方や問題点を共有し、研究の方向性を見出すことを目的とした研究懇談会を3回開催した。また、「地域情報学における知識情報基盤の構築と活用」をテーマとした第20回情報知識学フォーラム（主催：情報知識学会）の開催に協力し、日本人口学会関西西部会との共催で研究会を開催した。

● 第1回研究会
2015年5月30日
(京都大学地域研究統合情報センター)

資源共有化システムの現状と将来像、他4件

● 第2回研究会
2015年9月12日
(京都大学地域研究統合情報センター)

フィールドノートにおける場面分類とwebサービスを用いた地名抽出、他5件

● 第20回情報知識学フォーラム「地域情報学における知識情報基盤の構築と活用」(主催：情報知識学会)
2015年12月12日
同志社大学今出川キャンパス弘風館

Linked Dataによる分野連携型データベースの枠組み：大規模知能データベース、他5件

● 第3回研究会
2015年1月29日
(東京大学史料編纂所)

タイに関する地名辞典についての考察：掲載量と位置、他3件

● 第4回研究会
2016年2月19-20日
(熊本県立大学)

時間情報の活用と基盤構築、他7件

● 第5回研究会(日本人口学会関西地域部会との共催)
2016年3月5日
(総合地球環境学研究所)

昨今のGISデータと人口分析、他8件

○ 研究懇談会

2015年6月27日、2015年8月10日、2015年12月21日

成果

「目的」で述べた、フィールドノートに対する時空間的特徴の定量的表現・解析手法の確立のため、以下の問題に取り組んだ。

(1) フィールドノートからの時空間的特徴の抽出と場面の構造化

情報リソースとして、高谷好一著『地域研究アーカイブズ フィールドノート集成2』を利用し、前年度までの研究課題「地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究」の成果を取り入れ、対象資料からテキストの構造化、テキスト内に潜在する話題検出手法などを行い、テキストの定量的解析を進めた。辞書等の整備がなされていない環境下でテキストから時空間情報の抽出を行った。テキスト内の各場面の構造化を進め、本研究で得られた場面データを時空間解析のための基盤情報として、地名辞書に追加・蓄積していく手法を検討した。

(2) フィールドノート情報の利用

(1) で表現した場を検索できる情報システムのプロトタイピングを行った。単なる全文検索ではなく、場面の定量的特徴にもとづいた関連する場面の提示を可能とする情報提示機能を盛り込んだ。RDFで場面を表現することにより二次利用可能なデータ形式を検討した。

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開 (統括班)

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

2. 地域研究における時空間情報の実践的活用

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

関野 樹 (総合地球環境学研究所)

◆メンバー

加藤 常員 (大阪電気通信大学情報通信工学部)

久保 正敏 (国立民族学博物館)

後藤 真 (国立歴史民俗博物館)

山田 太造 (東京大学史料編纂所)

米澤 剛 (大阪市立大学大学院創造都市研究科)

柴山 守 (京都大学国際交流推進機構/地域研究統合情報センター)

亀田 堯宙 (京都大学地域研究統合情報センター)

貴志 俊彦 (京都大学地域研究統合情報センター)

原 正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

「地域情報学」プロジェクトでは、時空間情報解析ツールHuTime/HuMapの開発と活用、さらに、データ構築や可視化・解析に用いるための時空間基盤情報の収集と蓄積、提供が共同研究の枠組みで進められてきた。これにより、時空間解析に必要な基本的な機能がほぼ整った。しかしながら、これらの時空間情報解析ツールや基盤情報を用いた地域研究も現れはじめてはいるものの、実験的もしくは補助的な利用にとどまるものが多く、これまでの研究開発の成果が地域研究の一手法として浸透・定着するには至っていない。

そこで本研究では、時空間情報解析に関するこれまでの研究開発の成果を地域研究の現場に適用する上での障害や欠落している機能(人的、組織的な側面も含めて)を再検証しながら、それぞれの地域の知の発見や理解に活用してゆくための可能性や手法を見出そうとするものである。

2015年度の 研究実施状況

複合ユニット「『地域の知』の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開」、および、個別ユニット「フィールドノートを対象としたテキストマイニングに関する研究」と共同で、5回の研究会と3回の研究懇談会を開催した。これらの中には、外部の研究組

織との連携による2回を含む。また、これらのユニットとの共同提案による企画として、情報知識学会主催の情報知識フォーラムにおいて、研究報告を行った。

○研究会

・2015年5月30日(地域研究統合情報センターセミナー室) 各課題の進捗報告など(発表5件)

・2015年9月12日(地域研究統合情報センターセミナー室) テキストマイニング、地域研究情報基盤(発表2件)

・2016年1月19日(東京大学史料編纂所)

地名情報ほか(発表3件)

・2016年2月19~20日(熊本県立大学)

建築関連の研究グループとの合同研究会(発表8件)

・2016年3月5日(総合地球環境学研究所)

日本人口学会関西地域部会との共催

○研究懇談会

2015年6月27日、8月10日、12月21日

○その他企画

2015年12月12日 情報知識学会・情報知識フォーラム

成果

本共同研究、および、科研費や他機関の研究プログラムなど、関連する研究との共同により、以下の研究成果を得た。

(1) 時空間情報ツールの活用

明治期の神奈川県の種類記録を扱ったデータベース(DANJURO:帝塚山大学・川口洋教授作成)を対象に、時空間情報に基づいた可視化と解析の仕組みを適用した。空間情報においては、種類の接種回数や天然痘発病の状況を時間ごとに地図上で可視化し、関連法令の整備との関係の解析などが可能となった。また、時間情報においては、データベースと連携しながら種類の接種や発病を個人ごと、村ごとに時系列で可視化し、それらの履歴の比較解析を可能にした。

(2) 時間基盤情報データベースの公開

時間基盤情報のデータベースを公開した(<http://datetime.hutime.org/>)。このデータベースでは、各種の暦に基づく日付だけでなく、過去の年号、年、月の期間など、地域ごとに異なる暦に基づいた情報を相互に時系列で比較するための基礎的な情報を提供する。

(3) 新たなシーズの提案

年や月までしか分からないようなあいまいな時間記述を扱うための手法を検討し、その一部を上述のデータベースで試験的に実装した。また、セマンティックWeb技術を活用するためのRDF(Resource Description Framework)形式のデータを複数のWebページなどに埋め込み、それらに基づいて当該データベースから必要な時間基盤情報を抽出する仕組みを実装した。地

名情報についても、同様の仕組みを用いて、Webページ内の地名から、これまでの研究成果である地名辞書の該当データを得る仕組みを確立した。その他、地域研を含む複数のデータベースにおいて、セマンティックWeb技術の適用および研究シナリオに基づいた活用方法を検討した。

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開（統括班）

2. 非文字資料の共有化と研究利用

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

石川 禎浩（京都大学人文科学研究所）

梅村 卓（明治学院大学）

太田 出（広島大学大学院文学研究科）

菊地 暁（京都大学人文科学研究所）

白山 眞理（日本カメラ博物館）

瀧下 彩子（東洋文庫）

武田 雅哉（北海道大学大学院文学研究科）

竹中 朗（国書刊行会）

田島 奈都子（青梅市立美術館）

谷川 竜一（金沢大学新学術創成研究機構）

陳 來幸（兵庫県立大学経済学部）

富澤 芳亜（島根大学教育学部）

萩原 充（釧路公立大学経済学部）

松本 ますみ（室蘭工業大学人文化系領域）

丸田 孝志（広島大学大学院総合科学研究科）

向井 佑介（京都府立大学文学部）

山本 一生（東京大学大学院教育学研究科）

目的

非文字資料は、地域や歴史の記憶としてだけでなく、人々の集合的記憶を反映させており、近年その学術利用の価値が再認識されている。本プロジェクトは、歴史学、美学、カルチュラル・スタディーズ、表象文化論、メディア論などのディシプリンを連携させて、地域研究における非文字資料の研究や解釈の方法について共同討議することを目的とする。この複合プロジェクトでは、東アジアを事例としつつも、その他の地域との比較検討を進めている。

なお、本プロジェクトで、非文字資料の表現手段やその効果が、特定の政策や機構、メディアやテクノロジーによって規定されるだけでなく、その底流には、人びとのアイデンティティや集合的記憶、国家観や時代認識など、さまざまなファクターが深くかかわってきたことに留意したい。こうした観点から、非文字資料の解釈や分析の方法論について検討を加えるとともに、非文字資料共有化の枠組みについても討議を進めたいと考えている。

本年度は、これまで共同で調査、研究してきた京都大学人文科学研究所所蔵の華北交通写真および神戸中華同文学学校の行事資料を中心として、具体的な成果のまとめを進めた。

前者については、2015年12月20日、京都大学人文科学研究所で「華北交通写真協議会」を開催し、12名が報告をおこなった。とくに、西村陽子氏（花園大学）は「華北交通写真データベース：仕様と実装」と題して、構築中のデータベースを披露して注目を集めた。また、2016年2月23日には、石川県政記念しいのき迎賓館にて「東亜学術論壇2016：交錯する東アジア像」と題するワークショップを開催し、華北交通写真の学術利用を含め、非文字資料の超域研究の可能性についての議論を進めた。

後者については、2016年1月28日から4月9日まで、神戸華僑歴史博物館で「春節祭特別展 神戸華僑の戦後70年：神戸中華同文学学校の行事写真を中心に」を開催した。デジタル化された史資料の社会還元を試みるひとつの模索であったが、2016年2月1日付『毎日新聞』にとりあげられるなど、強い関心が寄せられた。

その他、昨年度まで進めていた音資料の国際研究成果として、貴志俊彦・川島真・孫安石編著『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』（勉誠出版、2015年8月）の編集、刊行をおこなった。

成果

(1) 貴志俊彦・白山真理編『京都大学人文科学研究所所蔵華北交通写真集成（仮）』（国書刊行会、2016年10月刊行予定）

第1冊

・総論

貴志俊彦「華北交通株式会社とその弘報戦略」

白山真理「華北交通写真の分類と利用」

・各論報告

富澤芳亜「華北交通と占領地の鉱工業」

萩原充「華北交通株式会社による新規鉄道建設」

山本一生「北支占領地の学校教育が写真で記録されることの意味：『北支』と『華北交通写真』との比較を通して」

菊地暁「華北交通写真と民俗表象」

向井佑介「華北交通写真にみる日中戦争期の史跡調査」

梅村卓「中国共産党の華北イメージ：『晋察冀画報』を中心に」

太田出「宣撫官と愛路運動」

瀧下彩子「華北交通写真に見る戦前期観光業」

第2冊

第1部「引き伸ばし写真（分類写真）」（担当：白山真理、竹中朗）

第2部「軍報道課（部）検閲済印付写真」（担当：貴志俊彦）

(2) 研究実施状況で触れたように、2016年1月28日～4月9日、神戸中華同文学学校、神戸中華同文学学校校友会、神戸市、神戸新聞社、南京町商店街振興組合の後援を得て、神戸華僑歴史博物館で「春節祭特別展 神戸華僑の戦後70年：神戸中華同文学学校の行事写真を中心に」を開催した。展示資料は、神戸中華同文学学校が所蔵する「学校行事写真」「学校通説」を中心としたが、同校と神戸華僑とに関係する多彩な写真も展示され、関係者の注目を惹いた。

(3) 昨年度までの成果をもとに、貴志俊彦・川島真・孫安石編著『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』（勉誠出版、2015年8月）の編集作業を進め、刊行に至った。全体構成は、次のとおり。第1部「戦争とラジオ」、第2部「ラジオと『帝国』」、第3部「冷戦とラジオ」、第4部「研究の新潮流」、第5部「ラジオ研究著作シリーズ：自著・他著を語る」、第6部「ラジオ研究のための文献・資料紹介」、巻末資料。

3. CIAS所蔵資料の活用

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

河瀬 彰宏（国立国語研究所）

福田 宏（愛知教育大学地域社会システム講座）

渡邊 英徳（首都大学東京システムデザイン学部）

柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）

帯谷 知可（京都大学地域研究統合情報センター）

亀田 堯宙（京都大学地域研究統合情報センター）

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）が所蔵する、映像・画像・フィールドノート・古文書・公文書・新聞情報・統計資料等の研究資源を利用した研究を進めることを目的とする。その時、情報学の技術を援用した新しい地域研究（地域情報学）の展開を念頭に置き、CIAS所蔵資料だけではなく他の資料と組み合わせた新しい研究の展開や、データベースを活用した新しい研究アプローチの検討をも含む。これらを通じ、地域研究の促進に必要な、データの収集、共有、分析、発信の方法を検討し、地域情報学の展開を促進することが本複合共同研究ユニットの目的である。

2015年度の
研究実施状況

本年度は、CIASが所蔵する研究資料のうち、フィールドノート・データベースと音楽データベースを活用した研究活動を実施した。フィールドノート・データベースでは、「誤差か、発見の糸口か？：情報学的分析結果を学際的に評価する」と題する研究会を、東京大学空間情報学研究センターと共催し、共同研究メンバー（代表）の柳澤が「地域情報学の読み解き：発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析」と題する口頭発表を行った。また、音楽文化の分析における地域研究と情報学の融合研究会シリーズを立ち上げ、その第1回の研究会「文化データの計量分析：日本民謡楽曲コーパス構築への指針」を2016年2月5日に開催し、音楽文化の分析に情報学の視点・技術を取り入れ、従来の音楽研究と融合させた研究会を開

催した。

成果

フィールドノート・データベースを利用した研究会での発表「地域情報学の読み解き：発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析」では、高谷好一（京都大学名誉教授）が作成したフィールドノートの記録を時空間表示させた高谷好一フィールドアーカイブを用いた研究成果を発表した。地点ごとの情報を地図上で可視化させ、さらに、共起する語彙を抽出させたテキスト分析の結果を色別に表示させることにより、フィールドノートの記録を発見のツールとして利用するための方策を検討した。その結果、フリーワード検索とは異なり、人びとの歴史的経緯を抽出することが可能であることが明らかになった。「文化データの計量分析：日本民謡楽曲コーパス構築への指針」では、九州地方の音楽データベースの分析を通じ、方言との関連性等について考察した。その結果、日本民謡における小泉のテトラコルド論を計量学的に評価し、地域別のクラスタリングから地域性を抽出することができた。また、文学を題材にした情報分析の発表では、文学に使用される地名の位置情報をマッピングすることで、言葉がもつイメージが地理的特性と結びついていたり、それが作家による創作である可能性について検討した。

2. 地域情報学プロジェクト 地域情報学の展開 (統括班)

3. CIAS所蔵資料の活用

1. 1950・60年代の東南アジア・ムスリムの社会史

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

坪井 祐司 (東洋文庫)

◆メンバー

金子 奈央 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

國谷 徹 (上智大学)

篠崎 香織 (北九州市立大学)

光成 歩 (宗教情報リサーチセンター)

モハメド・シュクリ (Klasika Media)

モハメド・ファリド (Institute of Islamic Understanding, Malaysia)

亀田 堯宙 (京都大学地域研究統合情報センター)

山本 博之 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

京都大学地域研究統合情報センター (CIAS) が所蔵・公開しているジャウィ (マレー語のアラビア文字表記) の雑誌『カラム』の記事データベースを利用した研究を行う。1950~69年にシンガポール・マレーシアにて出版された月刊の総合誌『カラム』は、欠号率が極めて低い状態でCIASに所蔵されており、その記事はローマ字翻字の上で雑誌記事データベースとして公開されており、マレーシアの教育・出版に活用されている。本研究は、『カラム』記事データベースをもとに、情報学の技術を用いたテキスト分析と地域研究者によるテキスト分析の二つを総合的に行い、成果の出版につなげることを目的とする。これにより、情報学と地域研究の連携を通じて資料の意義や新たな知見の可能性を示すとともに、これまであまり焦点が当たらなかった当該時期の島嶼部東南アジアのマレー・ムスリムの諸活動を明らかにする。『カラム』の出版地であるマレーシアにおいてもその成果を論集として出版することを目指す。

2015年度の 研究実施状況

データベースの構築およびそれを利用した研究の両面から活動を行った。データベースに関しては、「カラム雑誌記事データベース」への記事データの入力を進め、検索の便宜の向上をはかった。並行して、各共同研究員による『カラム』の内容の検討を進め、研究会を3回 (2015年4月25日、5月23日、2016年3月28日)

開催した。第1、2回の研究会で議論した結果、『カラム』の読者投稿にもとづくQ&Aコーナーであるコラム「千一問」を集中的に検討することを決定した。各自が同コラムに関する論文を執筆し、2016年3月にはディスカッションペーパー『『カラム』の時代VII: コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』を刊行した。第3回研究会では、ディスカッションペーパーの内容についての検討を行った。くわえて、2016年2月にマレーシアの言語出版局との協力により、『カラム』に関する国際ワークショップを開催した。本共同研究のメンバー2名が出張して成果を報告するとともに、現地の研究者と議論を行った。同年3月には、山本博之が『カラム』を扱った著作を出版した。

成果

データベースについては、記事のタイトルだけでなく、記事本文の単語による検索が可能になり、利用の便宜が大幅に向上した。それとともに、『カラム』誌の内容の研究を通じて、先行研究では空白となっている当該時期の東南アジアのイスラム運動やムスリム社会の一端を明らかにした。山本博之による著作は、共同研究の成果をもとに、『カラム』を題材として雑誌を資料として読み解く方法論を示したものである。読者からの質問のコーナーを特集したディスカッションペーパーでは、読者と編集者の一問一答の分析を集中的に行うことで、執筆者のみならずムスリム読者層にまで分析対象を広げることができた。読者の側からは、当時のマレー・ムスリムを取り巻く社会環境が明らかになった。多民族社会において、彼らは結婚などの家族関係や仕事・職場において多様な出自を持つムスリムや非ムスリムと日常的に交渉を持っており、錯綜する価値観のなかで宗教的な正しさを模索した。他方、回答者である編集者エドルスは、イスラムからの逸脱には厳格であったが、西洋近代には肯定的であり、非ムスリムとの関係にも寛容であった。ここから、新たに世俗的な独立国家の建設が進んだ1950、60年代においてもイスラム主義の潮流がみられること、その思想の特徴は改革主義、近代主義、多文化共存型であることがわかる。こうしたイスラムのあり方は2016年2月に開催したマレーシアにおける国際セミナーでも関心を持たれており、現在のマレーシアのイスラムを理解するうえでも重要と考えられる。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト 強くしなやかな社会をめざして： 地域研究の可能性（統括班）

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

大矢根 淳（専修大学人間科学部）

北本 朝展（国立情報学研究所）

谷川 竜一（金沢大学新学術創成研究機構）

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

災害とは日常生活の延長上にあり、それぞれの社会が抱える潜在的な課題が外力によって露呈した状態である。そのため、災害対応においては、被災前の状態に戻すことではなく、被災を契機に明らかになった社会の潜在的課題に働きかけ、よりよい社会を作ることが期待される。そのためには被災前を含む社会の状況を把握することが不可欠であり、この点において災害対応と地域研究が結びつく意義がある。本プロジェクトでは、(1) 制度面を中心にした災害・紛争への早期対応や復興過程における社会の再編、(2) 記録・記憶を通じた社会の再生・再編の二つの側面から、強くしなやかな社会づくりに資する学術研究としての「災害対応の地域研究」の提示をめざす。

2015年度の
研究実施状況

日本の防災・災害対応の経験や知見を日本以外の社会における防災・災害対応と接合するため、経済成長と都市化が著しい東南アジア諸国のうちフィリピン、インドネシア、マレーシアの防災・災害対応の研究者と共同で、東南アジア諸国および日本に共通する防災・災害対応の諸課題を検討した。

成果

フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学で2016年3月に国際会議“International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia”を実施した。会議は2日間にわたって開催され、フィリピン、インドネシア、マレーシア、日本からの報告者による24件の報告があり、洪水対策、防災教育、災害情報管理、交通渋滞、NGOやSNSの役割など多岐にわたるテーマについて議論した。

また、センターの「災害対応の地域研究」プロジェクトと共催で研究会を実施し、センターのCIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」の第4巻と第5巻を刊行し、これによりシリーズの刊行が完結した。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト 強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統括班）

1. 災害・紛争と復興

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

災害や紛争は、個人や社会が直面する目の前の差し迫った人道上の危機であり、直接被害を受けていない地域を含む外部社会から解決のための働きかけが行われる。また、災害や紛争の被害はしばしば複合的な形であられるため、要因の究明や対応にあたっては、多様な専門性が求められる。このような意味で、災害や紛争に対応する現場は文化的背景や専門の異なる人々が協業する場となっている。

本プロジェクトでは、以上のことを念頭に置きながら、紛争・災害への早期対応や復興過程における社会の再編について、実務者や現地社会との連携を視野に入れながら研究を行う。とりわけ、災害や紛争の現場となっている地域社会に関する地域研究の知見を踏まえることで、業種や専門性、地域を越えて理解される情報や技術を提供する方法を検討する。

2015年度の 研究実施状況

(1) 京都大学地域研究統合情報センターの地域情報学プロジェクトとの共同により、インドネシアの事例を中心とする「災害と社会 地域情報マッピングシステム」ならびにラテンアメリカの事例を中心とする社会紛争データベースとそれに基づく社会紛争マッピングシステムの開発を順次進めた。

(2) 京大地域研の「災害対応の地域研究」プロジェクトとの共同により、原発事故・産業事故への対応や戦争・革命・政変などの急激な社会変動に対する社会の反応も含めて「災害対応」と捉えて社会のレジリエンスを検討した。また、日本の災害復興の事例と世界の災害復興の事例を比較し、両者を架橋する手法を検討した。

(3) JSPS拠点形成事業「アジアの防災コミュニティ形成のための研究者・実務者・情報の統合型ネットワー

ク拠点」と連携して、インドネシア、フィリピン、マレーシア、日本の災害対応研究と実践を共有する国際セミナーを2回実施した。また、インドネシア、フィリピン、マレーシアの若手研究者を対象に日本の防災実践を伝えるフィールド研修を日本国内3か所で実施し、文化社会背景の異なる国で災害対応の実践を共有する方法を検討した。

成果

(1) 上記のデータベース等の開発を進める過程で、特定地域や特定テーマについてオンライン記事情報を自動収集・自動分類する個人向けメールアラート・システム「BeritaKU」を開発し、インドネシア（3紙）、マレーシア（4紙）、フィリピン（2紙）、ベトナム（2紙）についてオンライン記事の自動収集を開始した。

(2) 上記の (2) について、それぞれの成果をCIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」第4巻、第5巻として商業出版した。また、その過程で、高校生・大学生を対象にした災害地域情報の読み解きのためのガイドブックをCIASブックレット「情報とフィールド科学」第4巻として商業出版した。

(3) インドネシア、フィリピン、マレーシアとの国際セミナーならびにフィールド研修を通じて、①日常的に繰り返し発生する「小さな災害」と大規模な被害を伴い社会全体で中長期にわたる対応が必要な「大きな災害」を区別すること、②災害対応を検討する上で社会の流動性の高さを留意することの重要性、③日本を含めた4か国で共有可能な災害としての水害、という3つの知見を共有した。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト
強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統括班）
1. 災害・紛争と復興
1. ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究
個別共同研究ユニット

- ◆研究期間
2015年度
- ◆代表
村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）
- ◆メンバー
幡谷 則子（上智大学外国語学部）
浜口 伸明（神戸大学経済経営研究所）
宮地 隆廣（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）
安井 伸（慶應義塾大学商学部）
和田 毅（東京大学大学院総合文化研究科）

目的

本研究の目的は、近年、ラテンアメリカで増加している社会紛争について、主要な国を対象に分析し、比較研究を行ない、その発生プロセスを明らかにすることである。そして、その分析結果をもとに、社会紛争の終結メカニズムや将来の発生予測・予防にむけた方策を考察する。

ラテンアメリカでは、1980年代から90年代のネオリベラリズムの時代をへて、植民地時代から続く格差と貧困の問題がより深刻となった。そうした事態を背景に、今世紀にはいり、各国で社会紛争が増加し、政治社会を揺るがす事態となっている。

そうした社会紛争について、本研究に先立つプロジェクトでは、社会紛争データベースの整理が進んでいるペルーの事例を中心に分析を行ってきた。その中で分かってきたことは、開発が新たに、あるいは急速に進んだ地域で社会紛争が頻発していることである。そこで、本研究では、ペルーに関し、類似の社会経済的状况ながら社会紛争が頻発していない地域との比較分析結果を確認する。そのうえで、ラテンアメリカの他の国との比較研究を重点的に実施し、社会紛争の発生過程についての分析を深める。また、その結果に基づいて、社会紛争の終結や予防のメカニズムについて検討する。

2015年度の
研究実施状況

シンポジウム（1回）とワークショップ（3回）にお

いて、ペルー以外のラテンアメリカ諸国における社会紛争の傾向を確認するとともに、紛争終結のためのメカニズムが働いている場合について、ペルーとの比較で制度面などの相違について分析を実施した。シンポジウムでは、ブラジル、メキシコ、チリ、コロンビア、ベネズエラ、ペルーをとりあげた。ワークショップは、コロンビア、アルゼンチン、グアテマラについて実施し、考察を深めた。

●シンポジウム
2015年6月22日
（上智大学中央図書館棟9階921会議室）

テーマ「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題」

●ワークショップ
2015年6月1日
（京都大学稲盛財団記念館3階小会議室I）

Carlo Nasi（Universidad de Los Andes, Colombia）“El proceso de paz con las FARC en Colombia”

●2016年1月23日
（京都大学地域研究統合情報センターセミナー室）

Enrique Peruzzotti（Universidad Di Tella, Argentina）“Del kirchnerismo al ‘macrismo’: legados, continuidades y rupturas”

●2015年3月5日
（京都大学地域研究統合情報センターセミナー室）

Eduardo Nuñez（Instituto Nacional Democrático-Guatemala）“Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas”

成果

ラテンアメリカでは、1980年代から90年代のネオリベラリズムの時代をへて、植民地時代から続く格差と貧困の問題がより深刻となった。そうした事態を背景に、今世紀にはいり、各国で社会紛争が増加し、ペルーをはじめとする幾つかの国では政治社会を揺るがす事態となっている。そうした社会紛争について、社会紛争データベースの整理が進んでいるペルーの事例を中心に分析を行なった。その中で分かってきたことは、開発が新たに、あるいは急速に進んだ地域で社会紛争が頻発していることである。

本研究では、ペルーに関し、類似の社会経済的状况ながら社会紛争が頻発していない地域との比較分析結果を確認する作業を行った。その過程で開発する側、とくに開発に携わる企業と地域住民との間に対話や理解促進のための公式、非公式のメカニズムが存在しているか、そしてそれが一定の機能を果たしているか否かによって相違が生ずることが明らかとなっ

た。

さらに、そうしたメカニズムの機能には、中央政府や州政府といった国家からの支えの有無が関係していることも判明した。それは、近年、新たに紛争化した事例に、当事者間の利害調整メカニズムの成功例とされていたところが含まれていることから指摘できることである。そうした例では、国家や州政府が当事者間の調整メカニズムに関与することある時期からなくなり、開発する側と地域住民側との間に相互不信が拡大し紛争化に至っていた。

国家の関与については、元来、国家のプレゼンスが高い（アルゼンチンの例）か、その時の政府が社会紛争に取り組む姿勢を常に示している（ボリビアの例）か、という点での違いが、紛争の激化や長期化が起きる（ペルーの例）余地を抑えている可能性がある。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト 強しなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統括班）

1. 記録・記憶と社会の再生

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

谷川 竜一（金沢大学新学術創成研究機構）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

社会の記録としての文化や集合的記憶は、グローバル化などの変化を乗り切るための各社会内における紐帯として重要な役割を担うと同時に、新しい世代にとっては自己の社会を硬直させる足かせともなりうる。本プロジェクトではそうした矛盾を意識しながらも、文化や記憶は各社会が自立性を維持しながら、危機やめまぐるしい変化を乗り切るために不可欠なものとして捉える。具体的には、紛争、災害、社会間の対立や格差などに見舞われた社会において、有形無形の記録・記憶の収蔵庫が編み出され、活用される事例を、個別研究と協働して考察する。記録や記憶の確立（時に忘却）の手法を、レジリエンスとしての社会再生・再編に結びつける実践的な手立てとして提案する。

2015年度の 研究実施状況

ある出来事の記憶が意識化された場合、それを記憶・記録するに値するかどうかをめぐって社会的な衝突が生じがちである。いわば価値観のぶつかり合いとも言え、その調停や調和は容易ではない。本年度、当ユニットはそうした側面に注目しながら、記憶が社会の紐帯となりゆく歴史的な様相、災害からの復興や個人の救済に関わる実相などに注目してきた。

そして、そうした記憶のメカニズムの解明に対する学術的貢献と、その成果を実社会に還流させるための実践的な取り組みを行っていくことを目標としてきた。今年度は3年目にあたるため、これまでの研究成果をまとめ、研究期間を終えた過去の個別ユニットのメンバーとの議論を行うと同時に、現行のメンバーや個別研究ユニットメンバーとの連携に努めた。具体的には、学術的な意見交換や発表の場を支援・用意すると同時に、実践的な側面においても映像の上映やアプリ、データベースなどの開発などに関して公開の場

や機会を設け、議論を深めた。

成果

複合ユニットとしては、個別ユニットのメンバーの成果を全体で共有すると同時に、京都大学地域研究統合情報センターの共同利用・共同研究の推進のためにも、その入れ物となるような出版物の出版に注力・貢献した。その成果として、谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』（相関地域研究3、青弓社、2016年）を出版した。本書は、本複合の代表である山本・谷川（谷川は2015年9月まで）の論考や、本ユニットに属する王の個別研究ユニットの研究成果などが盛り込まれている。

一方、極めて長い年月を越えて人間や社会の記憶が、意図せざる形で残ったり、ある時に新しい形で再認識されたりする場合がある。その点に注目した成果として、谷川竜一『灯台から考える海の近代』（情報とフィールド科学2、京都大学学術出版会、2016年）を出版した。本成果は本複合ユニットで得てきた災害、戦争、地域の象徴などに関する記憶のメカニズムの諸相に対する知見を使って、建造物の歴史書としてまとめたものである。また、本複合ユニットに属す北本による建築や場所を通した災害の記憶を可視化するアプリの開発などは、昨年まで当ユニットに所属していた寺田ユニットの成果なども引き継ぐ成果とも言え、重層的で多岐的な繋がりをもって、複合ユニット内の情報・成果共有を行うことができた。特に本年は、新たに加わった2つの個別ユニットにより、本ユニット研究の具体性と社会還元性も高まったことを付言しておく。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト 強しなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統括班）

1. 記録・記憶と社会の再生

1. 危機からの社会再生における 情報源としての映像作品：東 南アジアを事例として

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2015年度

◆代表

篠崎 香織（北九州市立大学）

◆メンバー

岡田 知子（東京外国語大学総合国際学研究院）

長田 紀之（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

坂川 直也（フリーランス）

玉置 真紀子（江戸川大学社会学部）

平松 秀樹（大阪大学外国語学部）

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

東南アジアでは2000年代以降、長編・短編の劇映画やドキュメンタリー映画など映像作品の製作が活発化しており、国際的に注目され高い評価を得ている。その背景には、デジタル・通信技術の進展により誰もが映像を製作できるようになったことと、東南アジアの多くの国において強権的な統治が緩み表現の自由が拡大したことが重なり、映像を通じて個々の問題意識や表現欲求を表明する人たちが増えたという事情がある。東南アジアでは、災害をめぐる個人の経験が映像を通じて記録されつつあるとともに、急激な経済成長と都市化に伴う経済的格差の拡大など今日的な課題を扱う映画や、紛争や政治的抑圧などこれまで封印されてきた負の歴史を扱う映画が作られるようになってきている。本研究はこうした災いを扱う映像作品、とりわけ劇映画および短編映画に着目し、東南アジアの人たちが映像作品を通じて危機をどのようにとらえ、それをどのように自分たちの経験として共有し再解釈しようとしているかを明らかにする。

2015年度の 研究実施状況

研究会5回、公開シンポジウム3回（いずれも日本国内の国際映画祭と連携）を行い、ディスカッションペーパーを刊行した。

(1) 研究会

第1回（2015年5月20日、国際交流基金）

山本博之「ブルネイの映画事情」
 玉置真紀子「フィリピンの映画事情」
 参考上映『エキストラ』（Jeffrey Jeturian監督、2013年、フィリピン）

第2回（2015年7月31日、国際交流基金）

坂川直也「最近のベトナム映画事情：B級映画都市サイゴン復活以後」

橋本彩（東京造形大学）「ラオス映画事情」

亀山恵理子（奈良県立大学地域創造学部）「東ティモール映画事情」

参考上映『ベアトリスの戦争』（Bety Reis監督、2013年、東ティモール）

第3回（2015年10月4日、京都大学地域研究統合情報センター）

坂川直也「新しいヒロイン像（陽）：ベトナム映画における戦う女たち」

西芳実「インドネシア映画における闘う女と見守る男：『黄金杖秘聞』（2014）が示す危機への立ち向かい方」

篠崎香織「短編作品から読み解く東南アジア華人社会」

字幕講習会 講師：篠崎香織・西芳実、素材提供者：長田紀之

第4回（2015年11月25日、国際交流基金）

長田紀之「ミャンマーにおける短編映画と社会 ミャンマー周縁の生と性：ショートムービー*Burmese Butterfly*（2011）に寄せて」

亀山恵理子「東ティモールにおける短編映画と社会」

橋本彩「ラオスにおける短編映画と社会」

(2) 公開シンポジウム

上映・講演会（2015年4月13日・15日、シネマート六本木）

「多色字幕による多言語映画の表現」（マレーシア映画ウィーク関連企画）

公開ワークショップ（2015年9月20日、キャナルシティ博多）

「変身するインドネシア：力と技と夢の女戦士たち」（アジアフォーカス福岡国際映画祭「マジック☆インドネシア」関連企画）

シンポジウム（2016年3月11日、国立国際美術館講堂）

「“手に職系”女子とフォーエバー・ポギー」（大阪アジア映画祭連携シンポジウム）

(3) 出版

山本博之・篠崎香織編『たたかうヒロイン：混成アジア映画研究2015』（CIAS Discussion Paper No. 60、京都大学地域研究統合情報センター、2016年）

成果

災いを扱う映像作品を分析する際に、災いに起因する社会的亀裂とそれへの対応を、その社会で製作され公開・発信されている映像作品を通じて読み解くことが有効であることが確認され、その方法が共有された。同一の災いを題材として複数の映像作品が作られており、それらの作品では家族・親戚、友人、隣人、同僚など身近な人たちとの間に生じた災いに由来する個別多様な亀裂が描かれている。災いを扱う

映像作品は、一定の人口規模を見舞った災いという「大きな物語」のなかで展開していた市井の人たちの個別多様な「小さな物語」をとらえる試みとして位置づけることができる。これらの映像作品は、作品として破綻しないように「物語」を収束させなければならず、そのなかで社会の亀裂も修復や再編に向けて描かれる構造が内包されている。また「小さな物語」の状況設定とその対応方法は、現実社会の制約を受けながらも、作り手の意図を反映するものとして解釈することができる。過去を振り返ることは、往々にして現在の課題に対応するための参照点を探す試みであることをふまえると、ある映像作品においてなぜ特定の状況設定と対応方法が選択されたのかを分析することにより、その映像作品に関わる地域にどのような社会の亀裂が存在し、それがどのように修復されようとしているのかを明らかにすることができるといえる。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト
強くしなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統括班）

1. 記録・記憶と社会の再生

2. 地域の集合的記憶の再編を支援する「メモリーハンティング」の展開と防災・ツーリズムへの応用

個別共同研究ユニット

- ◆研究期間
2015年度
- ◆代表
北本 朝展（国立情報学研究所）
- ◆メンバー
佐藤 翔輔（東北大学災害科学国際研究所）
谷川 竜一（金沢大学新学術創成研究機構）
西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）
山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究は、2014年度に京都大学地域研究統合情報センターと国立情報学研究所（NII）との共同研究により開発したAndroidアプリ「メモリーハンティング」を発展させ、地域の集合的記憶の再編を支援しつつ、防災教育や被災地ツーリズムなどに応用することを目指す。「メモリーハンティング」とは、過去に撮影された写真と同じ場所・同じ角度で現在の状況を撮影し、その際の位置情報をメタデータとして記録するアプリである。これを防災教育や被災地ツーリズムに活用するための課題として、本研究は以下の3点に焦点を合わせる。第一に、地域研が収集してきた被災地資料ならびに構築してきた人的ネットワークを活用し、世界各地の被災地でこれを実際に展開して活用する。第二に、各地のアプリ利用者の声を収集し、アプリの継続的な改良を推進する。第三に、アプリで実際に収集した多時期撮影画像の共有を進め、それを被災地における集合的記憶の再編・再生に活かす。これらの課題を通して、防災教育・被災地ツーリズムにおけるアプリの有効性を検証する。

2015年度の
研究実施状況

本年度は以下の二点を実施した。第一に、モバイルアプリ「メモリーハンティング」の改良である。具体的には、メモリーハンティングをSNSと連携させるため、アプリで撮影した写真をFacebookに投稿する機能を開発した。前年度にインドネシア・アチェの津波

被災地で実験を行った際に、インドネシア人ユーザから写真をSNSでシェアしたいとの要望を受けたため、アプリ内から直接Facebookに投稿する機能を開発することにした。第二に、防災やツーリズムにおける実利用の展開である。防災については、神戸の震災オープンデータを活用し、災害直後と現在の景観を比較して復興過程を調べる活動を進めた。ツーリズムについては、京都（2回）および長崎でワークショップやフィールドワークを開催し、アプリを用いて古写真の撮影位置の確定を行った。特筆すべきは、子供たちがアプリを楽しく使いこなしていたことであり、これはアプリの有効性を示唆する結果であると評価している。

成果

モバイルアプリ「メモリーハンティング」は、「ある写真を基準として同一構図の写真を撮影する」ことを基本機能とするアプリであるが、このシンプルな機能を防災やツーリズムなど多目的のフィールドワークに展開できる点がこのアプリの魅力である。例えば防災では、災害前と現在の写真の比較から失われた景観の価値を再認識し、災害直後と現在の写真の比較から地域の回復力を実感することができる。これは地域のウチの視点から、地域の集合的記憶を深めていく行為と言える。一方ツーリズムでは、古写真と現在の写真の比較から地域の歴史に思いをはせ、ポップカルチャー画像（アニメ、映画等）と現在の写真の比較から過去にそこを訪れた作者の視線やそこから生まれた作品世界を「聖地巡礼」として再体験できる。これは地域のソトの視点から、地域の集合的記憶を広げていく行為と言える。このように目的に応じて基準画像を差し替えることで、多様な視点から地域の価値を編集し発見する活動を展開できる点、本アプリの地域情報学的な価値であると考えられる。ただし防災とツーリズムはどちらかといえば非日常的な活動であり、それらだけを対象にするとアプリの普及にも限界がある。今後は地域の日常的な活動にアプリを組み込むことで、日々の活動からもデータが蓄積されていく仕組みを作りたい。データの蓄積が進むことで地域の集合的記憶の形成も進み、その成果が活動をさらに広げていくという、データの好循環を生み出すことが今後の大きな課題である。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト 強しなやかな社会をめざして：地域研究の可能性（統活班）

1. 記録・記憶と社会の再生

2. メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2014～2015年度

◆代表

王 柳蘭（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

飯田 玲子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

李 仁子（東北大学教育学研究科）

紺屋 あかり（京都大学東南アジア研究所）

砂井 紫里（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

瀬戸徐 映里奈（京都大学大学院農学研究科博士後期課程）

縄田 浩志（秋田大学国際資源学部）

矢内 真理子（同志社大学大学院社会学研究科）

中山 大将（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

記憶や記録に動員される多様なメディアの運用の在り方、それをとりまく地域住民・市民のみならず、研究者の実践的役割や立ち位置についても考慮し、表象される／する側といった二元的な議論を批判的に検証する。研究者としての立場や葛藤も考慮に入れた地域や民族の複数性や多声性、自・他像研究を越えたあたらしい地域研究やフィールドワーク、多元的な知の継承の在り方について学術的地平を開くことを目的とする。

2015年度の 研究実施状況

研究会は2014年に3回、2015年に4回それぞれ実施した。そのうち本年度は、「多声化社会」と「メディア」をキーワードにし、メディア・研究者・当事者の3者の相互作用のなかで、フィールドの現場でさまざまな声が生成され、紡ぎだされていく視点を共有しつつ、メディア研究、歴史学、人類学、地域研究者によって議論を行った。さらに2度、フィールドトリップを秋田と姫路で行い、学際的な共同研究を実施した。秋田では、縄田浩志氏による企画により「篤農家がつくる地域社会：草木谷と八郎潟における実践に学ぶ」と題し、5本の研究発表が行われた。さらに現場で複数の博物館見学やNPO代表の講演会を実際した。姫路

では、瀬戸徐映里奈氏による企画で「移民・難民と地域社会：姫路市の取り組みから学ぶ」と題して3本の研究発表を行った。さらに移民・難民をささえてきた教会、NPO団体や民族団体などを訪問し、当事者から貴重なお話を伺う機会を持った。

成果

研究成果はディスカッションペーパー（王柳蘭編『声を繋ぎ、掘り起こす：多声化社会の葛藤とメディア』CIAS Discussion Paper No.66、京都大学地域研究統合情報センター、2016年）として出版した。その内容は研究会の発表成果をおもに加筆修正したものであるが、そのテーマは、越境者・避難者が生きる社会（在日ベトナム人社会、樺太引揚者、中国系ムスリム）、災いに直面した社会（3.11後の被災地）、複製技術の変容と芸能・文化（インド、日本、アフリカ、フィリピン）など多岐にわたった。これらの報告を通して、フィールドワーカーが現場で直面する多様なメディア（テレビ、インターネット、Facebook、博物館、新聞、小冊子、映画）の諸動向を批判的に見据えつつ、さらに現場の人々が生きる世界のウチ側に入り、耳を傾けることによって、より動態のかつ多声的な社会のあり方に迫ることができる点を共有した。表象される／する側といった二元的な議論を越えた自・他像研究の重要性をあらためて認識することができた。

1. 地域研究方法論

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

さまざまな研究者によって行われている地域研究の手法を個々の研究者の「名人芸」として済ませるのではなく、対象地域や分野の違いを超えて共有・利用が可能になるような形に洗練させるための基礎的な調査を行う。2013年度までの3年間に行われた地域研究方法論の共同研究では、主に大学院教育における地域研究の方法について検討し、その結果を雑誌『地域研究』（第12巻第2号）の「総特集 地域研究方法論」で発表した。本共同研究では、引き続き大学院教育における地域研究のあり方について具体的な事例に即して検討を続けるとともに、(1) 多様な専門性を持つ研究者が協働する仕組みとしての地域研究の歩みを踏まえた地域研究の意義と方法、(2) 研究者以外の専門家・実務者による成果の活用を意識した地域研究の方法、(3) 自身が社会生活する存在としての地域研究者の生活と研究の両立などの諸課題についての検討を通じて、学術研究と社会のそれぞれにおける地域研究（者）の位置づけを考える。

2015年度の
研究実施状況

本年度は研究代表者が長期海外出張だったため、一時帰国の際に研究会を開催し、それ以外は主に電子メール等で連絡を取り合うことで研究を進めた。主要な日刊紙がオンラインで配信する記事を自動収集して、記事一覧を毎日電子メールで通知するとともに記事をアーカイブ化する仕組みを昨年度までにマレーシアとインドネシアで試作していたが、これについて、(1) 電子メールでの通知の際に記事見出しに機械翻訳の日本語を添える、(2) 記事中から抜き出した地名をもとに記事を地図上で表示する、の2つの改修を試みた。(1) については（翻訳結果の精度は機械翻訳に依存するが）仕組みとしては実用可能となった。(2) につ

いては地名の抽出（地名と同じ単語の一般名詞との区別など）などの課題が残された。また、これと並行して、PDFファイルによってオンライン上で公開されている研究論文から地名を抽出して地図上で表現する仕組みも試作した。ただし実用可能な段階には至っていない。

成果

今年度までの共同研究の内容を検討して地域研究の方法論に関する課題を以下の5点に整理した。

(1) 新しい地域研究を求めて：地域の固有論理から連携へ

従来の地域研究は「地域の固有論理の析出」を特徴とすることが多かったが、今日の地域研究では課題設定、調査と分析、成果発表の各段階で連携を意識して研究を行うことが求められる。対象地域が異なる地域研究者どうしの連携を支える仕組み作りが課題。なお、地域研究を行うようになるにはさまざまな経路があり、自分または他人が見てその人が地域研究者だと思えばその人は地域研究者であると捉えるのが妥当だろう。

(2) 地域研究コミュニティ：地域研究の成果・業績を評価する

地域研究の方法論として個別に挙げられる悩みの多くは査読論文執筆、学会発表、研究費の獲得、常勤ポストの確保などで、いずれも業績の評価に関わる問題。学術研究の業績の評価を担うのは分野別研究者コミュニティ（学会など）。地域研究コンソーシアムを地域研究の研究者コミュニティに発展させられないか。

(3) 課題発見・対応：地域の課題や研究を可視化する

現地の最新情報を持っている若手研究者は所属先が短期間に変わることが多く、「地域研究者名鑑」を所属組織ごとに行くとアップデートが困難。所属組織ごとではなく発表物（論文・学会発表）を地図上に表現の方が実用的。さらに、日々変化している社会の関心の動向を地図上で示し、両者を重ねることで課題発見・対応が容易に行えるようになるのではないか。

(4) 異分野連携：科学技術に文化を取り入れる

自然科学系と人文社会系の共同研究では、「研究に地域文化の要素を取り入れる」という言葉が指す意味が共有されないことがしばしば見られる。現地の研究者の協力でデータ収集も社会還元もできるとしても、欧米や日本で学んだ現地の研究協力者が無意識に行うフィールドデータの「翻訳」をウォッチするこ

とが必要。

(5) 成果発信・社会貢献：研究内容を伝え共有する

日本語・英語・現地語の三言語で研究者・実務者・市民社会に発信するとともに次世代を育成することが求められる。これをすべて個人の努力で行うには限界がある。効果的な研究成果発信のためには翻訳・通訳にも適切な人材と予算の措置が必要。

2 地域研究コンソーシアムの運営体制と活動

地域研究統合情報センター（地域研）には2006年より地域研究コンソーシアム（JCAS）事務局が設置されている。JCAS発足当時46だった加盟組織数は、2016年3月末日現在97に達した。

JCASの運営は、13の幹事組織を中心とする運営委員会、理事会、および事務局が協力して行っている。地域研は、運営を担う幹事組織のひとつとして、事務局機能に加えて、ホームページの維持・管理、ニューズレターと和文雑誌『地域研究』の刊行を担うとともに、2015年度は情報資源部会、広報部会、年次集會部会、社会連携部会、地域研究方法論部会の幹事役も務めた。

発足以来、試行錯誤を経ながら運営の基本的な枠組みができあがったことを受けて、JCASは、2010年度には、幹事組織以外の加盟組織を広く巻き込み、ネットワークを活用して共同や連携を進めていく新しい段階に入った。従来の「次世代支援」に加え、「共同企画研究」「共同企画講義」「学会連携」「オンデマンド・セミナー」「特定課題研究」の各種公募プログラムの拡充や、一層の発信力の強化に努めることとなった。2011度には地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）が設置された。

事務局は、地域研究の設計、共同研究の推進、学会との連携、社会への還元、活動内容の発信というJCASの5つの重点分野の活動を日々支えている。2015年度は、メールマガジン「JCAS News」を53回配信し、ほぼ週刊の頻度で地域研究関連のシンポジウム・研究集會の案内、地域研究コンソーシアムと関連組織による多様な研究プロジェクトや研究員の公募情報を掲載した。また、2015年度には研究集會やプログラム8件を主催・共催し、広報協力は70件に達した。

2015年度のJCASの主な活動は以下の通りである。

1. 年次集會およびコンソーシアム・ウィーク

年次集會は2015年11月1日、東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開催された。午前中の総会では、年間の活動紹介、次世代ワークショップ報告に加えて、第5回地域研究コンソーシアム賞の授与式ならびに受賞者によるスピーチが行われた。午後には一般公開シンポジウム「境界・境域への挑戦と『地域』」が行われた。このシンポジウムは、近年、世界各地で顕在化する国境や境界をめぐる問題に焦点を当て、さまざまな境界はどのようにして作り出され、

どのように乗り越えられるのか、境界が生まれた地域に暮らす人々はこの変動にどのように向き合っているのか、地域研究者はそれにどのように向き合うべきかという問題意識のもとに企画された。第一線の研究者により、イスラーム国、パレスチナ、ウクライナ、アフリカの紛争、東南アジア海域世界に関する報告が行われた。国際機関ならびにボーダースタディーズの見地からのコメントに続き、活発な議論が行われた。

2. 地域研究コンソーシアム賞

第5回（2015年度）の受賞作品・受賞者は次の通り。

- *研究作品賞授賞作品：横山智著『納豆の起源』（NHK出版）
- *登竜賞授賞作品：箕曲在弘著『フェアトレードの人類学 ラオス南部ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』（めこん）、小西賢吾著『四川チベットの宗教と地域社会 宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』（風響社）
- *研究企画賞授賞活動：該当なし
- *社会連携賞授賞活動：境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」

3. 公募プログラム

(1) 次世代支援

毎年募集している次世代地域研究ワークショップについては、2015年度は「自由課題・自由開催枠」（2枠）、「東南アジア地域研究枠」、「ボーダースタディーズ枠」、「地域研究方法論枠」の5つの枠が設定・募集され、採択となった次の5件が開催された（参照：<http://www.jcas.jp/about/jisedaiws.html>）。

- ①自由課題・自由開催：「学際的コミュニケーションツールとしてのフィールドノート」（2016年3月5日、京都リサーチパーク町家スタジオ）、「災害をいかに地域に伝えるか—南アジアにおける気象学と地域研究との協働」（2016年2月6日、京都大学東南アジア研究所東南亭）
- ②東南アジア地域研究：「公的統計のマイクロデータを活用したインドネシア村落の社会変容に関する広域把握・分析手法の検討」（2015年12月22日、京都大学稲盛財団記念館）
- ③ボーダースタディーズ枠：「領土の再編と地域研究：南スーダン独立後『スーダン地域』再考の試み」（2015

年12月18日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究科マルチメディア室)

- ④域研究方法論枠：「東南アジア地域研究情報資源の共有をめざして—いま、ライブラリアンから伝えたいこと」(2016年2月19日、京都大学稲盛財団記念館大会議室)

(2) オンデマンド・セミナー

JCASのネットワークを活用して社会からの要望に応じてセミナー等に地域研究の専門家を派遣するもの。2015度は次の2件が実施された。

- ①「北野高校SGH関連講演～災害・防災から見た東南アジアと日本」に西芳実氏(京都大学地域研究統合情報センター)を派遣(2015年7月18日、大阪府立北野高等学校六稜会館ホール)
- ②「東南アジア研究とその手法について学ぶ」に西芳実氏(京都大学地域研究統合情報センター)を派遣(2015年8月4日、京都大学稲盛財団記念館大会議室)

(3) 特定課題研究

JCAS加盟組織からの要請に基づき、加盟組織が公募する共同研究の募集・選考・実施にJCASが協力するもの。2015年度は、地域研究統合情報センターの共同研究「災害対応の地域研究」の共同研究プロジェクトの公募に協力した(下記4.(2)参照)。

(4) 共催企画

JCAS加盟組織等からの要請に基づき、JCASが共催の形で協力するもの。2015年度は次の3件が実施された。

- ①「公開シンポジウム『亀裂の走る世界の中で—地域研究からの問い』」(主催：日本学術会議地域研究委員会地域基盤整備分科会・多文化共生分科会、早稲田大学イスラーム地域研究機構、2015年10月3日、早稲田大学大隈小講堂)
- ②「京都で世界を旅しよう2016『地球たんけんたい④』」(主催：NPO法人平和環境もやいネット、2016年2～3月・全5回、京都大学稲盛財団記念館、同志社大学江湖館、志高館等)
- ③「国際シンポジウム『中東難民と欧州統合』」(主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2016年3月24日、明治大学(駿河台)リバティータワー1階1011教室)

4. 社会連携

JCASは、災害・紛争への対応、地域研究の成果の社会での活用、地域研究者のライフとキャリアの3つを柱として、社会連携を推進している。

- (1) JCAS社会連携プロジェクト：地域研究による社会連携の担い手や分野を拡大する目的でJCAS加盟組織から社会連携活動を募集し、JCAS社会連携プロジェクトとして登録するもの。2015年度は以下の6件が登録された(継続分含む)。

- ①「災害対応の地域研究」プロジェクト
- ②「難民支援に関する法曹界・地域研究者・市民社会の連携」プロジェクト
- ③「アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」プロジェクト
- ④「地域研究が創る次世代型環境教育」プロジェクト
- ⑤「女性研究者のライフ・キャリアネットワーク」プロジェクト
- ⑥「地域研究者のキャリアデザイン」プロジェクト

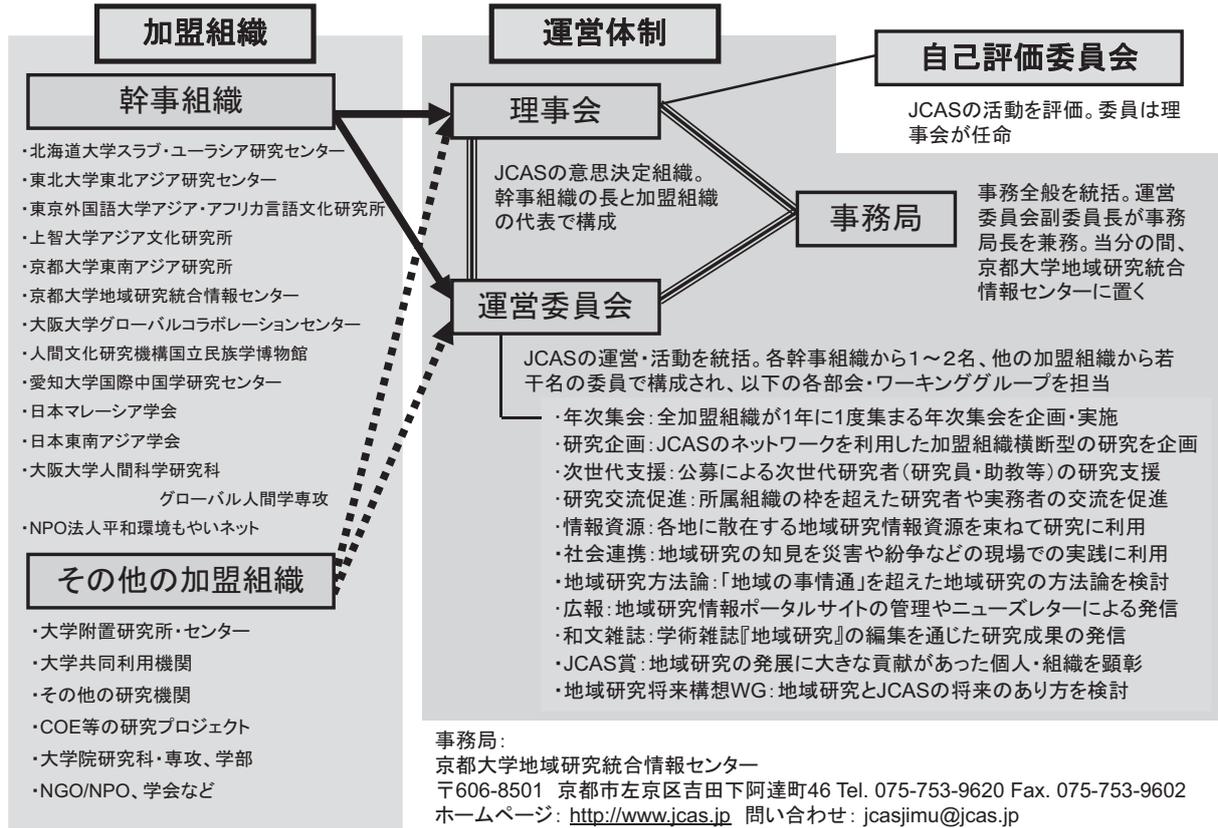
- (2) 共同研究プロジェクト公募：地域研との共催により地域研究の社会連携に関する共同プロジェクトを募集し、採択されたプロジェクトをJCAS社会連携プロジェクトとしても登録するもの。2015年度は「災害対応の地域研究」プロジェクト(テーマ1：災害・紛争と復興)を実施課題として募集を行い、1件が採択された。

5. 地域研究方法論

現実世界の課題を意識し、必要な方法を柔軟に組み合わせることで研究を行い、学界・対象社会・地元社会・世界に対して成果を共有・還元することを目指す地域研究では、個別研究を深めるだけでなく、課題設定、調査と分析、成果発表の各段階でさまざまな連携を意識して研究が進められる。地域研究方法論部会では地域研究に関わるさまざまな「連携」のあり方を検討している。

「地域研究の方法がわからない」という悩みは、多くの場合、自分が所属する既存の学問分野別のコミュニティでは自分の研究内容が十分に評価されないという「評価」の問題と関わっている。2015年度は、既存の学問分野別の研究者コミュニティに加えて地域研究者が誰でも入れる地域研究コミュニティとしてJCASの設計を検討するとともに、日々変化している社会の関心の動向やそれに関連する研究情報・研究者の所在をマッピングして示すことで、個別の地域研究の位

運営体制：地域研究コンソーシアム(JCAS)の組織



図Ⅱ-5 地域研究コンソーシアムの運営体制（2016年3月現在）

表Ⅱ-1 2015年度地域研究コンソーシアム公募プロジェクト（地域研の共催分）

次世代ワークショップ	学際的コミュニケーションツールとしてのフィールドノート
	災害をいかに地域に伝えるか：南アジアにおける気象学と地域研究との協働
	東南アジア地域研究情報資源の共有をめざして：いま、ライブラリアンから伝えたいこと
	公的統計のマイクロデータを活用したインドネシア村落の社会変容に関する広域把握・分析手法の検討
	領土の再編と地域研究：南スーダン独立後「スーダン地域」再考の試み
オンデマンド・セミナー	北野高校SGH関連講演「災害・防災から見た東南アジアと日本」
	東南アジア研究とその手法について学ぶ
社会連携	「災害対応の地域研究」プロジェクト
	「難民支援に関する法曹界・地域研究者・市民社会の連携」プロジェクト
	「アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」プロジェクト
	「地域研究が創る次世代型環境教育」プロジェクト
	「女性研究者のライフ・キャリアネットワーク」プロジェクト
	「地域研究者のキャリアデザイン」プロジェクト

*上記赤字部分、西先生の修正待ち（上記は2014年度のもの）。

置づけがわかりやすく示される仕組みづくりを検討した。

6. 出版物

(1) 和文雑誌『地域研究』：地域研究から社会への発信を目標に編集・刊行されているJCAS学術誌『地域研究』の15巻1号および16巻1号・2号が発行された（2015年4月、11月、2016年3月）。

(2) ワーキング・ペーパー(JCAS Collaboration Series)：以下の2点が刊行された。

- ①JCAS Collaboration Series No. 12：西芳実・篠崎香織編『緊急研究集会報告書 東南アジアの移民・難民問題を考える：地域研究の視点から』
- ②JCAS Collaboration Series No. 13：黒木英充・塩谷昌史・柳澤雅之編『JCAS公開シンポジウム報告書 境界・境域への挑戦と「地域」』

(3) ニュースレター：No. 19およびNo. 20を発行した。

地域研究コンソーシアム・ホームページ

<http://www.jcas.jp/>

3 英国議会資料 (BPP)

英国議会資料 (British Parliamentary Papers, BPP) として知られている資料集成は、英国議会下院・上院に提出された文書を会期ごとにまとめた資料集成であり、19世紀初頭から本格的に編纂され今日にいたっている。法案、省庁報告書、各種の委員会等報告書、領事報告や関連資料、通商統計、人口センサスなど内容は多岐にわたり、この時代のイギリスの位置を反映して、連合王国内のみならず、アジア、アフリカ等の世界各地についての記述が多数含まれている。19世紀以来、英国議会資料は多くの研究において基本資料の一つとして利用されてきたが、関連する多様な資料が発掘され利用可能になるにしたがって、議会提出を前提として集積され編纂された近代イギリスの「情報群」のあり様を問う資料としても、近年あらためてその資料的価値が見直されてきた。また、通商統計やセンサスなど長い期間にわたって時系列分析が可能な統計などが多く含まれているのも特色である。

現在、地域研究統合情報センター (地域研) が所蔵している英国議会資料約12,000冊は、英国商務省が保存していた下院文書1801年～1986年、上院文書1801年～1922年のほぼ完全な集成である。1998年に京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター (当時) に寄贈され、同センターにおいて公開に必要な修復・保全措置を施したのち、2000年度から「京セラ文庫『英国議会資料』」として公開されてきた。2006年4月、地域研の設置とともに同資料は京都大学に移管され、地域研が所蔵・管理運営を担当する体制のもとに京都大学附属図書館に恒温恒湿設備をもつ文庫室を設置し、引き続き「京セラ文庫『英

国議会資料』」として公開している。地域研は、その設置直後から、全国共同利用施設として、資料原本の保安全管理と一般公開とともに、近年開発されたウェブ版の導入やデータベース化を通じたあらたな利用方法の提供、共同研究やワークショップを通じた研究活動の推進に重点をおいた活動を行っている。

1. 資料の公開: 「京セラ文庫『英国議会資料』」開設とウェブ版の導入

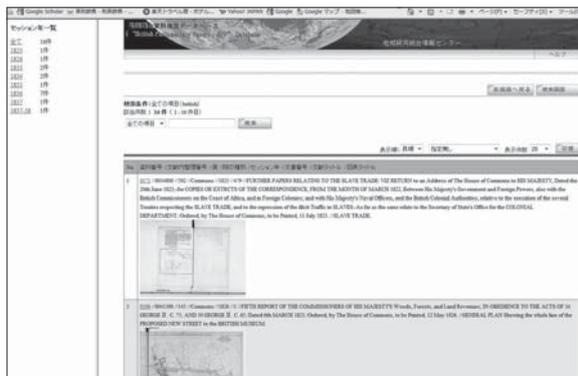
膨大な資料の活用にはウェブ版House of Commons Parliamentary Papers (HCPP) が威力を発揮する。地域研では、19世紀から現在にいたるウェブ版を導入し、ウェブ版と原本閲覧を同時に可能とする体制を整えている。ウェブ版は、学内LANで公開しているほか、地域研図書室および附属図書館に設置されているコンピュータを通じて学外にも公開している。

2. 地図・図版のデータベース化とウェブ上での公開

英国議会資料には、多数の貴重な地図や図版が含まれている。地域研では地図データベース (第一期) を作成し公開している。今後、これを継続するかは検討中。

3. 共同研究による研究利用の促進

内外の研究者に地域研所蔵の原本集成の利用を促進することを目的として、共同利用・共同研究拠点の公募型共同研究の一環として「CIAS所蔵資料の活用」枠を設置し、本資料を活用した研究の促進を図っている。



英国議会資料検索ページ



所蔵されている英国議会資料

2 情報資源共有化に向けた活動

1 地域情報学の構築に向けた活動

世界の諸地域の様子や動向をどのようにすれば捉えることができるのか。これは、人類が自分たちと異なる人々への関心に向けたときから取り組んできた課題であり、グローバル化が進む現代世界でますます重要性を増している課題である。この課題に対して、学術研究の分野では、統計資料や公文書・手記などの文献資料を使ったり、重要人物から聞き取り調査したりする方法を工夫し、各国の公文書や統計資料・主要新聞、そして研究書や研究論文を収集してきた。これらの資料や分析方法の重要性は今後もなくなることはないが、今日では、世界の新しい状況に対応して、従来の資料収集や分析方法・公開方法に加えて次の四つの工夫が必要になると考えられる。

第一は、国境を越えた動きを捉えて提示する工夫である。今日では、国境を越えた人や物や情報の動きが容易になり、大量の動きが見られる。従来の国別の情報も依然として重要だが、国別とは別の枠組みで情報を収集・整理して提示する仕組みも必要である。

公文書や統計資料は国別に様式や詳しさが異なっており、そのまま繋げることができないこともあるため、様式や詳しさが互いに異なる情報をどのように繋げるかという工夫も必要となる。また、国境を越えて移動し、繋がる人や物や情報をどのように捉え、どのように提示するかという工夫も必要である。

第二は、図画・映像・建築物・音楽などの情報を利用する工夫である。統計資料や文献資料は依然として基本的な情報だが、社会が多様化し、情報技術の発達により様々なメディアが登場したこともあり、図画・映像・建築物・音楽のように従来は各専門分野でのみ使われてきた情報も取り入れて人々の暮らしや考え方を捉える必要がある。これらの資料をどのように処理すれば機械的に検索できるようになるのか、そしてそのような検索により人々の動きや考え方がどのように明らかになるのかは、現代世界を捉える上で重要な課題である。

第三は、多種多様かつ大量の情報の中から人々の暮らしや考え方を浮かび上がらせる工夫である。情報通信とりわけインターネットの発達に伴い、大量のデータが容易に利用可能となった。ただし、その多くは構

造化されていないため、情報量が増えることが対象への理解の促進とは直接結びつかない。また、一時的な情報が多いため、長い時間をかけて解析しても状況が変化してしまって解析結果が意味を持たなくなることもある。このような構造化されていない巨大なデータ（ビッグデータ）を短時間に処理し、対象の傾向を大掴みで読み解くことも、今日の社会では多くの分野で必要とされている。

第四は、研究対象である現地社会の人々が利用できる形でデータベースを作成し、公開するという点である。研究（観察）する側とされる側が明確に区別される時代は幕を閉じ、今日では研究する側とされる側が「地続き」になっている。外部の観察者から向けられた関心や視線がその社会の自画像に影響を及ぼすこともあり、どのようなデータベースを構築するかは、純粋に学術的な関心の問題では済まず、自分と相手を含む社会的な関心とも密接に関わる問題である。データベースの使用言語を英語や現地語にするだけでなく、データベースの設計段階から現地社会と共同で取り組むことも必要となるだろう。

これらの四つの課題に対して必ずしも十分に納得のいく答えが得られているわけではないが、地域研究統合情報センターは、地域情報学プロジェクトのもと、各スタッフがそれぞれの研究関心に即して具体的な資料をもとにデータベースを作成しながらこれらの課題に取り組んでいる。地域研究者が試行錯誤を重ねながらデータベースを構築しているために手間はかかるが、上記の四つの課題を技術的に解決することだけを目指してはならず、現地社会や研究者を含む利用者にとって意味がある形で利用されるデータベースを目指して模索を続けている。

実験的なものを含め、地域研究統合情報センターで作成・公開しているデータベースには以下のものが挙げられる。

- ・研究上の利用とともに、現実社会で専門家や一般利用者にも使えるものとして設計されているもの。スマトラの災害 (①~⑩)、旧社会主義諸国の選挙・政党 (⑪)、パルーの反政府武装闘争 (⑫)、

- 大陸部東南アジアの寺院・出家行動 (14~15)、斑鳩の地域資料 (16) に関するデータベースやシステムがあり、災害に関するデータベースやシステムの一部はすでにインドネシアの防災教育や災害ツーリズムの分野で実際に活用されている。また、寺院・出家行動のデータベースはタイの研究者や仏教団体と共同で研究が進められている。
- ・世界的に貴重な資料をデジタル化により共有化するもの。「トルキスタン集成」(17)、マレー・イスラム雑誌『ワクトゥ』(18)、『カラム』雑誌記事データベース (19)、タイ映画データベース (20)、タイ語三印法典 (21~22)、貝葉文書 (23~24) など、当時の時代と社会を知る貴重な現地語資料でありながら、体系的に収集・整理されていなかった資料を収集・デジタル化したデータベースや、地域研究統合情報センターが原本を所蔵している英国議会資料の利用を助けるデータベース (25) がある。『カラム』雑誌記事データベース (19) は、マレーシアの国立図書館や言語出版局との共同によりマレーシアの教育で活用されている。
 - ・個人研究者が収集・蓄積した研究資料を整理し、個人研究者の経験や思索の体系化と可視化を試みるとともに、個人研究者の研究情報を共有可能にするもの。故高谷好一京都大学名誉教授が収集されたフィールドノートや山田勇京都大学名誉教授が撮影された世界の森の景観に関する写真コレクション等を可視化したフィールド・データベース (26) や、故石井米雄京都大学名誉教授の蔵書を中心とする研究資料を整理した石井米雄コレクション (27) がある。布野修司氏の世界建築データベース (28) は、書籍とデータベースを統合した先駆的なフィールド・データベースである。
 - ・映画、ポスター、建築、音楽など、人々が日常生活の中で見聞きしたり利用したりすることで人々の行動や考え方に影響を与えているものの、従来の研究では十分に利用されてこなかった形態の情報のデータベース。インド、タイ、マレーシアの映画 (29~31)、満洲国ポスター (32)、戦前期東アジア絵はがき (33)、アジア建築(都市環境文化資源) (34) がある。画像を視覚的に検索したり分析したりする方法や、映画を「物語」として提示したり検索したりする方法が模索されている。
 - ・中国をはじめとする東アジアの現代史に関する

データベース。柏原英一写真帳 (35)、『亜東印画輯』(36)、『北支』(37)、『亜細亜大観』(38)、『北京特別市公署市政公報』(39)、上海租界工部局文書 (40)、中国関係アーカイブ (41)、モンゴル人文社会系定期刊行物 (42) のデータベースがある。

また、地域情報学プロジェクトでは、データベース作成支援、データベースの統合検索、データの可視化・分析のため、以下のようなシステムやツールを作成・公開している。

- ・データベース構築支援：データベースに関する専門的な知識や技術を必要とせずに、データベースの構築と公開を実現できるMyデータベース (43)。
- ・データベース統合：インターネット上に分散しているデータベースの統合検索を目指した地域研究資源共有化データベース (44~45)。
- ・時空間情報処理ツール：時間処理も可能な地理情報の可視化・分析ツール用HuMap (46) および時間情報の可視化・分析用ツールHuTime (47)。
- ・地域情報学基礎データベース：地域情報学を支える歴史地名辞書データベース (48)、暦間の日付変換ツール (49)、および地図データベース (50)。
- ・オントロジーツール：語彙の意味・構造に注目してデータを関連付けることにより、資料群を可視化したり検索したりするツールであるトピックマップの研究。その具体例としての、日本図書館協会 (51) および国立国会図書館 (52) の件名標目表、農林水産関連分野の語彙集 (AGROVOC) (53)、世界各地の民族・社会・文化に関する文献語彙集 (HRAF) (54)、マンガ『花より男子』各言語版のトピックマップ (55)。

2 データベースや情報解析ツール等一覧



①アチェ津波モバイル博物館システム

2004年12月に発生したインド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）の被災と復興過程について、現地語メディアでの報道記事や写真を地図上で表現し、それらをスマートフォンなどの携帯端末で参照可能にすることで、バンダアチェの街並みに重ねて被災と復興過程を記録・参照することができるようにしたシステム。

http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/
 短縮URL：http://goo.gl/8NBhm



②アチェ津波モバイル博物館（スマホ版）

被災と復興の10年にわたる景観の経年変化を示す画像資料を収蔵したアプリ。AR（仮想現実）表示機能により、位置情報をもとに、現在地周辺の過去の景観を現在の街並みと重ねて見ることができる。モバイル端末を使って町全体をオープン博物館にする取り組み。

シアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）（インドネシア・アチェ州）との共同開発。
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_atmm.html



③アチェ津波被災地メモリーハンティング

アチェの津波被災地の変化を写真で探るプロジェクト。過去の写真を手掛かりに現在の景色を探しにでかける。津波直後の風景を半透明で浮かび上がらせ同じ構図で写真撮影。撮影画像を他のスマホと共有して、被災地の「いま」の記録づくりに参加。街の景観の変化を記録、景観の歴史を共有するコミュニティづくり。シアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）（インドネシア・アチェ州）および国立情報学研究所・北本朝展准教授との共同開発。
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_memohunt.html
http://dsr.nii.ac.jp/cgi-bin/memory-hunting/map_project.pl?projectID=9&lang=ja



④2004年スマトラ沖地震・津波関連記事データベース

2004年12月に発生したインド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）に関するインドネシアおよび近隣地域の現地語メディアでの報道記事を、記事の地名をもとに地図上に表現したデータベース。
<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/>
 短縮URL： <http://goo.gl/8NBhm>



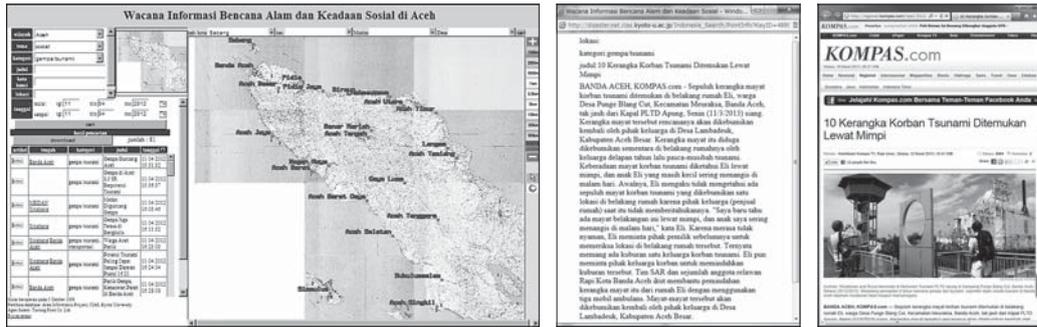
⑤2004年スマトラ沖地震・津波画像データベース

2004年12月に発生したインド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）の最大の被災地となったインドネシア共和国アチェ州の被災と復興の過程を撮影した写真を、地理情報により地図上で表現したデータベース。
<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/>
 短縮URL： <http://goo.gl/8NBhm>



⑥アチェ津波アーカイブ（可視化型データベース）

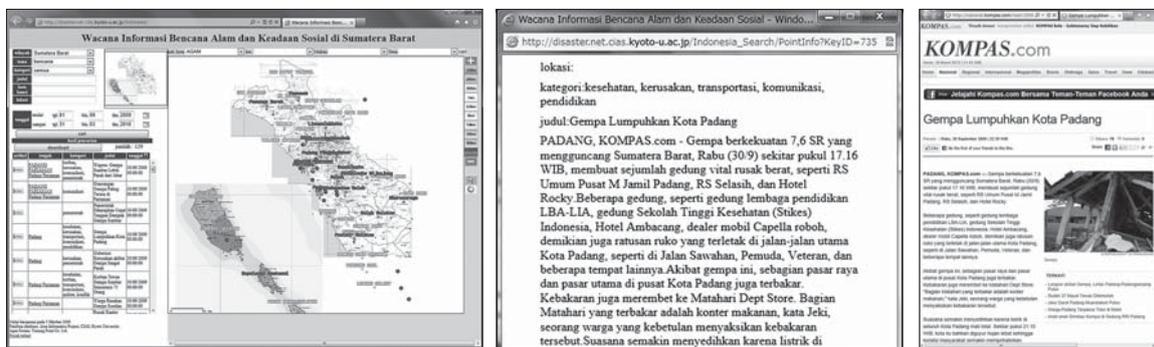
津波災害を生き延びた被災者の証言や被災直後から収集された写真をGoogle Earthの立体地形に重ねて閲覧することができる。画面左上のタイムスライダーを操作することによって、時系列に沿った絞り込み表示も可能。また、Google Earthにも過去の衛星画像が収録されているので、津波前後の変化、そして街が復興していくようすを、時空を越えて体感することができる。その他、津波遡上高、世界から現地に届いた支援の手をあらわす光の線などの多角的な資料が掲載されている。
 首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発。
<http://aceh.mapping.jp/>



⑦災害と社会 情報マッピング・システム

新聞社などによってオンライン上で発信される報道記事を自動で収集し、記事中の地名をもとにテーマ別に地図上で表現するシステム。災害発生直後に被害の広がりや救援活動の概要を把握することなどに役立つ。現在はインドネシアの全国紙の記事をもとに、アチェ州と西スマトラ州について、自然災害、紛争・事件、選挙などのテーマで記事を収集し、提示している。

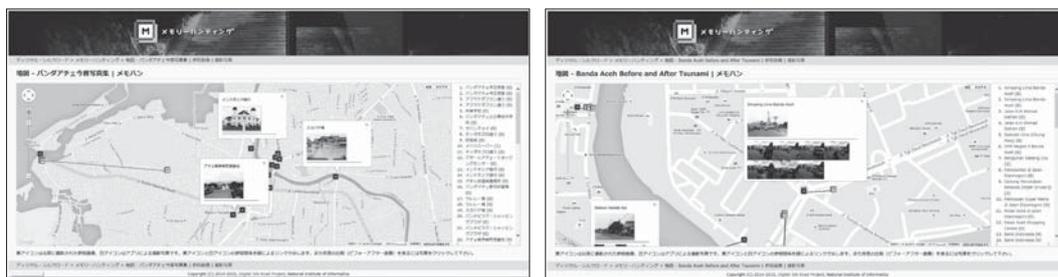
http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Indonesia/
 短縮URL : http://goo.gl/6MBYs



⑧2009年西スマトラ地震関連記事データベース

2009年9月に発生した西スマトラ地震（パダン地震）に関するインドネシアの現地語メディアでの報道記事を、記事中の地名をもとに地図上で表現したデータベース。

http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Indonesia/
 短縮URL : http://goo.gl/6MBYs



⑨バンダアチェ今昔写真集メモリーハンティング

1950年代から地元新聞社の写真記者が収集していたバンダアチェ市の風景写真コレクションから、バンダアチェ市の代表的建造物や街路の写真58点を参照画像として収めたメモハン。2004年スマトラ島沖地震・津波被災前のバンダアチェの姿と今のバンダアチェの景観を比較することができる。国立情報学研究所・北本朝展准教授との共同開発。

http://dsr.nii.ac.jp/cgi-bin/memory-hunting/map_project.pl?projectID=7&lang=ja



⑩アチエ津波アーカイブ (スマホ版)

津波災害を生き延びた被災者の証言をデジタル地球儀上で表現したアプリ。津波遡上高や被災直後の写真記録などとあわせて閲覧でき、空間的な広がりを感じながら被災の概況と被災体験を知ることができる。

シアクアラ大学津波防災研究センター (TDMRC) (インドネシア・アチェ州) および首都大学東京・渡邊英徳研究室との共同開発。

http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_archives.html



⑪神戸被災地メモリーハンティング

阪神・淡路大震災20年を機に、被災直後から現在までの変化を写真でたどる試みを開始。神戸市がオープンデータとして公開した阪神・淡路大震災「1.17の記録」を活用し、アプリ上で写真を重ね合わせることを可能とした。公開された写真の中から、空撮写真や集会の写真などを除き、さらに区ごとのプロジェクトを立ち上げた。なお位置情報については、esriジャパンオープンデータポータル「阪神・淡路大震災の記録」想定撮影位置データを一部利用している。また位置情報がわからない写真については、区役所の位置を初期値として設定。今後はこのアプリを使って現地を巡りつつ、写真と構図が一致する場所をみんなで探し、疑似的定点観測に基づく地域写真アーカイブを作っていきたいと考えている。

国立情報学研究所・北本朝展准教授 (研究室) との共同開発。

<http://dsr.nii.ac.jp/memory-hunting/>



⑫ポスト社会主義諸国選挙・政党データベース

ヨーロッパの旧社会主義国を対象に、選挙制度、主要政党の綱領と変遷、最近20年間の選挙結果を数値等で表現して比較可能にしたデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003Post

短縮URL : <http://goo.gl/yTeHT>

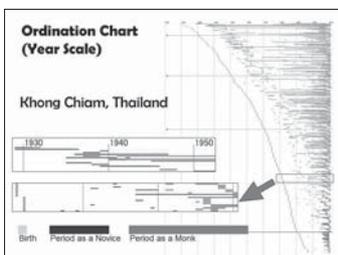


⑬ センデロ・ルミノソ・マッピング

ペルーで1980年に武装闘争を開始した反政府武装集団センデロ・ルミノソに関するデータベース。この可視化コンテンツでは、活動の Kategoriy 別に色分けしたアイコンをGoogle Earthに時空間マッピングし、ズームイン・アウトやタイムスライダー操作によって、センデロ・ルミノソの活動の推移を俯瞰できるようにしている。

首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発。

<http://peru.mapping.jp/>



⑭ 大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング・データベース

上座仏教徒が集住する西南中国を含む東南アジア大陸部の上座仏教寺院と出家者に関するデータを現地調査によって収集し、マッピング・データベースとして統合したもの。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000209SEthertemple

短縮URL : <http://goo.gl/8ZRZK>



⑮ 寺院マッピング

ミャンマーにおける寺院と僧侶の社会距離を視覚的に提示したデータベース。本コンテンツでは、寺院名、緯度、経度、写真のファイル名といった文字情報をGoogle Earth上にマッピングし、地理的關係や僧侶の移動軌跡等をインタラクティブに表示している。

首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発。

<http://temple.mapping.jp/>



⑩チエノワイカル

斑鳩町立図書館・聖徳太子歴史資料室と連携し、「『斑鳩の記憶』アーカイブ化事業」として、斑鳩町住民が所蔵する斑鳩に関する古い写真や映像、その他の地域資料を、郷土史家の方々や学術機関、アーティスト等と連携しながら、調査・収集・公開を行っている。本ウェブサイトをその成果公開の場として、アーカイブの一部を閲覧できるように整備を進めており、キーワードに応じた抽出、地図からの絞り込みが可能。
<http://archive-ikaruga.org/>



⑪「トルキスタン集成」データベース

「トルキスタン集成Туркестанский сборник」とは、ロシア帝国の中央アジア征服の後、トルキスタン総督府（1867年タシュケントに設置）初代総督に任ぜられたカウフマンK. П. фон Кауфман（1818-1882、総督在任期1867-1882）の命により編纂が開始された、全594巻に及ぶ中央アジア関連資料集成である。
「トルキスタン集成」は、編纂当時の単行本、新聞・雑誌記事、統計、地図、図版など、多様な形態と内容の刊行物を含む、中央アジア関連資料の一大コレクションである。そこに含まれる資料は、21世紀の今日においてもなお中央アジアに関する貴重な情報を私たちに与えてくれる。2014年度には「トルキスタン集成」データベースのリニューアル版の公開準備を整えた。これまで存在しなかった全594巻を通じた巻別インデクスを整備し、その他にも地域情報学の進展をふまえた試みとして、キーワードの連鎖による検索、時空間情報を活用した検索、ユーザー参加の試みなど、順次機能を追加していく予定である。
<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/turkestan/index.html>

項目	内容
bilangan (number)	01
tahun (year)	1947
month (month)	12
page	23
File Name	1947_v01_No 01_24
PDF Link	http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/www/data/Waktu/pdf/1947_v01_No 01_24.pdf
ruangan (column)	Tjerita Pendek
penulis/editor (author)	R.D. Muswi
judul (article)	Aroes Mengalir



⑫『ワクトゥ』雑誌記事データベース

『ワクトゥ』雑誌記事データベースは、写真を多く使ってインドネシア国内外の時事を紹介した写真週刊誌『ワクトゥ』（1947～1958年、メダン発行、インドネシア語、ローマ字使用）の創刊号から1958年2月分までの全記事をPDF化し、ローマ字による記事索引システムを備えたデータベースである。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003Waktu



⑱『カラム』雑誌記事データベース

『カラム』は、1950年代～60年代のマレー世界（現在のインドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、タイ南部を含む地域）におけるムスリム社会の動向を理解するうえで重要な史料だが、ジャウィ（マレー語のアラビア文字表記）で表記されているためもあり、利用が限られていた。複数の機関に所蔵されている『カラム』をもとに欠号率が極めて低いコレクションを作り、デジタル化してマレー語雑誌記事データベースとして全誌面を公開している。

地域研のMyデータベース（④③）を基盤として活用し、「ジャウィ文献と社会」研究会がローマ字版とジャウィ版の比較閲覧やワードクラウドによる検索など、工夫したインタフェースを提供している。

<http://majalahqalam.kyoto.jp/>



⑳タイ映画データベース

京都大学東南アジア研究所がタイ国で収集した映像コレクション（ラーマ7世博物館所蔵の王室記録映画をふくむVCD、DVD化された劇場用公開映画、民俗芸能、ドキュメント、仏教僧による説法など約800タイトルおよび映画ポスターと関連書籍）、さらに地域研究統合情報センターの同コレクション（342タイトル、合計1,100点余りのタイトルについてのタイ語（一部は英語）データベース。時代は1925年から現代までをカバーする。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003THAI



㉑タイ語三印法典（王立研究所版）

1805年に現ラタナコーシン（バンコク）王朝ラーマI世（1782-1809）の勅命によってアユタヤ滅亡時に残された諸法典の写本に基づいて編纂された14世紀中葉から19世紀初頭までの法令・布告集成の全文データベース。本データベースは、2007年タイ国王立研究所刊行の写本から作成した用例索引*The Computer Concordance of the Law of the Three Seals: Revised Version* (Amarin Printing and Publishing, 2008) にもとづくもので、36,242用例、見出し語19,579語が含まれる。

<http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/ktsd/>

短縮URL：<http://goo.gl/H62JQ>



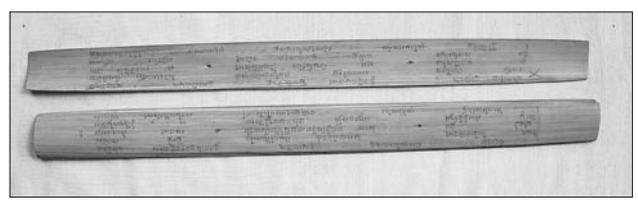
㉒タイ語三印法典 (タマサート大学版)

1805年に現ラタナコーシン (バンコク) 王朝ラーマ I 世 (1782-1809) の勅命によってアユタヤ滅亡時に残された諸法典の写本に基づいて編纂された14世紀中葉から19世紀初頭までの法令・布告集成の全文データベース。本データベースは、タマサート大学写本廉価版から作成されたThe Computer Concordance of the Law of the Three Seals, 5 vols. (Amarin Publications, 1990) にもとづくもので、239,576用例を含む。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003gissv
 短縮URL : <http://goo.gl/WrvdH>



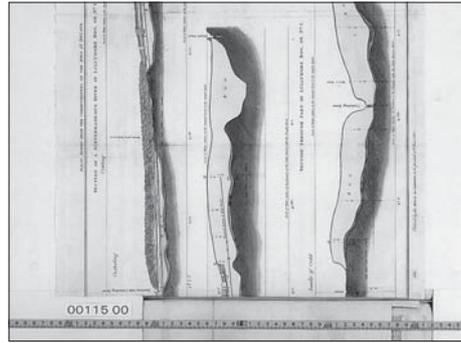
㉓貝葉文書

「タム文字写本文化圏」(タイ東北部、ラオス、ミャンマー、中国雲南省南部) に分布する地域史料である貝葉文書のデータベース (公開準備中)。



㉔東北タイ南部貝葉データベース

東北タイ南部の貝葉文書のデータベース。標準タイ語の浸透により急速に失われつつある地方の言語と文化の保護を目的として、地方言語により記された古文書・写本の画像形式での保存と公開を行っている。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe?DEF_XSL=default&GRP_ID=G0000208&DB_ID=G0000208bailanit&IS_TYPE=csv&IS_STYLE=default&EXTEND_DEFINE=&EXTEND_STYLE=default
 短縮URL : <http://goo.gl/Rc0S>

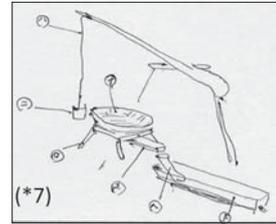
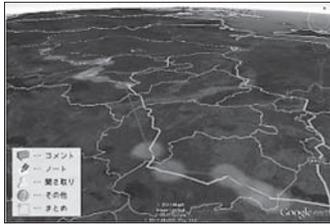


㊸「英国議会資料」図版データベース

地域研究統合情報センター所蔵の英国議会資料のうち地図・図版をデータベース化したもの。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003BPP

短縮URL: <http://goo.gl/6fgTp>

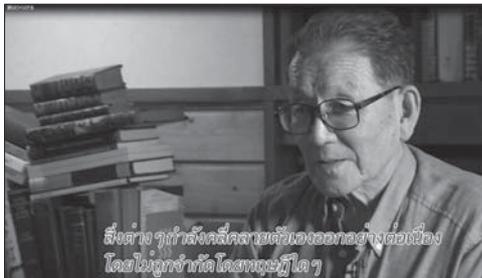


㊹フィールドノート・データベース

東南アジアを中心に、主に自然科学系の研究者の現地調査によって得られたフィールドノートの記録をデータベース化し、さまざまな他の情報と組み合わせることで新たな地域研究資料として利用することを目的としたもの。

首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発。

<http://fieldnote.mapping.jp/>



㊺道は、ひらける：石井米雄と東南アジア研究（石井米雄コレクション）

故石井米雄・京都大学名誉教授（1929-2010）により、1957～2010年までに収集された図書・研究資料や調査地で撮影された写真などの集成である石井米雄コレクション、映像「道は、ひらける：石井米雄と東南アジア研究」、「石井米雄の歩んだ道」、「石井米雄がうみだした著作」から構成されるデータベースである。図書・冊子体では約10,000点のうち、2,567点、抜刷・研究資料等6,906点、写真資料約5,000点が検索でき、東南アジア地域研究やタイ史・法制度研究、言語研究に重要な資料群を含む。また本データベースは、仮想書架やPC上で動作する書誌情報から抽出されたキーワードにもとづくオンロジー向き検索が可能である。

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/collection/>

本データベースは、2014年度日本学術振興会科学研究費・研究成果公開促進費（データベース）の助成を得て構築した「東南アジア地域研究史資料集成データベース」の一環である。「東南アジア地域研究史資料集成データベース」では、下記のURLから今後以下のデータベースを公開予定である。

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/database/category/seas-db.html>

・19世紀バンコク水路・灌漑・家屋配置資料（約8,000点）

19世紀末ラタナコーシン（バンコク）朝中心部の地籍・郵便台帳の資料で、特に運河水路の当時の状況や各家屋の管理状況が把握できる。

・ハノイ遺蹟拓本資料（約2,500点）

ベトナムの首都ハノイの中心部におけるDen, Dinhなどに設置されている遺蹟拓本の資料集成である。



②⑧布野修司 世界建築データベース

滋賀県立大学の布野修司教授による世界の建築に関するデータベース。現在、『グリッド都市』（布野修司、ヒメネス・ベルデホ著、京都大学学術出版会、2013年）に掲載された図版のみ閲覧可能となっている。これは、京都大学が所蔵するフィールドでの調査記録を広く社会に還元するために京都大学学術出版会と共同して進めているプロジェクトの一環である。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003gridcity

短縮URL : <http://goo.gl/x6Nkn>



②⑨インド（タミル）映画データベース

地域研究統合情報センターが所蔵するタミル語映画コレクション（1960年代～1990年代）の目録およびジャケット写真のデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003TAMIL

短縮URL : <http://goo.gl/nZplm>

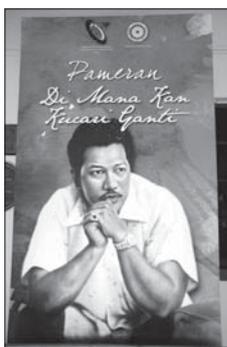


③⑩タイ映画データベース

地域研究統合情報センターが所蔵するタイで作成された劇場映画コレクションの目録およびジャケット写真のデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003THAI

短縮URL : <http://goo.gl/8mgfB>

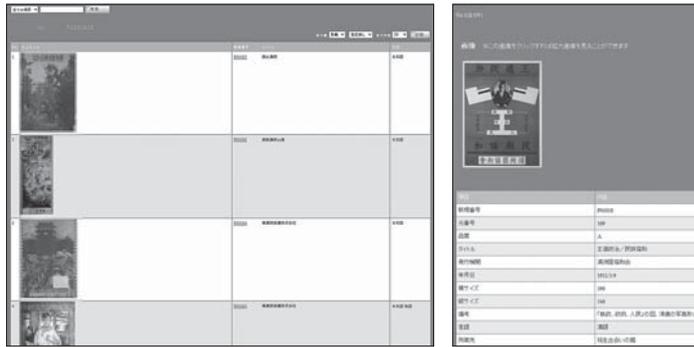


③⑪マレーシア映画データベース

地域研究統合情報センターが所蔵するマレーシアで作成された劇場映画およびテレムービー（CDで販売される劇場映画）のコレクションの目録およびジャケット写真のデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003Malaysia

短縮URL : <http://goo.gl/SLWuB>



③② 満洲国ポスターデータベース

1925年9月26日から1941年12月8日までの満洲に関するポスターおよび宣伝ビラの画像データベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000021MAN

短縮URL : <http://goo.gl/EzIVB>

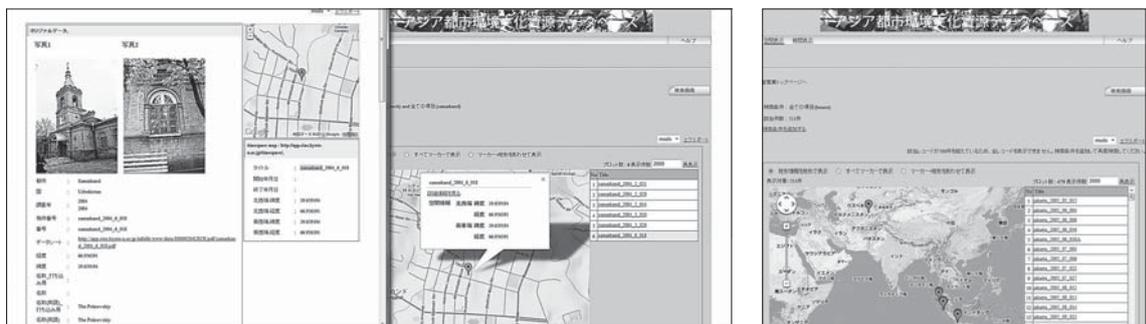


③③ 戦前期東アジア絵はがきデータベース

第二次世界大戦終了以前に発行された日本内地、朝鮮半島、台湾、満洲、樺太、南洋等における絵葉書の画像データベース。継続更新中。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000022PPC

短縮URL : <http://goo.gl/snc73>



③④ アジア都市環境文化資源データベース

アジア近代建築研究者のネットワークであるmAN、東京大学生産技術研究所・村松伸研究室、京都大学地域研究統合情報センターが共同、アジアの都市部に存在する近代建築を中心に、都市環境文化資源を登録したデータベースである。データ登録・管理は、地域研のMyデータベースシステムを通じて行っている。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000204UECR



㊸ 柏原英一 (1914~2009) 写真帳

本写真帳は、漢口に駐留していた部隊の報道部員であった柏原英一氏 (1914年生~2009年没) が整理し保管していたものである。写真の大部分は昭和13 (1938) 年から昭和17 (1942) 年に華中地域で撮影され戦後しばらく経ってから写真帳に整理されたものと思われる。

財団法人東洋文庫現代中国研究資料室との共同設計。

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib2/>



㊹ 『亜東印画輯』 データベース

大連に拠点を置いた亜東印画協会が1924年から1944年頃まで月刊で発行していた、『亜東印画輯』写真帳データベース。

財団法人東洋文庫現代中国研究資料室との共同設計。

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib3/>



㊺ 『北支』 データベース

戦中の国策会社華北交通株式会社が発行したPR用のグラフ誌『北支』 (1939年6月1日~1943年8月1日) の雑誌データベース。

<http://124.33.215.236/research/hokushi/hokushi.php>



③⑧ 『亜細亜大観』 データベース

亜細亜写真大観社の編纂・刊行による市販の写真帳『亜細亜大観』（1935-1942）の写真帳データベース『亜細亜大観』は、大連に拠点を置いた亜細亜写真大観社が1926年から1940年頃まで発行した月刊の写真帳である。写真帳の台紙にはモノクロプリントが貼り付けられており、写真1枚ごとに短い解説文がつけられている。10枚を1セットとして、1ヶ月に1回、会員向けに配布されたようである。

日本人カメラマンが、中国・朝鮮半島・モンゴル・チベットなどの風俗や民情、自然風景、歴史的建造物などを撮影したものであり、当時の様子を伝える貴重な資料である。

財団法人東洋文庫現代中国研究資料室との共同設計。

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib4/>



③⑨ 『北京特別市公署市政公報』 目次検索データベース（1938-1944）

戦時における北京特別市公署（のち市政府）が発行した『市政公報』（1938年1月～1944年9月）の記事件名データベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020BJG

短縮URL：<http://goo.gl/7TQH0>



④⑩ 上海租界工部局警務処文書件名索引データベース（1894-1949）

上海共同租界でイギリスが中心となって運営した「租界工部局」に関する文書を中心とした書誌データベース。

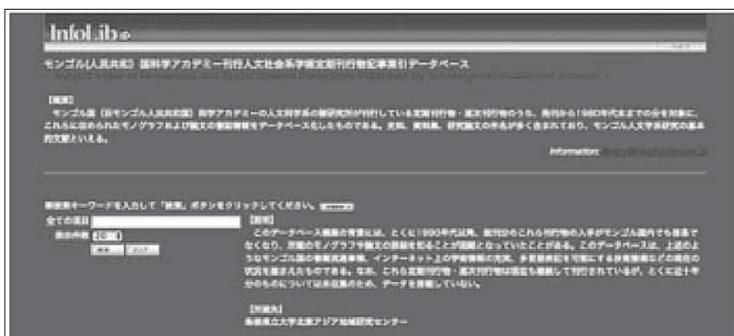
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020SGH

短縮URL：<http://goo.gl/hYnYG>



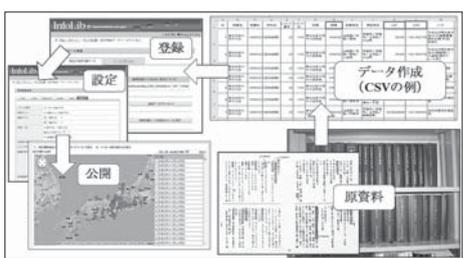
④スタンフォード大学フーヴァー研究所中国関係アーカイブ件名索引データベース

スタンフォード大学フーヴァー研究所が所蔵する約4,500点の中国関係のアーカイブの件名データベース。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020HOV
 短縮URL : <http://goo.gl/Hqo4j>



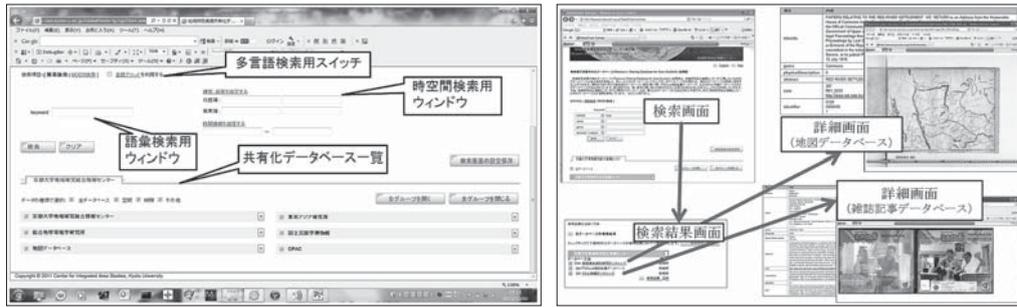
④モンゴル（人民共和）国科学アカデミー刊行人文社会科学系学術定期刊行物記事索引データベース

モンゴル国科学アカデミーの人文社会科学系の諸研究所が刊行している定期刊行物・逐次刊行物のうち1980年代末までの書誌データベース。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020MGL
 短縮URL : <http://goo.gl/n0rAD>



④MyデータベースサービスおよびREST型API (MyDatabase Service and REST like API)

データベースを公開するためには、データベースシステム・サーバ装置・ネットワーク機器などに関する専門技術や知識が必要であり、研究者個人がデータベースを公開することは容易ではない。「Myデータベース」は、データベースシステムの管理・運用法を見直して、研究者個人によるメタデータの定義・修正、検索機能の設定、検索画面の作成などを簡単に行えるようにしたサービスである。幾つかの条件を満たしたCSVファイルあるいはXMLファイルと画像等のデータさえ用意できれば、あとは「Myデータベース」の指示に従って操作するだけで、自分用のデータベースを作成し公開することができる。このサービスは、2013年度に提供を開始した。「Myデータベース」は個人によるデータベース構築を容易としている反面、画面構成や検索機能は制限されている。この短所を補うためにREST型のAPIを公開している。JavaScript等からAPIを利用することで、研究目的に適した検索や画面を構築することが容易となる。



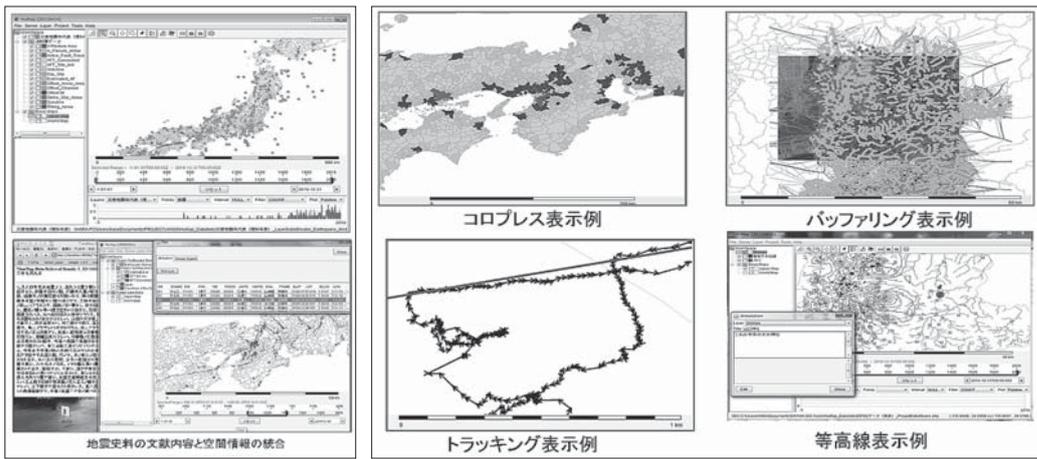
④地域研究資源共有化データベース (Resource Sharing Database for Area Studies)

地域研究資源共有化データベースは、インターネット上に分散している地域研究関連データベースの統合検索を目的とした情報システムである。通常の語彙検索に加えて、地図を利用した空間検索とタイムラインを利用した時間検索も可能である。本システムでは、地域研究統合情報センターの17データベース（地図データベースを含む）、京都大学東南アジア研究所の5データベース（地図データベースを含む）、総合地球環境学研究所の5データベース、国立民族学博物館の19データベース、およびOPAC（地域研、東南アジア研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館）5データベースの合計51データベースの統合検索が可能となっている。
<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/GlobalFinder/cgi/Start.exe>



⑤地域研究資源共有化データベース：多言語対応試行版 (Resource Sharing Database for Area Studies: Multilingual Trial Version)

地域研究資源共有化データベースに共有化されているデータは、英語・タイ語・ロシア語などさまざまな言語で記述されているため、例えば、日本語で検索すると英語データベースではヒットしないという問題がある。「地域研究資源共有化データベース：多言語対応試行版」は、言語グリッド (<http://langrid.org/jp/>) のサービスを利用して地域研究資源共有化データベースに翻訳機能を加えた実験システムである。実験版のため動作が不安定になる場合がある。
<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/GlobalFinder-lg/cgi/Start.exe>

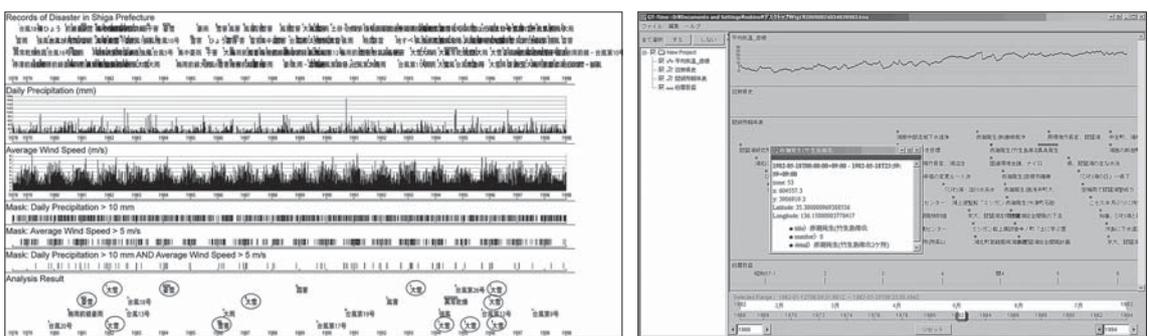


④GISシステムをベースとした多機能連携型データベース作成ツール：HuMap (Humanities Map)

HuMapは、H-GIS研究グループ (<http://www.h-gis.org/>) が中心となって開発を進めている空間情報処理ツール (GIS) である。最初のHuMapは、カリフォルニア大学パークレイ校を中心とした国際コラボレーションであるECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) とシドニー大学のTimeMap Projectが開発したTimeMapをベースとしていたが、TimeMapには時間情報を処理できるという優れた特徴があるものの、可視化ツールにすぎず、空間情報処理ツールとしての機能は限定されていた。そこでTimeMapの時間処理という特徴を生かしつつ、本格的な空間情報処理ツールの開発を目指した。最新版HuMapのソースコードは完全にオリジナルであり、ウェブサイトからダウンロードして自由に利用することができる (無料)。地域研究や看護学などの様々な学問分野で活用されるようになってきた。HuMapは以下のような機能を持っている。

- ①複数のレイヤを重ね合わせて空間情報を可視化する機能
- ②データビュー上における図形のズームイン・ズームアウト機能
- ③データビュー上の指定した時空間内にあるフィーチャを検索して表示する機能
- ④簡易検索およびSQL検索機能
- ⑤基本的なレイヤ間論理演算機能 (ユニオン、インターセクト、マージ、クリップ)
- ⑥複数の座標系への対応
- ⑦基本的な空間演算機能 (指定された点列間の距離・面積・重心の計算、ディゾルブ、バッファ)
- ⑧コロプレスマップ機能
- ⑨ヒストグラム表示機能
- ⑩フィーチャに関する外部情報へのURLを介したアクセス機能
- ⑪アニメーション機能
- ⑫アノテーション機能
- ⑬トラッキング機能
- ⑭ネットワーク表示機能
- ⑮データクリアリングハウス連携機能

<http://www.h-gis.org>



⑦年表重ね合わせ分析ツール：HuTime (Humanities Time)

年表を基本とした新しい時空間情報処理ツール。テキスト・数値・画像などの多様なデータを時間順序に配列した年表をレイヤとして重ね合わせ可視化・分析する。

<http://www.hutime.jp>

■検索キーワードを入力して「検索」ボタンをクリックしてください。 [詳細検索]

keyword

典拠 大日本地名辞書 式内社データ 寺院名鑑 旧5万分の1地形図

表示件数

検索条件: 全ての項目(和語寺) and 典拠 (大日本地名辞書 and 式内社データ and 寺院名鑑 and 旧5万分の1地形図)

表示件数: 3件 (1-3件表示)

全ての項目:

順位	和名	漢名	読み	読み方	属性	所在地	備考
1	和語寺	ソウゴジ	山崎	和語	和語寺	京都府上京区	
2	和語寺	ソウゴジ	山崎	和語	和語寺	京都府上京区	1899年(明治32年)に改称
3	和語寺	ソウゴジ	山崎	和語	和語寺	京都府上京区	1899年(明治32年)に改称

No.1000000 (詳細検索)

項目	内容
地名	和語寺
地名31	ソウゴジ
属性	山崎
郡名	山崎
町名	和語
町名31	和語
1点	和語
住所記述法	和語
緯度 1	35.2.0
緯度 2	33.45.46
地名属性	和語寺
現在地名	和語寺上京区
ローマ字(ヘボン式: 東洋館)	sojogoji
ローマ字(ヘボン式: 外務省)	sojogoji
ローマ字(ヘボン式: 通商手続)	sojogoji
ローマ字(ヘボン式: 郵便)	sojogoji
ローマ字(参考)/ヘボン式, ただし通商手続のために表記	sojogoji
ローマ字(参考)	sojogoji
ローマ字(参考)	sojogoji
典拠	大日本地名辞書
地図	Google マップ表示 国土地理院地図表示



④8 デジタル歴史地名辞書

日本国内の地名に関する新旧対応（歴史地名と現在地名）、包含関係（県・郡・町あるいは国・郡・郷など）、位置、属性（建物、河川など）のデータベース。主として地名を緯度・経度へ変換する際に利用する。大日本地名辞書、延喜式、寺院名鑑、仮製図、迅速図から地名を収集し、約30万件の見出し語を有している（アクセス制限）。

■各項目を設定して「検索」ボタンをクリックしてください。

天皇(Emperor)

元号(Japanese Era)

和暦年

和暦月 閏月

和暦日

元号・年を直接入力 年

表示件数

検索条件: 全ての項目(延暦) and 天皇 (The Name of Emperor) and 元号 (The Name of Japanese Era) and 和暦年 (Year) and 和暦月 (Month) and 和暦日 (Day)

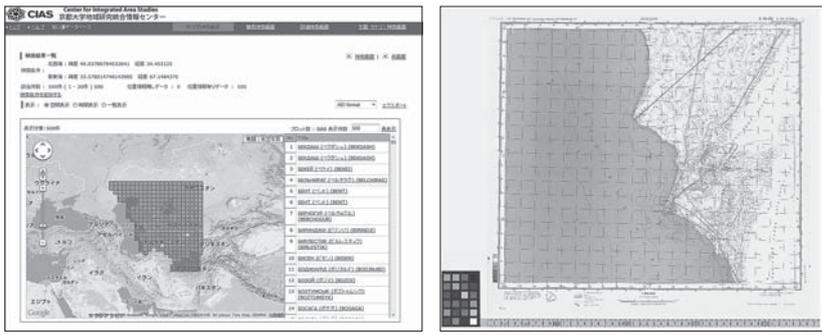
表示件数: 12件 (1-12件表示)

全ての項目:

順位	和名	漢名	読み	読み方	属性	所在地	備考
1	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
2	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
3	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
4	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
5	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
6	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
7	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
8	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
9	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
10	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
11	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦
12	延暦	エンリョ	延暦	延暦	延暦	延暦	延暦

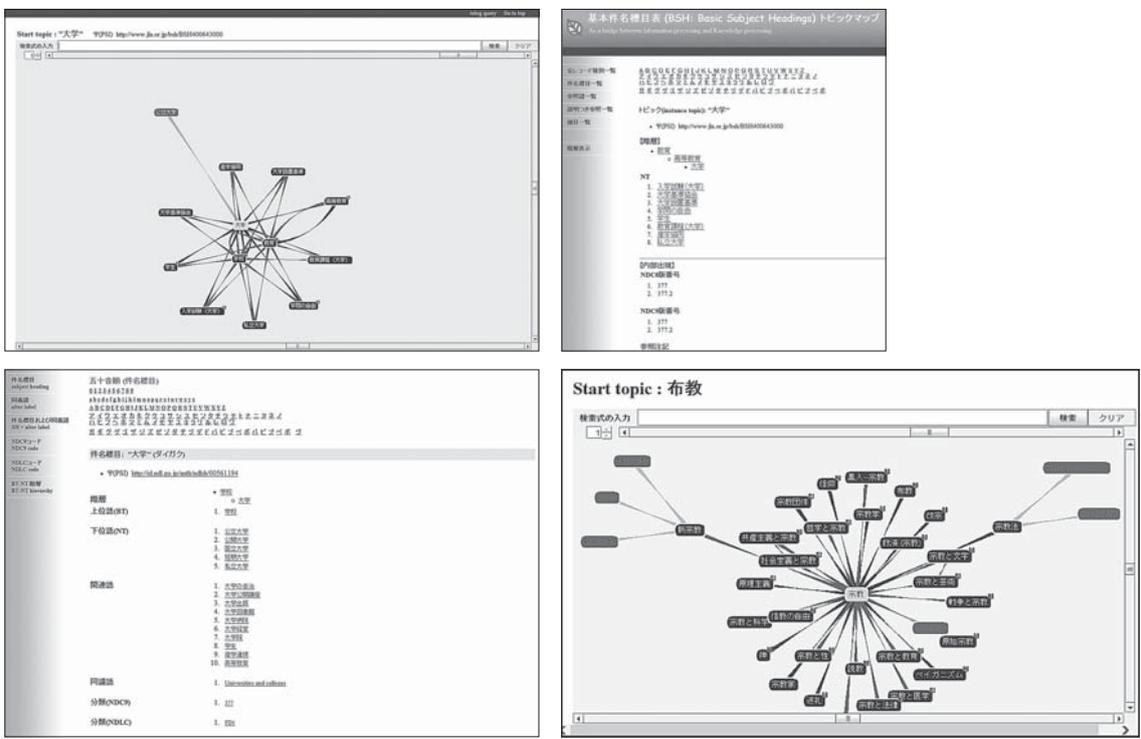
④9 暦日テーブル

多様な暦の参照表。現在は和暦、グレゴリオ暦、中国歴に対応しており、主として暦間の日付変換に利用する。
http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000017warekiconv



⑤⑥地図データベース（試行版）

地域研究統合情報センターが所蔵する旧ソ連邦作成地図を中心とする地図コレクションおよび京都大学東南アジア研究所が所蔵する外邦国を中心とした地図コレクションのデータベース（現時点では旧ソ連邦部分を公開）。共同研究の成果である汎用地図メタデータの利用、Google Mapを利用した視覚的な検索システム、他機関地図データベースシステムとの共有化機能などの特徴を持つ。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000004soviet

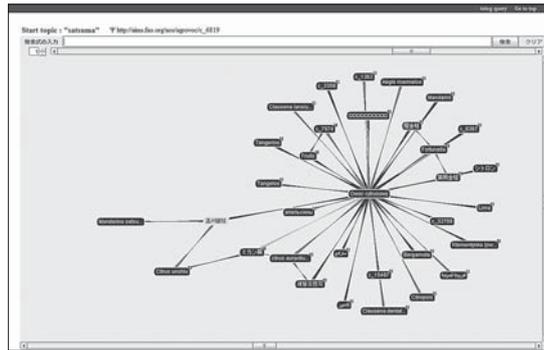


⑤①日本図書館協会基本件名標目表トピックマップ

⑤②国立国会図書館件名標目表トピックマップ：基本件名標目表トピックマップ（Basic Subject Headings Topic Maps）

件名とは資料の主題をあらわすキーワードである。しかし同一の主題を表現する言葉には、同義語や類義語が存在するため、適当なキーワードを決めようと検索が困難になる。そこで言葉を一定の典拠のもとに統制したものが件名標目である。基本件名標目表（Basic Subject Headings : BSH）は、図書館における情報検索で用いられる索引語彙を規定して表にまとめた件名標目表の1つであり、日本図書館協会（JLA）より刊行されている。「基本件名標目表トピックマップ」はオントロジーおよびセマンティックWeb研究の過程で構築されたデータベースであり、BSHのトピックマップ（Topic Maps）によるWebアプリケーションである。本トピックマップは、JLA頒布のコンピュータファイル（BSH4）から生成したもので、JLA 件名標目委員会に了解をいただいて公開している。

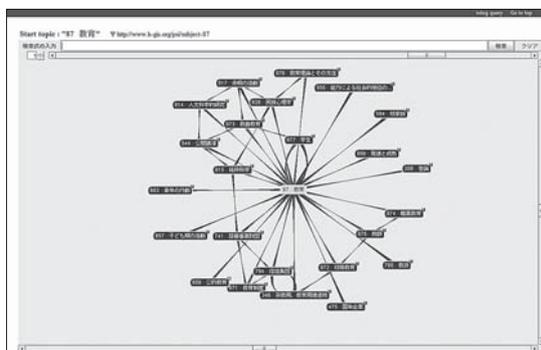
<http://topicmaps-space.jp/bsh1/>
<http://topicmaps-space.jp/ndlsh1/>



⑤③AGROVOCトピックマップ

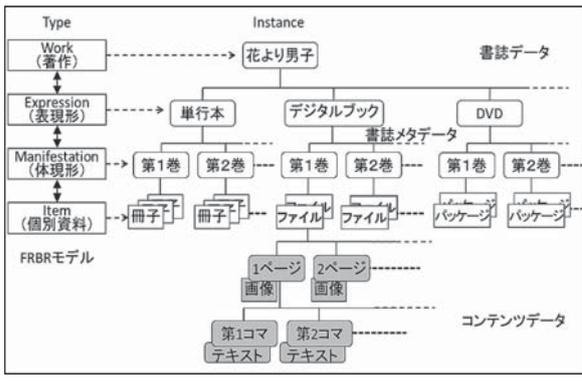
農林水産、食糧安全保障およびそれらの関連分野を網羅した多言語対応の構造的シソーラス（AGROVOC）に基づくトピックマップWebアプリケーション。

<http://topicmaps-space.jp/agrovoc-rdb/>



⑤④HRAFトピックマップ

世界中の民族の社会や文化について書かれた文献を地域・民族別に集めてページの内容を分析したファイル資料HRAF（Human Relations Area Files）のトピックマップWebアプリケーション（アクセス制限）。

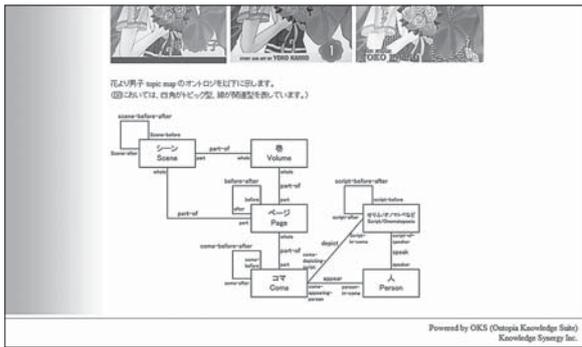


花より男子 topic map

Search word: "thank"

Results: Occurrence = 10

Topic Type	Search word: "thank"	Topic
Text	(Ea) Thank.	この言葉は
Text	(Ia) くろくさも!!	
Text	(Tb) むかし	
Text	(Ea) THANKS MANGO.	ありがとうの言葉は!!
Text	(Ia) わっ!ありがとう!花さん!!	
Text	(Ea) THANK YOU!!	---ありがとう!!
Text	(Tb) ...	
Text	(Ea) I WANTED TO THANK HIM AGAIN WHEN HE WAS ALONE...	またもや一人でいる時に花さんにも感謝したいのさ...
Text	(Ia) ...	
Text	(Tb) ...	
Text	(Ea) I WANTED TO THANK FOR YESTERDAY.	昨日のこと...昨日の花さんのおかげ...
Text	(Ia) ...	
Text	(Tb) ...	
Text	(Ea) REALLY THANK YOU!	ほんとにありがとう!!
Text	(Ia) ...	
Text	(Tb) ...	
Text	(Ea) THANK YOU!!	ありがとう!!
Text	(Ia) ...	
Text	(Tb) ...	
Text	(Ea) THANK YOU!!	---ありがとう!!
Text	(Ia) ...	
Text	(Tb) ...	



花より男子 topic map

トピック「ワザン」

URL: http://www.gp.miyagi.ac.jp/~manga/topic_0001_1000020

更新日時: 2010/05/20 10:00:00

更新者: 花より男子

更新理由: 花より男子のトピックマップ

更新内容:

- 1. 追加
- 2. 変更
- 3. 削除

文字列検索:

- 1. 検索
- 2. オフ
- 3. リセット

⑤ 「花より男子」トピックマップ (マンガTOPICMAPS) (Boys over Flowers MANGA Topic Maps)

日本のマンガは海外でも広く読まれ、週刊誌から単行本・ウェブ・携帯電話など多様なメディアへの展開が活発であり、既に一つの文化ジャンルを確立していると言える。そこで、マンガに関するメタデータの構築とウェブによる情報提供についての研究を開始した。マンガメタデータは、①多様な派生関連 (例えば週刊誌と単行本の関係あるいは翻訳版など) を記述できること、②容易かつ効率的に作成できること、③画像などのコンテンツデータへの関連付けができることが必要である。「『花より男子』トピックマップ」は、このようなマンガ用メタデータの研究過程で構築された試行データベースであり、トピックマップ (Topic Maps) によるウェブアプリケーションである。「『花より男子』トピックマップ」では、「花より男子」の日本語、英語、タイ語版の単行本 (第1巻) を対象として、①書誌情報、②セリフと画像位置対応 (ページとコマ)・発話者・発話属性、③それらのデータの各国版間の対応を構造化している。例えば、日本語セリフから英語やタイ語のセリフや画像への検索等が可能である。

下記のデータベースは非公開であるが、共同研究のために構築し共同研究者間で共有され研究が進められている。

⑥北タイ古文献（貝葉資料）にみる民族間関係

北タイ・西南中国境域で流通していた古文献を現代タイ語字に翻字化、民族、環境、生業、交易などに関わる項目と関連記載の統合型インデックスを作成した。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003baiyou

⑦ Mapping Practice of Theravadins

科研・基盤研究（A）「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング：寺院類型・社会移動・ネットワーク」（代表：林行夫、2008～2010年度）、
科研・基盤研究（A）「〈宗教=社会複合マッピング〉からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」（代表：林行夫、2014～2017年度）および地域情報学プロジェクト・寺院マッピング班の共同研究の成果。

⑧アチェ津波被災者証言データベース

インドネシア・アチェ州の津波被災者証言111件に証言者特性や位置情報をつけて収蔵し、バンダアチェ市内の54件について証言を日本語訳した。

3 スタッフの研究活動

1 個人研究

地域関連研究部門 教授

Wil de Jong (ウィル・デ・ヨン)

① 専門分野

Natural resource governance and policy, Community resource management, Forest transition

② 経歴

- 1984–1985 Research Associate, National Institute for Agricultural Research, Peru
- 1985–1995 International Fellow and Research Associate, Institute of Economic Botany, New York Botanical Garden, USA
- 1995–2004 Scientist and Senior Scientist, Center for International Forestry Research, Bogor Indonesia
- 2004–2006 Professor, Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, Japan
- 2006– Professor, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, Japan

③ 研究課題

(1) Area Environments and Global Sustainability Challenges

The world society faces dramatic natural resources and environmental global sustainability challenges that an area studies focus on environmental issues may help to overcome. An area environments studies approach can yield important knowledge that can contribute to the solution of global challenges.

(2) Community Resource Management

Communities are worldwide the de facto stewards of natural resources use and preservation. They are progressively engaged in wider sustainable resource use initiatives, but this engagement is often not well recognized because of inadequate understanding of local practices and economic, social and cultural realities.

④ 主要業績

- 2016 “Integrating Multiple Environmental Regimes: Land and Forestry Policies under Broader Democratic Reforms in the Bolivian Tropical Lowlands,” *Environment and Planning C: Government and Policy* 34, pp. 463–477 (DOI: 10.1177/0263774X15621758) (coauthor: Pablo Pacheco).
- 2016 “Comparative Study on Forest Transition Pathways of Nine Countries in the Asia-Pacific Region,” *Forest Policy and Economics* (DOI: 10.1016/j.forpol.2016.03.007) (coauthors: Jinlong Liu, Ming Liang, Linchao Li, Hexing Long).
- 2015 “Economic Globalization, Trade and Forest Transition: The Case of Nine Asian Countries,” *Forest Policy and Economics* 12 (DOI: 10.1016/j.forpol.2015.12.006) (coauthors: Lingchao Li, Jinlong Liu, Hexing Long, Yeo-Chang Youn).
- 2015 “Factors Influencing Farmers’ Decisions to Plant Trees on Their Farms in Uttar Pradesh, India,” *Small-scale Forestry* 14, pp.301–313 (DOI: 10.1007/s11842-015-9289) (coauthors: Jawaid Ashraf, Rajiv Pandey, Bhuvnesh Nagar).
- 2015 “Smallholders and Forest Landscape Transitions: Locally Devised Development Strategies of the Tropical Americas,” Special Issue, *International Forestry Review* 16 (7) (coeditor: Benno Pokorny).

⑤ 出版業績

[編書・共編書]

- 2015 *Actores, aprovechamiento de madera y mercados en la Amazonía peruana* (CIFOR Occasional Paper No. 145) (coeditors: E. Mejia, W. Cano, P. Pacheco, S. Tapia, J. Morocho).
- 2015 *Aprovechamiento y mercados de la madera en el norte amazónico de Bolivia* (CIFOR Working Paper No. 197) (coeditors: W. Cano-Cardona, A. Van de Right, P. Pacheco).
- 2016 *Can Legality Verification Enhance Local Rights*

to Forest Resources? Piloting the Policy Learning Protocol in the Peruvian Forest (CIFOR Working Paper No. 197), IUFRO (<http://www.iufro.org/science/divisions/division-9/90000/90500/90505/publications/>) (coeditors: B. Cashore, I. Visseren Hamakers, P. Caro Torres, A. Denvir, D. Humphreys, K. McGinley, G. Auld, S. Lupberger, C. McDermott, S. Sax, D. Yin).

[レフリー付雑誌論文]

- 2015 “Economic Globalization, Trade and Forest Transition: The Case of Nine Asian Countries,” *Forest Policy and Economics* (DOI: 10.1016/j.forpol.2015.12.006) (coauthors: Lingchao Li, Jinlong Liu, Hexing Long, Yeo-Chang Youn).
- 2015 “Indian Forest Transition and Socio-economic Development: Their Implications for Forest Transition Theory,” *Forest Policy and Economics* (DOI: 10.1016/j.forpol.2015.10.013) (coauthors: M.P. Singh, P.P. Bhojvaid, J. Ashraf, S.R. Reddy).
- 2015 “Integrating Multiple Environmental Regimes: Land and Forestry Policies under Broader Democratic Reforms in the Bolivian Tropical Lowlands,” *Environment and Planning C: Government and Policy* 34, pp. 463–477 (DOI: 10.1177/0263774X15621758) (coauthors: Pablo Pacheco).
- 2015 “Factors Influencing Farmers’ Decisions to Plant Trees on Their Farms in Uttar Pradesh, India,” *Small-scale Forestry* 14, pp.301–313 (DOI: 10.1007/s11842-015-9289-7) (coauthors: Jawaid Ashraf, Rajiv Pandey, Bhuvnesh Nagar).
- 2015 “A Review of: *Community, Commons and Natural Resource Management in Asia*,” *Forest Trees and Livelihoods* 52 (2), pp. 157–159 (DOI: 10.1080/14728028.2015.1131636).
- 2016 “Comparative Study on Forest Transition Pathways of Nine Countries in the Asia-Pacific Region,” *Forest Policy and Economics* (DOI: 10.1016/j.forpol.2016.03.007), (coauthors: Jinlong Liu, Ming Liang, Linchao Li, Hexing Long).

⑦研究集会

[招待講演]

- 2015.5.4 “The Way Forward in Smallholder and Community Forestry, 11 session of the United Nation Forum on Forests,” UNFF, New York.
- 2015.9.6–11 “Forest Change and Transition in the Asian

Pacific Region,” FAO World Forestry Congress, FAO, Durban.

- 2015.10.12–15 “Globalization of Forest Ecosystem Services and Local Livelihoods, Linking Ecosystem Services to Livelihood of Local Communities,” Seoul National University, Seoul.

⑩海外調査活動

- 2015.5.3–6 New York: Green Economy discourses and illegal logging: Travel and allowances.
- 2015.7.12–8.2 China: Forest transition and illegal logging: Travel and allowances.
- 2015.10.11–11.8 Seoul, Lima, Iquitos: Ecosystem services, illegal logging, forests and climate change: Travel and allowances.

⑪教育

- 2015.4–7. The global politics of forests. Undergraduate course Kyoto University International Exchange Programme.
- 2015.7. The impact of global forest entrepreneurship, governance and policies: Local level challenges and opportunities. M.Sc. Summer Course, Renmin University, China.

地域相関研究部門 准教授

帯谷 知可 (おびや ちか)

①専門分野

中央アジア地域研究、中央アジア近現代史

②経歴

- 1991年 東京大学教養学部助手
- 1994年 在ウズベキスタン共和国日本国大使館専門調査員
- 1996年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手
- 2002年 同助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
- 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) 中央アジア地域研究希少資料のデジタル化と有効利用の諸方策

- (2) 帝政ロシアの構築した中央アジアに関する植民地的知の諸相
- (3) ロシア革命期・ソ連期中央アジアの政治と社会
- (4) 現代中央アジア（特にウズベキスタン）のナショナリズム

④ 主要業績

- 2016 『融解と再創造の世界秩序』（関連地域研究2）青弓社（村上勇介と共編）。
- 2016 「社会主義的近代とイスラームの交わる場所：ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題からの眺め」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（関連地域研究2）青土社、pp.161-183。
- 2016 “The Politics of the Veil in the Context of Uzbekistan,” *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (Obiya, Chika, ed., CIAS Discussion Paper No. 63) CIAS, pp.7-18.
- 2011 「『フジウム』への視線：1920年代ソ連中央アジアにおける女性解放運動と現代」小長谷有紀ほか編『社会主義的近代化の経験：幸せの実現と疎外』明石書店、pp.98-122。
- 2005 「英雄の復活：現代ウズベキスタン・ナショナリズムのなかのティムール」酒井啓子ほか編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』（イスラーム地域研究叢書5）東京大学出版会、pp.185-212。

⑤ 出版業績

[編書・共編書]

- 2016 『融解と再創造の世界秩序』（関連地域研究2）青土社（村上勇介と共編）。
- 2016 *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (Obiya, Chika, ed., CIAS Discussion Paper No. 63) CIAS.

[単行本の分担執筆]

- 2016 「社会主義的近代とイスラームの交わる場所：ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題からの眺め」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（関連地域研究2）青土社、pp.161-183。
- 2016 「プロローグ 覇権大国不在の無秩序な世紀の到来」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（関連地域研究2）青土社、pp.11-22（村上勇介と共著）。
- 2016 「エピローグ 地域から世界を考え、世界から地域を考える：関連地域研究の試み」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（関連地域

研究2）青土社、pp.209-210（村上勇介と共著）。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2016 Preface, *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (Obiya, Chika, ed., CIAS Discussion Paper No. 63) CIAS, p.4.
- 2016 Introduction, *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (Obiya, Chika, ed., CIAS Discussion Paper No. 63) CIAS, pp.5-6.
- 2016 “The Politics of the Veil in the Context of Uzbekistan,” *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (Obiya, Chika, ed., CIAS Discussion Paper No. 63) CIAS, pp.7-18.

[短報ほか]

- 2016 「『砂漠の真珠』の憂鬱：ウズベキスタンのロシア・アヴァンギャルド・コレクションをめぐる」『ユーラシア研究』53（ユーラシア研究所、群像社）、pp.65-68。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2015 「トルキスタン集成」（地域情報学プロジェクト、個別共同研究ユニット「書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る」）。

「トルキスタン集成」全594巻を対象に、巻別インデクスとキーワード入力による検索および資料PDF閲覧という基本機能に加え、語彙分析やカテゴリ分類の処理、時空間情報の利用などによってコレクションの全体像の把握を可能にするDB構築手法を検討し、一部機能については開発中ながら、公開した。PDFは学内限定公開。書誌およびその原本画像13,409件。また、新たに所収した資料中約200件のアラビア文字表記のタタール語等資料につき、原語から採録した書誌情報を追加する作業を行った（柴山守、亀田堯宙と共同で開発。II.2.2.⑰参照）。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2015.12.26 International Workshop “Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society,” 地域研、個別共同研究ユニット「中央アジアの社会主義的近代化と現在」、科研費・基盤研究(B)「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族」、京都市（企画・運営・総括）。

[参加報告]

- 2015.12.26 “Politics of the Veil in the Context of Uzbekistan,” International Workshop “Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today’s Society,” 地域研、個別共同研究ユニット「中央アジアの社会主義的近代化と現在」、科研費・基盤研究 (B)「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族」、京都市。

[招待講演]

- 2015.11.27 “Из страниц истории национального размежевания в Центральной Азии: между динамикой центральноазиатской истории и новой официальной историей независимого государства,” 筑波大学大学院人文社会科学部、つくば市。

[その他の役割]

- 2015.12.26 International Workshop “Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today’s Society,” 地域研、個別共同研究ユニット「中央アジアの社会主義的近代化と現在」、科研費・基盤研究 (B)「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族」、京都市 (趣旨説明)。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤研究 (B)「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族：『近代化』再考のための視座の構築」(2012～2015年度)。

⑩海外調査活動

- 2015.7.31-8.2 ウズベキスタンにおいて、ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所などで「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族の視点から見た社会主義的近代化」をテーマに調査を行った (科研費)。

⑪教育

- 2009.4.1- 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (グローバル地域研究専攻イスラーム世界論講座)、協力教員 (准教授)。

2015年度は大学院生4名の主指導教員、2名の副指導教員を務めた。「中央アジア地域研究論」「地域研究論」(1回)、「グローバル地域研究演習Ⅰ～Ⅳ」「グローバル地域研究論課題研究Ⅰ」担当。

- 2015.4.1-2015.9.30 京都大学総合人間学部、学内非常勤講師、「ユーラシア文化複合論B」担当。
- 2015.4.1-9.30 立命館大学国際関係学部、非常勤講

師、「ロシア・ユーラシア研究Ⅰ」担当。

- 2016.10.1-2016.3.31 京都大学大学院文学研究科・文学部、学内非常勤講師、「西南アジア史学 (特殊講義)」「現代史学 (特殊講義)」担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1-2016.3.31 京都大学イスラーム地域研究センター運営委員、拠点構成員、『イスラーム世界研究』編集委員。
- 2015.4.1-2016.3.31 国立民族学博物館文化資源共同研究員。
- 2011.4.1- 日本中央アジア学会『日本中央アジア学会報』編集委員。
- 2012.4.1- 日本中央アジア学会理事。

地域相関研究部門 准教授

村上 勇介 (むらかみ ゆうすけ)

①専門分野

ラテンアメリカ地域研究、政治学

②経歴

- 1991年 在ペルー日本国大使館専門調査員
- 1995年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手
- 2002年 同助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
- 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) ラテンアメリカ政治研究
- (2) 政治体制比較研究
- (3) ラテンアメリカの国際関係

④主要業績

- 2012 *Perú en la era del Chino: la política no institucionalizada y el pueblo en busca de un Salvador* [フジモリ時代のペルー：制度化しない政治、救世主を求める人々], 2ª edición, (Ideología y política 27), Lima: Instituto de Estudios Peruanos y Center for Integrated Area Studies, Kyoto University.
- 2004 『フジモリ時代のペルー：救世主を求める人々、制度化しない政治』平凡社。
- 2004 *Sueños distintos en un mismo lecho: una historia*

de desencuentros en las relaciones Perú-Japón durante la década de Fujimori [同床異夢のペルー・日本関係：フジモリ期におけるすれ違いの軌跡] (Ideología y política 20), Instituto de Estudios Peruanos y Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.

- 2000 *La democracia según C y D: un estudio de la conciencia y el comportamiento político de los sectores populares de Lima* [下層の人々が語る民主主義：リマ貧困層の政治意識と行動に関する一考察] (Urbanización, migraciones y cambios en la sociedad peruana 15), Instituto de Estudios Peruanos y Japan Center for Area Studies.
- 1999 *El espejo del otro: el Japón ante la crisis de los rehenes en el Perú* [他者の鏡：在ペルー日本国大使公邸占拠事件と日本] (Ideología y política 12), Instituto de Estudios Peruanos y Japan Center for Area Studies.

⑤ 出版業績

[編書・共編書]

- 2016 『融解と再創造の世界秩序』（相関地域研究2）青弓社（帯谷知可と共編）。

[単行本の分担執筆]

- 2016 「ラテンアメリカでの地域秩序変動」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（相関地域研究2）青弓社、pp.94-113。
- 2016 「プロローグ 覇権大国不在の無秩序な世紀の到来」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（相関地域研究2）青弓社、pp.11-22（帯谷知可と共著）。
- 2016 「エピローグ 地域から世界を考え、世界から地域を考える：相関地域研究の試み」村上勇介・帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』（相関地域研究2）青弓社、pp.209-210（帯谷知可と共著）。
- 2016 「モニュメントの読み解きからみる南米ペルー社会」谷川竜一・原正一郎・林行夫・柳澤雅之編『衝突と変奏のジャスティス』（相関地域研究3）青弓社、pp.22-43。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2015 「20世紀のペルーにおける労働組合と国家：先行研究による分析の視角」（宇佐見耕一・馬場香織編『ラテンアメリカの国家と市民社会研究の課題と展望』（調査研究報告書2014-C-8）日本貿易振興機構アジア経済研究所、pp.33-49。

[短報ほか]

- 2015 「〈西日本部会〉」『日本ラテンアメリカ学会会報』（日本ラテンアメリカ学会）、pp.40-41。
- 2016 「〈西日本部会〉」『日本ラテンアメリカ学会会報』（日本ラテンアメリカ学会）、pp.10-11。
- 2016 「鼎談 南米の森と都市の環境問題：ペルー・国際協力の現場を歩く」関野樹編『フィールドから考える地球の未来：地域と研究者の対話』（地球研叢書）昭和堂、pp.84-103。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 「ペルーの社会紛争データベース」（地域情報学プロジェクト）。
ペルーの護民官局が作成している社会紛争報告（月刊）をデータベース化し、それを視覚化して見やすい形で提供するとともに、社会紛争の原因とプロセスを分析している。
- 「センデロールミノソ関連資料データベース」（地域情報学プロジェクト）。
マイクロフィルムのPDF化を終了し、公開にむけて、ペルー問題研究所、プリンストン大学図書館と協議中。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2015.6.1 Seminario sobre la Colombia contemporánea “El proceso de paz con las FARC en Colombia,” 京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館（組織責任者）。
- 2015.6.22 シンポジウム「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題」、主催：上智大学イベロアメリカ研究所、京都大学地域研究統合情報センター、後援：ラテンアメリカ協会、上智大学中央図書館棟9階921会議室（組織責任者）。
- 2015.10.10 シンポジウム「BRICs諸国のいま：2010年代世界の位相」、京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、あすか会議室日本橋会議室あすか4+5（組織責任者）。

- 2015.12.19 セミナー「低成長期ラテンアメリカの政治経済」、日本ラテンアメリカ学会、ラテン・アメリカ政経学会、同志社大学烏丸キャンパス志高館2階SK203（組織責任者）。
- 2016.1.8 セミナー「ラテンアメリカにおける政策改革、産業構造の高度化と包摂的成長」、京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館3階小会議室II（組織責任者）。
- 2016.1.23 Seminario sobre la Argentina contemporánea “Del kirchnerismo al ‘macrismo’: legados, continuidades y rupturas,” 京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館（組織責任者）。
- 2016.3.4 セミナー「中所得国の罫」、京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館3階中会議室（組織責任者）。
- 2016.3.5 Seminario sobre la Guatemala contemporánea “Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas,” 京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館（組織責任者）。

[参加報告]

- 2015.6.22 「小党分裂化するペルー政治」、シンポジウム「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題」、主催：上智大学イベロアメリカ研究所、京都大学地域研究統合情報センター、後援：ラテンアメリカ協会、上智大学中央図書館棟9階921会議室。
- 2015.12.19 「新たな段階の始まり？：ラテンアメリカ

政治の現代的位相」、セミナー「低成長期ラテンアメリカの政治経済」、日本ラテンアメリカ学会、ラテン・アメリカ政経学会、同志社大学烏丸キャンパス志高館2階SK203。

[基調講演]

- 2015.6.22 「今世紀のラテンアメリカ政治：ネオリベリズム期以降の政党政治を中心に」、シンポジウム「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題」、主催：上智大学イベロアメリカ研究所、京都大学地域研究統合情報センター、後援：ラテンアメリカ協会、上智大学中央図書館棟9階921会議室。
- 2015.10.10 「BRICsのいまを分析する意義」、シンポジウム「BRICs諸国のいま：2010年代世界の位相」京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、あすか会議室日本橋会議室あすか4+5。

[その他の役割]

- 2015.6.1 Seminario sobre la Colombia contemporánea “El proceso de paz con las FARC en Colombia,” 京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館（司会・趣旨説明）。
- 2015.12.19 セミナー「低成長期ラテンアメリカの政治経済」、日本ラテンアメリカ学会、ラテン・アメリカ政経学会、同志社大学烏丸キャンパス志高館2階SK203（趣旨説明・司会）。
- 2016.1.8 セミナー「ラテンアメリカにおける政策改革、産業構造の高度化と包摂的成長」、京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館3階小会議室II（司会）。
- 2016.1.23 Seminario sobre la Argentina contemporánea “Del kirchnerismo al ‘macrismo’: legados, continuidades y rupturas,” 京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社

会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館（司会・趣旨説明）。

- 2016.3.5 Seminario sobre la Guatemala contemporánea “Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas,” 京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」、京都大学稲盛財団記念館（司会・趣旨説明）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤研究（A）「新自由主義改革後の国家社会関係：中南米における社会支出予算決定過程の比較研究」（2012～2015年度）。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[受賞]

- 2015.10.31 2015年度「科研費」審査委員の表彰（独立行政法人日本学術振興会）。

[書評]

- 2015.4.1 Tomáš Došek, (Información Bibliográfica), “Yusuke Murakami (ed.). *La actualidad política de los países andinos centrales en el gobierno de izquierda*. Lima: Instituto de Estudios Peruano y Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, 2014. 125 pp. ISBN: 978-9972-51-472-2,” *América Latina Hoy* 69, Instituto de Iberoamérica, Universidad de Salamanca, pp.169–171.
- 2015.7.18 「崎山政毅／ラテンアメリカ思想史」『図書新聞』3215号（2015年上半期読書アンケート）、p.3。
- 2015.7.31 桜井敏浩「『21世紀ラテンアメリカの挑戦』（ラテンアメリカ参考図書案内）」『ラテンアメリカ時報』一般社団法人ラテンアメリカ協会、p.37。
- 2015.7.31 Liudmila Morales Alfonso, (“Reseñas”), “*La actualidad política de los países andinos centrales en el gobierno de izquierda*, de Yusuke Murakami,” URVIO, *Revista Latinoamericana de Estudios de Seguridad* 16, Facultad de Ciencias Sociales de América Latina-FLACSO, pp.124–125.
- 2015.12.10 山岡加奈子「村上勇介編著『21世紀ラテンアメリカの挑戦』（書評）」『ラテン・アメリカ論集』

49、ラテン・アメリカ政経学会、pp.85–90。

- 2015.12.20 菊地啓一「村上勇介編著『21世紀ラテンアメリカの挑戦』（資料紹介）」『ラテンアメリカ・レポート』32（2）、p.81。

[新聞・テレビ・ネット]

- 2015.11.14 “Ahí nos vemos”（pp.26–34）（全国紙*El comercio*紙発刊の週刊誌で、フジモリ政権末期に関する特集記事が生まれ、その中で、著書*Perú en la era del Chino*が引用され、同書の成果が基本的事実として言及されている）。

⑩海外調査活動

- 2015.11.25–12.17 ペルー共和国のペルー問題研究所においてペルーにおける労働組合に関する現地調査を行った（日本貿易振興機構アジア経済研究所研究費）。
- 2016.1.28–2.13 ペルー共和国のペルー問題研究所においてラテンアメリカの民主主義的価値観に関する現地調査を行った（京都大学コア-ステージバックアップ研究費）。
- 2016.2.16–3.2 ペルー共和国のペルー問題研究所においてラテンアメリカにおける社会紛争と体制転換に関する現地調査を行った（科研費）。
- 2016.3.9–24 ペルー共和国のペルーアマゾン研究所において熱帯森林の保全に関する現地調査を行った（国際協力機構・日本学術振興会プロジェクト事業費）。

⑪教育

- 2015.4.1–9.30 京都大学全学共通科目「ラテン・アメリカ現代社会論」担当。
- 2015.4.1–9.30 同志社大学法学部「中南米地域研究」担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015年度 学術誌*México y la Cuenca del Pacífico*編集委員会国際委員。
- 2015.4–7 兵庫県阪神シニアカレッジ講師。
- 2015年度 JICA・JSPSプロジェクト「アマゾン地域のコミュニティにおけるREDD+プロジェクト実施のための社会・制度・文化的状況評価」科学技術研究員。
- 2015年度 日本ラテンアメリカ学会理事（西日本研究部会担当）。
- 2015年度 ラテンアメリカ政経学会理事（『ラテン・

アメリカ論集』編集担当)。

- 2016.1.22-27 Enrique Peruzzoti客員教員受入 (アルゼンチンUniversidad Torcuato Di Tella、研究テーマ: Del kirchnerismo al 'macrismo': legados, continuidades y rupturas)。
- 2016.3.4-9 Eduardo Nuñez客員教員受入 (グアテマラInstituto Nacional Democrático、研究テーマ: Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas)。

地域関連研究部門 助教

中山 大将 (なかやま たいしょう)

①専門分野

北東アジア地域研究、サハリン樺太史、農業社会史、移民史

②経歴

- 2010年4月 京都大学大学院文学研究科GCOE研究員
- 2012年4月 日本学術振興会特別研究員PD (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター所属)
- 2015年4月 京都大学地域研究統合情報センター助教

③研究課題

- (1) サハリン島における移民社会の形成解体過程の研究
- (2) 近現代東アジア境界地域における移民社会の形成解体過程の比較史研究
- (3) 地域情報学の成果を活かした新しい歴史研究手法の模索

④主要業績

- 2015 “Japanese Society on Karafuto,” Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Oxon: Routledge, pp.19-41.
- 2014 『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』 京都大学学術出版会。
- 2013 「サハリン残留日本人：樺太・サハリンからみる東アジアの国民帝国と国民国家そして家族」 蘭信三編 『帝国以後の人の移動：ポストコロニアルと

グローバリズムの交錯点』 勉誠出版、pp.733-781。

⑤出版業績

[単行本の分担執筆]

- 2015 「旧住民から見たサハリン島の戦後四年間」 エレーナ・サヴェーリエヴァ (小山内道子訳、サハリン・樺太史研究会監修) 『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ：一九四五年—一九四七年』 成文社、pp.156-177。
- 2015 「解説 サハリン残留日本人の歴史」 NPO法人日本サハリン協会編 『樺太 (サハリン) の残照：戦後70年近藤タカちゃんの覚書』 NPO法人日本サハリン協会、pp.209-217。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2016 「メディアと記憶が創る樺太の〈戦後〉：東アジアの複数の〈戦後〉とメディア」 王柳蘭編 『声を繋ぎ、掘り起こす：多声化社会の葛藤とメディア』 (CIAS Discussion Paper No.66) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.43-50 (巫靚と共著)。
- 2016 『サハリン樺太史研究会2011年度活動報告書』 サハリン樺太史研究会 (編集)。
- 2016 『サハリン樺太史研究会2012年度活動報告書』 サハリン樺太史研究会 (編集)。
- 2016 『サハリン樺太史研究会2013年度活動報告書』 サハリン樺太史研究会 (編集)。
- 2016 『サハリン樺太史研究会2014年度活動報告書』 サハリン樺太史研究会 (編集)。

[短報ほか]

- 2015 「戦後70年のもうひとつの課題：民間資料の収集と保存をめぐる」 京都大学地域研究統合情報センター図書室エッセイ (京都大学地域研究統合情報センター)、<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/library/essay/>。
- 2016 「旧新野幌部落 (道立自然公園野幌森林公園内)」 『京都大学地域研究統合情報センター ニュースレター』 No.18 (京都大学地域研究統合情報センター)、p.15。
- 2015 「『地域研究』14巻2号特集へのコメント 紅くない世界から見た『紅い戦争』：特集1『紅い戦争の記憶』によせて」 『地域研究』16巻1号 (地域研究コンソーシアム)、昭和堂、pp.284-289。
- 2016 「書評 塩出浩之『越境者の政治史』」 『図書新聞』3245号 (図書新聞)、p.3。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2016.2.3-4 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ (2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ)、主催:京都大学文学研究科、共催:京都大学人間・環境学研究科、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館 (福谷彬・巫観と共同で企画・実施)。

[参加報告]

- 2015.4.11 “Land or People?: The Organization of Japanese Repatriates from Sakhalin (Karafuto) and the Remaining Japanese and Koreans of Sakhalin,” Association for Borderlands Studies Annual Conference 2015, Association for Borderlands Studies, Marriot Portland Downtown Waterfront, Portland, Oregon, USA.
- 2015.5.30「樺太・サハリンにおけるエスニック・グループ間関係: 記憶の中の共生」、日本文化人類学会第49回研究大会、日本文化人類学会、大阪国際交流センター。
- 2015.6.20 “Where Have the Subarctic Engineers of Karafuto Gone?: Engineers at the Saghalien Central Experiment Station in the Postwar,” The Nineteenth Asian Studies Conference Japan (ASCJ), Asian Studies Conference Japan, Meiji Gakuin University, Japan.
- 2015.8.13 「旧樺太住民の複数の戦後」、第3回東アジア若手歴史家セミナー、主催:ソウル大学校日本研究所、ソウル大学校東洋史学科、復旦大学歴史系、早稲田大学朝鮮文化研究所、ソウル大学校日本研究所。
- 2015.8.25 “Between Koreans and Japanese in Sakhalin Island: A Borderland of East Asia,” The World Congress for Korean Politics and Society 2015, The Korean Political Science Association, Hotel Hyundai, Gyeongju, Republic of Korea.
- 2016.2.3 「境界地域史研究の構想」、東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ (2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ)、主催:京都大学文学研究科、共催:京都大学人間・環境学研究科、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館。
- 2016.2.4 「討論会 議題提起 学知と地域・国家・社会を考える」、東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ (2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ)、主催:京都大学文学研究科、共催:京都大学人間・環境学研究科、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館。

学人類学若手ワークショップ)、主催:京都大学文学研究科、共催:京都大学人間・環境学研究科、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館。

- 2016.2.4 「討論会 補足:『地域』概念と高橋哲哉の議論について」、東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ (2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ)、主催:京都大学文学研究科、共催:京都大学人間・環境学研究科、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館。

[その他の役割]

- 2015.11.1 国際シンポジウム「ソ連占領地域の抑留史」、主催:サハリン・樺太史研究会、共催:科研費・基盤研究 (B)「サハリン (樺太) 島における境界変動の現代史」(研究代表:原暉之)、北海道大学 (コメンテーター)。
- 2015.12.20 塩出浩之著『越境者の政治史』合評シンポジウム、主催:科研費・基盤研究 (A)「20世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合」(代表:蘭信三)、上智大学 (評者)。

⑧競争的資金獲得状況

- 京都大学若手研究者ステップアップ研究費「近現代東アジア境界地域の人の移動と農業拓殖の比較史:サハリン島と台湾島を中心に」(2015年度)。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[受賞]

- 2016.3.28 日本農業史学会賞受賞。

[書評]

- 2015.5.1 「書評 中山大将著『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成:周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』(三木理史)、『日本歴史』804号、pp.111-113。
- 2016.3.26 「書評 エレーナ・サヴェーリエヴァ著『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ』(井潤裕)、『図書新聞』3248号、3面 (同書に中山大将「旧住民から見たサハリン島の戦後四年間」が掲載されており、同記事中でも言及もなされた)。

[新聞・テレビ・ネット]

- 2015.8.15 「あるとき それから サハリン残留 離別望郷翻弄された住民 (平出義明)、『朝日新聞』夕刊東京版・3面 (サハリン残留日本人問題について)。

て専門家としてコメント)。

- 2015.9.28 「サハリン 心をつなぐ25年 一時帰国民間が支え」『読売新聞』夕刊・13面 (サハリン残留日本人問題について専門家としてコメント)。
- 2015.10.3 「世界深層 サハリン残留 揺れる望郷 (広瀬誠)」『読売新聞』6面 (サハリン残留日本人問題について専門家としてコメント)。
- 2015.10.3 “Sakhalin Japanese mark 25 yrs of renewed ties,” *The Japan News*, p.3 (サハリン残留日本人問題について専門家としてコメント)。
- 2015.11.19–2016.1.11 「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国 (共同通信・熊宏尚)」『東奥日報』ほか国内22紙に掲載 (サハリン残留日本人問題について専門家としてコメント)。
- 2015.12.10 「北海道@ユジノサハリンスク 残留日本人 地道に調査 (栗田直樹)」『北海道新聞』6面 (北海道出身のサハリン研究者として紹介)。
- 2016.1.15 「ニュース特集 サハリン帰国者 仲間と共に眠るお墓を」NHK総合 (札幌放送局) (番組名「おはよう北海道」) (サハリン残留日本人問題について専門家として制作協力)。

⑩海外調査活動

- 2015.9.13–24 中華民国の中央研究院近代史研究所 档案館ほかにて「近現代東アジア境界地域の人の移動と農業拓殖の比較史」についての調査を行った (京都大学若手研究者ステップアップ研究費)。
- 2015.10.15–20 ロシア連邦サハリン州のサハリン北海道人会ほかにて「近現代東アジア境界地域の人の移動と農業拓殖の比較史」についての調査を行った (京都大学若手研究者ステップアップ研究費)。
- 2016.2.28–3.3 中華人民共和国の上海市档案館ほかにて「樺太華僑の戦後史」についての調査を行った (私費)。

⑪教育

- 2015.8.20 京都大学サマースクール2015、模擬授業「国境が変わると何が変わるのか:平和を科学する」、京都大学吉田キャンパス。
- 2015.10.2 東京大学教養学部アジア共同体講座「人の移動から考えるアジア共同体」(助成:ワンアジア財団)、第3回講義「サハリン・樺太の境界変動と人の移動」、東京大学駒場キャンパス。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1–2017.3.31 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、境界研究共同研究員。
- 2015.4.1– 地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員。
- 2013.5.25–2015.6.21 サハリン樺太史研究会事務局長。
- 2011.2.13– サハリン樺太史研究会HP担当係。

情報資源研究部門 教授

貴志 俊彦 (きしとしひこ)

①専門分野

近現代東アジア史

②経歴

- 1993年 島根県立国際短期大学専任講師
- 2000年 島根県立大学総合政策学部 (専任講師→助教授→教授)
- 2007年 神奈川大学経営学部教授
- 2010年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③研究課題

- (1) 東アジア通信・メディア研究
- (2) 非文字資料の共有化と研究利用
- (3) 東アジア域内交流史研究

④主要業績

- 2015 『日中間海底ケーブルの戦後史:国交正常化と通信の再生』吉川弘文館。
- 2013 『東アジア流行歌アワー:越境する音 交錯する音楽人』(岩波現代全書15) 岩波書店。
- 2012 『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館 (松重充浩ほかと編著)。
- 2011 『アジアの自画像と他者:地域社会と「外国人」問題』京都大学学術出版会 (編著)。
- 2010 『満洲国のビジュアル・メディア:ポスター・絵はがき・切手』吉川弘文館。

⑤出版業績

[編書・共編書]

- 2015 『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版社 (川島真、孫安石と共編)。

[単行本の分担執筆]

- 2015「ラジオ・メディア空間をめぐる日中電波戦争」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.26-53。
- 2015「中国の日本人捕虜と『対敵宣伝ラジオ放送』」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.96-120。
- 2015「抗戦教育に変質する中華民国の『電化教育』」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.121-146。
- 2016「災害情報をいかに次代へ伝えるか：台湾の被災地を歩く」関野樹監修『フィールドから考える地球の未来：地域と研究者の対話』（地球研叢書）昭和堂、pp.104-122（原正一郎、貴志俊彦、山本博之と共著）。

[短報ほか]

- 2015「序言 戦後70年：再評価されるラジオ」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.i-viii。
- 2015「日本ラジオ博物館」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.518-520。
- 2015「中国第二歴史档案馆（南京市）」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.526-527。
- 2015「北京市档案馆」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.531-533。
- 2015「中山・中国收音機博物館」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.534-535。
- 2015「文献リストI（2005年以前）」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.536-544。
- 2015「東アジア・ラジオ放送関連年表」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.552-569。
- 2015「資料1 日本帝国圏のラジオ放送局一覧」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.570-573。
- 2015「資料2 中華民国のラジオ放送局一覧」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.572-573。
- 2015「資料3 日本内地・関東州・満洲のラジオ番組（1936年1月）」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.574-587。
- 2015「資料4 日本の国際放送年度別実施状況一覧」

貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.588-589。

- 2015「資料5 重慶・昆明の日本語放送（1945年7～9月）」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.590-595。
- 2015「あとがき」貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp.597-599。
- 2015「『二〇世紀満洲』という視点」、*Journal of Manchurian Studies* 19（満洲学会〔韓国〕）、pp.228-234。

[その他の刊行物]

- 2015.4.14「コラム：今日の話 日中台の国際放送」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.5.19「コラム：今日の話 戦争と平和の描写」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.5.21「ぶんかのミカタ ラジオ放送90周年（上）」『毎日新聞』（関西版・夕刊）、「夕刊ワイド」欄、大阪、2面。
- 2015.6.16「コラム：今日の話 テレサテンを偲ぶ」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.7.21「コラム：今日の話 戦争の開始と終焉」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.8.25「コラム：今日の話 安倍談話の波紋」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.9.22「コラム：今日の話 『抗日戦勝』の地域差」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.10.27「コラム：今日の話 カナダの中国系移民問題」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。
- 2015.12.1「コラム：今日の話 国際通信網の多元化」『国際貿易』日本国際貿易促進協会、1面。

⑥ 情報共有化の業績

[ソフトウェア、システム開発]

- 2015 “Linked Archive of Asian Postcards” を構築中。地域研で公開している「戦前期東アジア絵はがきデータベース」(http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000022PPC) と、米国ラファイエット大学で公開している “East Asia Image Collection” (<https://digital.lafayette.edu/collections/eastasia>) との横断検索システムの構築（亀田亮宙と共同で開発）。
- [データベース作成のための資料収集・整理活動など]
- 2015「京都大学人文科学研究所所蔵華北交通株式会社写真集成」の調査継続。戦前の国策会社「華北交通株式会社」が広報用に撮った写真（台紙付）の整理作業を行った（北本朝展、西村陽子と共同

で開発)、非公開。

7 研究集会

[企画・実施]

- 2015.5.30 「知られざる中国〈連環画(れんかんが)〉: これも『マンガ』?」、科研費・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」(代表: 貴志俊彦)、科研費・基盤研究(C)「民国期児童雑誌の研究: 商務印書館編訳所の活動と児童表象を軸に」(代表: 佐々木睦)、京都国際マンガミュージアム(武田雅哉、佐々木睦と共同で企画、総合コメント)。
- 2015.8.25 国際学術討論会「東亜的歴史、現在與未来: 文化交流と相互認識 東亜学術論壇2015」、哈爾濱師範大学日語語言文学学科、哈爾濱師範大学(中国)(王宗傑、李梁と共同主催)。
- 2015.11.29 『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』書評会、科研費・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」(代表: 貴志俊彦)、勉誠出版、東京大学(川島真、孫安石と共同主催)。
- 2015.12.20 第2回華北交通写真協議会、科研費・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」(代表: 貴志俊彦)、京都大学稲盛財団記念館(主催、司会)。

[参加報告]

- 2015.4.26 「非文字資料の共有化と研究利用」、京都大学地域研究統合情報センター2014年度共同利用・共同研究報告会、京都大学稲盛財団記念館。
- 2015.5.16 「第二次世界大戦期間画報中有関『事変』與『開発』の媒体表象: 以満鉄発行的《滿洲画報》、《北支画刊》為線索」、「終戦七十年週年: 日本帝国及其殖民地的戦争動員與視聽伝播」学術研討会、国立政治大学伝播学院、国立政治大学(台北市)。
- 2015.8.25 「盧溝橋事変前後の満鉄弘報宣伝誌における表象表現」、東亜学術論壇2015「東亜的歴史、現在與未来: 文化交流と相互認識」哈爾濱師範大学日語語言文学学科、哈爾濱師範大学(中国)。
- 2015.9.15 “Reading the Record of a Hundred Years of Intra-East Asian Conflict and Cooperation through Research in Audio-Visual Materials,” Public Symposium: Media Cultures of Wartime and Postwar East Asia, The Asian Studies Program, Georgetown University, Georgetown University (米国)。
- 2015.10.9 「台湾の国連脱退と沖繩 - 台湾間海底ケー

ブル布設問題」、京都大学人文科学研究所東方学研究所プロジェクト「近現代中国における社会経済制度の再編」、京都大学人文科学研究所東方学研究所、京都大学人文科学研究所。

- 2015.12.20 「軍報道課(部) 検閲済印付写真について」、第2回華北交通写真協議会、科研費・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」(代表: 貴志俊彦)、京都大学稲盛財団記念館。
- 2016.2.23 「中国: キリスト教徒に対する許容と排斥の境界」、東亜学術論壇2016「交错する東アジア像」京都大学地域研究統合情報センター複合同研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」、科研費・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」(代表: 貴志俊彦)、公益財団法人東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班国際関係・文化グループ、金沢大学新学術創成研究機構、石川県政記念しいのき迎賓館。
- 2016.3.7 「図画像資料から検証する近現代中国の文化と社会」、東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班国際関係・文化グループ2015年第3回研究会、東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班、公益財団法人東洋文庫。

[招待講演]

- 2015.6.13 「日中国交正常化と通信事業の再開」、第61回中国四国地区中国学会大会、中国四国地区中国学会、岡山大学。
- 2015.7.3 「日中間通信の幕開け “日中間海底ケーブルの戦後史”: 国交正常化と通信の再生をめぐる」、第12回うなばら会講演会、うなばら会(旧海底線同友会)、学士会館。
- 2015.7.10 「東アジアの流行歌: 国境を越える音楽」、アジア共同体講座第13回、中央大学経済学部、中央大学。

[その他の役割]

- 2015.5.24 「宮本常一・林光・姫田忠義: 映像民俗学者姫田忠義の軌跡を追う2015」姫田忠義の軌跡を追うボランティアの会、徳正寺(京都市)(司会)。
- 2015.5.28 「ポール・パークレー×中山大将 ジョイント・ワークショップ2015」京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館(司会)。
- 2015.8.20 「人口減少下における地方の創生策はいかにあるべきか: 東京一極集中是正の可能性」、日本学術会議、日本学術会議講堂(村山祐司と共同

で総合討論の司会)。

- 2015.10.3 「亀裂の走る世界の中で：地域研究からの問い」、日本学術会議、早稲田大学大隈小講堂（パネルディスカッションの司会）。
- 2016.2.3 国際シンポジウム「戦後・冷戦期における東アジアの華僑社会」、主催：神戸華僑華人研究会、神戸華僑歴史博物館、神阪京華僑口述記録研究会、共催：科研費・基盤研究（B）「国際比較からみた戦後日本華僑社会の構造的再編」、科研費・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、中華会館東亜ホール（神戸市）（総合コメンテーター）。
- 2016.2.23 東亜学術論壇2016「交錯する東アジア像」、京都大学地域研究統合情報センター複合共同研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」、科研費・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」（代表：貴志俊彦）、公益財団法人東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班国際関係・文化グループ、金沢大学新学術創成研究機構、石川県政記念しいのき迎賓館（司会、企画者）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」（2013～2016年度）。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[書評]

- 2015.4.24 「書評 多くの壁乗り越え中国と『繋がり』作ろうとした人々」『週刊ポスト』（話題の本 BOOK WONDERLAND）、p.131（貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史』の短評）。
- 2015.4.26 「出版あれこれ」『京都新聞』19面（日曜版・読書欄）（貴志俊彦他編『記憶と忘却のアジア』の紹介）。
- 2015.5.1 「Book Guide 貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史』」『出版ニュース』、p.38。
- 2015.6.1 「日中関係を考え直す契機を与えた海底ケーブル共同事業」『東方』412号（Book Review）、pp.24-27（貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史』の書評）。
- 2015.9.22 「『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』（貴志俊彦・川島真・孫安石編、勉誠出版）」『国際貿易』

2125号（近着の図書紹介）、4面。

- 2015.11.1 「貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史』」『中国研究月報』2015年11月号（書評欄）、p.254。
 - 2015.11.20 「ラジオ・メディアの来し方行く末：『能動的』な読者の理解と活用に任せる」『週刊読書人』3116号、6面（貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』の書評）。
 - 2015.12.1 「Book Review ラジオを通して東アジアの戦争の歴史を知る」『東方』418号、pp.26-29（貴志俊彦他編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』の書評）。
- [新聞・テレビ・ネット]
- 2015.11.20 「国際連盟退席の松岡洋右、カラー動画発見 米で演説の姿」『朝日新聞』（国際連盟脱退後、米国で講演をおこなった元外相、松岡洋右のカラー動画をめぐって）。
 - 2015.11.25 「〈おんなのしんぶん〉連載2周年記念して東京で写真展」『朝日新聞』（おんなのしんぶん欄）（毎週月曜朝刊に連載中の「おんなのしんぶん」2周年を記念する写真展について）。

⑩海外調査活動

- 2015.5.6-17 台湾の中央研究院近代史研究所、国立政治大学、台北市立大学、国家図書館、国立台湾歴史博物館、国立台湾美術館、国立台湾文学館、台北市立美術館、国定古蹟霧峰林家宮保第園区他にて「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」のための調査を行った（科研費）。
- 2015.8.24-28 中華人民共和国の哈爾濱師範大学、侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館他にて「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」のための調査を行った（科研費）。
- 2015.9.13-29 米国の米国国立公文書館、米国議会図書館、ジョージワシントン大学ゲルマン図書館、ジョージタウン大学、フリーア美術館、カナダのトロント大学、ロイヤル・オンタリオ博物館、Art Gallery of Ontario (RGO)、プリティッシュコロンビア大学、バンクーバー博物館他にて「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」のための調査を行った（科研費）。
- 2016.3.13-23 中華人民共和国の香港浸会大学、台湾の中央研究院他、香港にて「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」のための調査を行った（科研費）。

①教育

- 2015.10.1–2016.3.31 京都大学文学部「中国語学中国文学」「東洋史学」「現代史学」(特殊講義)、「二十世紀学」(演習Ⅱ)、同文学研究科「中国語学中国文学」「東洋史学」(特殊講義)。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014.10.1–2020.9.30 第23期日本学術会議連携会員(地域研究委員会地域情報分科会、地域研究委員会地域研究基盤整備分科会、言語・文学委員会・哲学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同アジア研究・対アジア関係に関する分科会)。
- 2015年度 日本歴史学協会国立公文書館特別委員会委員。
- 2015年度 公益財団法人東洋文庫現代中国研究班研究員。
- 2015年度 人間文化研究機構現代中国地域研究東洋文庫拠点構成員。
- 2015年度 広島史学研究会県外評議員。
- 2015.1.5–6.5 Paul D. Barclay客員教授受入(米国 Lafayette College教授、研究テーマ「大日本帝国の植民地と戦争に関する絵葉書の研究」)。

情報資源研究部門 准教授

西 芳実 (にしよしみ)**①専門分野**

インドネシア地域研究／アチェ近現代史

②経歴

- 2006年 東京大学大学院総合文化研究科特任助手
- 2007年 東京大学大学院総合文化研究科助教
- 2010年 立教大学AIIC助教
- 2011年 京都大学地域研究統合情報センター准教授

③研究課題

- (1) 多言語・多宗教地域の紛争・災害対応過程
- (2) 社会秩序の再編過程における外来者の役割
- (3) 国際協力事業分野における地域研究の知見の活用

④主要業績

- 2016 『歴史としてのレジリエンス:戦争・独立・災害』(災害対応の地域研究4) 京都大学学術出版会(川喜田敦子との共編著)。

- 2014 『災害復興で内戦を乗り越える:2004年スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』(災害対応の地域研究2) 京都大学学術出版会。
- 2013 「信仰と共生:バリ島爆発テロ事件以降のインドネシアの自画像」『地域研究』13巻2号(地域研究コンソーシアム)、pp.176–200。
- 2012 「災害・紛争と地域研究:スマトラ沖地震・津波における現場で伝わる知」『地域研究』12巻2号(地域研究コンソーシアム)、pp.181–197。
- 2011 “Among Bangsa, Keturunan, and Daerah: Peace-Building and Group Identity in the law on Governing Aceh, 2006,” Hiroyuki Yamamoto, et al., eds., *Bangsa and Umma: Development of People-Grouping Concepts in Islamized Southeast Asia*, Kyoto University Press, pp.166–182.

⑤出版業績

[単著]

- 2016 『被災地に寄り添う社会調査』 京都大学学術出版会。

[編書・共編書]

- 2016 『歴史としてのレジリエンス:戦争・独立・災害』(災害対応の地域研究4) 京都大学学術出版会(川喜田敦子との共編著)。

[単行本の分担執筆]

- 2016 「おわりに:社会のレジリエンスを歴史に問う」川喜田敦子・西芳実編『歴史としてのレジリエンス:戦争・独立・災害』(災害対応の地域研究4) 京都大学学術出版会、pp.343–356。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2016 「ワークショップの記録 変身するインドネシア:力と技と夢の女戦士たち」山本博之・篠崎香織編著『たたかうヒロイン:混成アジア映画研究2015』(CIAS Discussion Paper No.60) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.56–72。
- 2015 『東南アジアの移民・難民問題を考える:地域研究の視点から』(JCAS Collaboration Series No.12) 地域研究コンソーシアム(篠崎香織と共編)。
- 2015 『2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅱ』(CIAS Discussion Paper No.55) 京都大学地域研究統合情報センター(山本博之・篠崎香織と共編)。

⑥情報共有化の業績

[データベース作成のための資料収集・整理活動など]

- 東南アジア現地語オンライン記事自動収集・配信シ

システム「BeritaKU」の開発（インドネシア担当）

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2015.7.19 「東南アジアの移民・難民に関する緊急研究集会」、東南アジア学会、日本マレーシア学会、京都大学地域研究統合情報センター、東京大学持続的平和センター、地域研究コンソーシアム、東京大学山上会館（企画・組織・運営）。
- 2015.9.20 九州シネアドボ・ワークショップ「変身するインドネシア：力と技と夢の女戦士たち」、東南アジア学会、日本マレーシア学会、京都大学地域研究統合情報センター、東京大学持続的平和センター、地域研究コンソーシアム、チャンネルシティ博多（篠崎香織と共同で企画・組織・運営）。
- 2015.12.15-16 “Toward Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia,” 京都大学地域研究統合情報センター（JSPS Core to Core Program）、京都大学稲盛財団記念館（山本博之と共同で企画・組織・運営）。
- 2016.3.11 大阪アジア映画祭連携シンポジウム「“手に職系”女子とフォーエバー・ポギー」、京都大学地域研究統合情報センター、混成アジア映画研究会、大阪アジア映画祭（企画・組織・運営）。

[招待講演]

- 2015.10.6 「災害対応の国際協力 東南アジアの経験から」、第52回自然災害科学総合シンポジウム「国際共同研究の新たなステージへ」、京都大学防災研究所自然災害研究協議会、京都大学防災研究所。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤研究（B）「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」（2014～2018年度）。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[書評]

- 2015.4.1 「震災経験を読む：インドネシアの事例」『アジア研ワールド・トレンド（Library Corner）』（インドネシアの災害関連研究の動向紹介の記事の中で「スマトラ沖大地震・津波／インドネシア変革の契機としての自然災害」（2009年）、『災害復興で内戦を乗り越える』（2014年）の内容と意義が紹介された）。

[新聞・テレビ・ネット]

- 2015.6.27 「(@インドネシア・アチェ) ピント外れ？

のルールが急増中』『特派員レポート』（インドネシア・アチェ州でイスラム法にもとづく法令が急増していること背景についてのコメント）。

⑩教育

- 2015年度前期 京都大学ポケットゼミ「地域研究への招待：映画で読み解くアジア」。
- 2015年度Sセメスター 東京大学教養学部学術俯瞰講義「『地域』から世界を見ると？」第11回「スマトラ大津波が繋いだ世界」担当。
- 2015.7.18 JCASオンデマンドセミナー「災害・防災から見た東南アジアと日本」大阪府立北野高校SGH。
- 2015.8.4 JCASオンデマンドセミナー「東南アジア研究とその手法について学ぶ」福岡県立鞍手高等学校SGH。
- 2015年度後期 立命館大学国際関係学部「地域研究論Ⅱ」。

⑪社会活動・センター外活動

- 2010.4.1-2016.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員（2015.4.1- 事務局長）。
- 2010.4.1-2016.3.31 日本マレーシア学会運営委員。
- 2015.1.1-2016.12.31 東南アジア学会理事。
- 2015.12.11-23 インドネシアより4名。
- 2015.12.11-23 フィリピンより4名。
- 2015.12.11-23 マレーシアより4名。

情報資源研究部門 准教授

山本 博之（やまもと ひろゆき）

①専門分野

マレーシア地域研究／現代史

②経歴

- 1998年 マレーシア・サバ大学講師
- 2001年 東京大学大学院総合文化研究科助手
- 2003年 在メダン総領事館委嘱調査員
- 2004年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
- 2007年 同准教授

③ 研究課題

- (1) イスラム教圏東南アジアにおける民族と混血概念
- (2) 災害対応と情報
- (3) 地域研究の方法論
- (4) 劇映画に見られる集合的記憶の形成・再編

④ 主要業績

- 2014 『復興の文化空間学：ビッグデータと人道支援の時代』（災害対応の地域研究1）京都大学学術出版会。
- 2011 *Film in Contemporary Southeast Asia: Cultural Interpretation and Social Intervention*, Routledge (coeditor: David Lim).
- 2011 *Bangsa and Umma: Development of People-grouping Concepts in Islamized Southeast Asia*, Kyoto University Press (coeditors: Anthony Milner, et al.).
- 2006 『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

⑧ 競争的資金獲得状況

- 科研費・挑戦的萌芽研究「学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化」（2013～2015年度）。
- JSPS研究拠点形成事業（B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アジアの防災コミュニティ形成のための研究者・実務者・情報の統合型ネットワーク拠点」（2015～2017年度）。

⑩ 海外調査活動

- 2015.6.3-2016.3.31 フィリピンのAteneo de Manila Universityにて“The Contribution of Local Knowledge to Disaster Risk Management in the Philippines”を研究した。

⑫ 社会活動・センター外活動

- 2010.4.1-2016.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員。
- 2010.4.1-2016.3.31 日本マレーシア学会運営委員。
- 2011.1.1-2015.12.31 東南アジア学会理事。

谷川 竜一（たにがわりゆういち）

① 専門分野

アジア近現代都市・地域空間論、建築史・都市史

② 経歴

- 2004年 東京大学生産技術研究所技術職員
- 2009年 東京大学生産技術研究所助教
- 2012年 京都大学地域研究統合情報センター助教（2015年9月退職）

③ 研究課題

- (1) アジア近現代都市・建築に関する情報プラットフォームの構築
- (2) 建造物を通じた日本・アジア近現代関係史の解明
- (3) 記憶の収蔵庫としてのミュージアム建設やポピュラーカルチャーによるまちづくりの手法分析

④ 主要業績

- 2015 「往古への首都建設：平壤の朝鮮式建物」 貴志俊彦他編『記憶と忘却のアジア』（*相関地域研究1*）青弓社、pp.96-119。
- 2011 「東アジア近現代の都市と建築：建築・都市に織り込まれた帝国・国・社会」 和田春樹ほか編『アジア研究の来歴と展望』（*岩波講座東アジア近現代通史別巻*）岩波書店、pp.177-202。
- 2011 “Colonial Structures Veiled in Publicity: Lighthouses, Bridges, and Dams Built by the Japanese Empire in Colonial Korea,” *Our Living Heritage: Industrial Buildings and Sites of Asia*, mAAN(modern Asian Architecture Network) 8th International Conference, Seoul, August 25-27, 2011, pp.77-87.
- 2010 「京都国際マンガミュージアムにおける来館者調査：ポピュラー文化ミュージアムに関する基礎研究」『京都精華大学紀要』37号、pp.77-92（村田麻里子らと共著）。
- 2008 「流転する人々、転生する建造物：朝鮮半島北部における水豊ダムの建設とその再生」『思想』1005号、岩波書店、pp.61-81。

⑤ 出版業績

[単著・共著]

- 2016 『灯台から考える海の近代』（*情報とフィールド科学2*）京都大学学術出版会。

[編著・共編著]

- 2016『衝突と変奏のジャスティス』(相関地域研究3) 青弓社(原正一郎、林行夫、柳澤雅之と共編)。

[単行本の分担執筆]

- 2016「 $\Delta 3.75^\circ$ の近代：旧朝鮮総督府庁舎からみる建築設計の歴史的可能性」谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』(相関地域研究3) 青弓社、pp.114-137。
- 2016「設計的視座から紡ぎ出す、相関地域研究」谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』(相関地域研究3) 青弓社、pp.13-21(原正一郎、林行夫、柳澤雅之と共著)。

[短報ほか]

- 2015「パネル総括 朝鮮戦争からの復興と都市・建築：平壤・咸興の事例から」『朝鮮史研究会会報』199号(朝鮮史研究会)、pp.11-13。
- 2015「巻頭言 建築データベースから物語へ：ドラマ『昼顔』の中の夕照橋」『人文情報学月報』第44号(前編)(人文情報学学会)(<http://www.dhii.jp/DHM/dhm44-1>)。

[その他の刊行物]

- 2016 谷川竜一・伊藤遊・榎原充大編『空間と姿勢：京都国際マンガミュージアムの場合』RAD、マンガミュージアム研究会(電子ブック)。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 斑鳩の記憶データベース「チエノワイカル」<http://archive-ikaruga.org/>(斑鳩町立図書館、RADと共同開発)。

⑦ 研究集会

[参加報告]

- 2015.9.17「近現代建築史からみた日本による20世紀アジア開発とその連鎖」、Gaia Caramellino×谷川竜一ジョイント・セミナー2015、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学地域研究統合情報センター。
- 2015.5.20「20世紀平壤の夢」京都大学附属図書館ラーニングコモンズ、京都大学附属図書館。
- 2015.6.13「インスタレーション マテリアルの逆襲：『読む』ことを支えるメディア・ブリコラージュ」カルチュラル・タイフーン2015、RE:publicカルチュラル・タイフーン2015、大阪人権博物館(宮田雅子、村田麻里子と共同で報告)。

[その他の役割]

- 2015.8.9 “Chemical Industry and Energy Development: Japanese Development in Northern Korean Peninsular in the Early 20th Century,” International Workshop “Complexity of Innovative Colonial Milieu,” Kyoto University, Kyoto University.
- 2015.8.6 “Hydropower Development and Chemical Industrial City ‘Hungnam,’” XXVIIth World Economic History Congress (第27回世界経済史学会), World Economic History Congress, 京都国際会館。
- 2015.10.25 「斑鳩の生活・文化・環境の記憶を未来に伝える：懐かしの斑鳩小学校」、「斑鳩の記憶」アーカイブ化ワークショップ、斑鳩町、斑鳩町立図書館(榎原充大と共同で企画)。
- 2015.11.1 “‘Theory’ for Modern Asian Architecture,” Conservation Action Priorities for Twentieth Century Heritage Sharing Experience of ASEAN Countries and Japan, International Round Table and Colloquium, DoCoMoMo Japan, Japan ICOMOS National Committee ICOMOS ISC20c, and DoCoMoMo International co-organized by the Japan Foundation, 東京・西洋美術館。

⑧ 競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤研究(B)「20世紀北朝鮮の建築・都市通史の解明」(2014~2018年度)。

⑨ 受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[新聞・テレビ・ネット]

- 2015.10.3「斑鳩町教委：懐かしの斑鳩、後世に収集写真300点、ネットで公開 撮影者の記憶も紹介／奈良」<http://mainichi.jp/articles/20151003/dtl/k29/040/624000c>(斑鳩町立図書館とともに地域情報資源のデータベースサイト「チエノワイカル」を整備していることと、その正式公開に関する新聞紹介記事)。
- 2015.10.10「暮らし、文化を伝えて：『斑鳩の記憶』写真 データベース公開」<http://www.nara-np.co.jp/20151010095336.html>(斑鳩町立図書館とともに地域情報資源のデータベースサイト「チエノワイカル」を整備していることと、その正式公開に関する新聞紹介記事)。
- 2015.10.15「よみがえる昭和の斑鳩、なつかしの写真データベース公開」<http://sankei-nara-iga.jp/news/>

archives/1916 (斑鳩町立図書館とともに地域情報資源のデータベースサイト「チエノワイカル」を整備していることと、その正式公開に関する新聞紹介記事)。

- 2015.12.1「懐かしい写真募り『斑鳩の記憶』公開町立図書館」<http://digital.asahi.com/articles/ASHBX5V8GHBXPOMB00R.html?rm=307> (斑鳩町立図書館とともに地域情報資源のデータベースサイト「チエノワイカル」を整備していることと、その正式公開に関する新聞紹介記事)。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1–2016.3.31 日本建築学会近代建築史小委員会委員。
- 2016.1.1–2016.3.31 日本建築学会『建築雑誌』編集委員会委員。
- 2015.4.1–2016.3.31 NPOモダンアジア建築ネットワーク東京 (mAAN東京) 理事。
- 2015.8.1–10.31 Gaia Caramellino客員教員受入 (イタリア Politecnico di Torino、研究テーマ “Shaping the Intermediate City: A Comparative Study on Ordinary Residential Architecture for the Middle Class, 1950s–1970s”)。

高次情報処理研究部門 教授

原 正一郎 (はら しょういちろう)

①専門分野

情報学

②経歴

1989年 学術情報センター助手

1991年 国文学研究資料館助教授

2006年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③研究課題

- (1) 地域情報学 (Area Informatics) の創出
- (2) Humanities GISに関する研究
- (3) デジタルアーカイブに関する研究
- (4) 画像処理、古文書文字認識に関する研究
- (5) 医療情報学 (地域看護における情報処理) に関する研究

④主要業績

- 2012『歴史GISの地平：景観・環境・地域構造の復原に向けて』HGIS研究協議会編 (川口洋 (代表)・石崎研二・後藤真・関野樹・原正一郎)、勉誠出版。
- 2010 “Area Informatics: Concept and Status,” Toru Ishida, ed., *Culture and Computing: Computing and Communication for Crosscultural Interaction* (Lecture Notes in Computer Science 6259), Springer, pp.214–288.
- 2009「地域研究のための資源共有化システムとメタデータに関する研究」『東南アジア研究』46巻4号、pp.608–645。
- 2003「健診情報ための電子的交換規約」『情報知識学会誌』12巻4号、pp.32–52 (杉森裕樹ほかと共著)。
- 2002「国文学支援のためのSGML/XMLデータシステム」『情報知識学会誌』11巻4号、pp.17–35 (安永尚志と共著)。
- 1997 “Markup and Conversion of Japanese Classical Texts Using SGML in the National Institute of Japanese Literature,” *D-lib Magazine*, July/ August 1997 (<http://www.dlib.org/dlib/july97/japan/07hara.html>) (coauthor: Hisashi Yasunaga)。

⑤出版業績

[レフリー付雑誌論文]

- 2015「タブレット端末を用いた保健・医療活動データエントリシステムの有用性調査」『医療情報学』35 (Suppl.)、pp.1146–1149 (太田勝正、石川正敏、松田正己と共著)。
- 2015 “Evaluating a Community Health Activity: Data-Entry System Using the System Usability Scale,” *19th EAFONS 2016*, pp.916 (coauthors: K. Ota, M. Ishikawa, L. Piyabditkul, M. Matsuda)。

⑥情報共有化の業績

[ソフトウェア、システム開発]

- 2015「HuMap」(京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト、複合同研究ユニット「地域情報学の展開」)。Social Networkの可視化機能の追加、アフィン変換機能の追加。公開中。
- 2015「MyデータベースAPI」(京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト、複合同研究ユニット「地域情報学の展開」)。JSON出力機能の追加。公開中。

[データベース作成のための資料収集・整理活動など]

- 2015「HuMapマニュアル」(京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。
- 2015「Myデータベースマニュアル」(京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2015.9.27-29 PNC 2015 Annual Conference and Joint Meetings、中央研究院(台湾)、ECAI、University of California Berkeley (USA)、University of Macau(運営委員会委員)。
- 2015.12.12 第20回情報知識学フォーラム、情報知識学会、同志社大学今出川キャンパス(委員長)。

[参加報告]

- 2015.9.27-29 “Construction of Linked Data for the Humanities: To Integrate Heterogeneous and Plural Humanities Databases,” PNC 2015 Annual Conference and Joint Meetings, 中央研究院(台湾), ECAI, University of California Berkeley (USA), University of Macau.
- 2016.3.13-18 “Open Platform for Academic Humanities Data,” ISGC 2016, Academia Sinica Grids & Clouds, Academia Sinica, Taipei, Taiwan.

⑩海外調査活動

- 2015.9.27-29 University of Macauで行われたPNC 2015 Annual Conference and Joint Meetingsに参加し発表を行った。
- 2016.3.6-14 アメリカ合衆国University of California Berkeleyにて、時空間考古学に関する検討および大学デジタルアーカイブ調査を行った。
- 2016.3.15-19 台湾の中央研究院(Academia Sinica)で行われたInternational Symposium on Grids & Clouds 2016 (ISGC 2016)に参加した。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1-2016.3.31 人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会委員。
- 2015.4.1-2016.3.31 人間文化研究機構人間文化研究情報資源共有化連携企画部会会員。
- 2015.4.1-2016.3.31 人間文化研究機構国文学研究資料館電子情報委員会委員。

- 2015.4.1-2016.3.31 人間文化研究機構総合地球環境学研究所地球環境学リポジトリ事業運営委員会委員。
- 2015.5.1-2016.3.31 情報知識学会編集委員会委員。
- 2015.5.1-2016.3.31 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会連絡員。
- 2015.5.1-2016.3.31 ECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative), Executive Committee Member.
- 2015.5.1-2016.3.31 PNC (The Pacific Neighborhood Consortium), Steering Committee Member.
- 2015.5.1-2016.3.31 JADH (Japanese Association for Digital Humanities), Executive Board Member.

高次情報処理研究部門 教授

林 行夫 (はやし ゆきお)

①専門分野

東南アジア仏教徒社会の地域研究、文化人類学

②経歴

- 1988年 国立民族学博物館研究部助手
- 1993年 京都大学東南アジア研究センター(現東南アジア研究所)助教授
- 1996年 京都大学大学院人間・環境学研究科併任助教授
- 1998年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科併任助教授
- 2001年 京都大学博士(人間・環境学)
- 2002年 京都大学東南アジア研究所教授
- 2002年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科併任教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③研究課題

- (1) 大陸部東南アジア仏教徒社会の動態をめぐる地域間比較研究
- (2) 宗教活動と生活空間の編制に関する歴史・地域情報学的研究
- (3) 仏教実践をめぐる日本と東南アジア地域の交流と断絶

④主要業績

- 2016『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』(アジア遊学196) 勉誠出版(大澤広嗣編/共著)。

- 2011『新アジア仏教史4 スリランカ・東南アジア：静と動の仏教』佼成出版社（奈良康明ほか監修、編集協力／共著）。
- 2009『〈境域〉の実践宗教：大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会（編著）。
- 2003 *Practical Buddhism among the Thai-Lao: Religion in the Making of Region*, Kyoto/ Melbourne: Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
- 2000『ラオ人社会の宗教と文化変容：東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会。

⑤ 出版業績

[編書・共編書]

- 2016『衝突と変奏のジャスティス』（相関地域研究3）青弓社（谷川竜一、原正一郎、柳澤雅之と共編）。

[レフリー付雑誌論文]

- 2016「明治期日本人留学僧にみる日＝タイ仏教『交流』の諸局面」『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』（アジア遊学196）勉誠出版、pp.9-28。

[雑誌論文（レフリーなし）]

- 2015「上座仏教徒が伝えること：東南アジア地域の調査から」『龍谷史壇』139号、pp.26-40。

[単行本の分担執筆]

- 2016「生きている宗教と現代世界：東南アジア仏教徒社会からの考察」谷川竜一・原正一郎・林行夫・柳澤雅之編『衝突と変奏のジャスティス』（相関地域研究3）青弓社、pp.227-249。

[短報ほか]

- 2016「研究動向」など、京都大学地域研究統合情報センター創立10周年記念委員会『京都大学地域研究統合情報センター10年誌』地域研究統合情報センター。

[監修]

- 2016『戦時下「日本仏教」の国際交流（汎太平洋仏教青年會大会関係資料）』不二出版（吉永進一、大澤広嗣と共同監修）。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2015 “Mapping Practice of Theravadins”（京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト、科研費・基盤研究（A）「〈宗教＝社会複合マッピング〉からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」（代表：林行夫、2014～2017年度））。可視化システムの開発と更新。共同研究者間で共有（柴

山守と共同で開発）。

- 2015「北タイ古文書（貝葉資料）にみる民族間関係」（「タイ古文書データベースの構築」（代表：柴山守））。北タイ・西南中国境域で流通していた古文書を現代タイ語字に翻字化、民族、環境、生業、交易などに関わる項目と関連記載の統合型インデックス。共同研究者間で共有（Aroonrut Wichiankeeoと共同で開発）。

- 2015「タイ映画データベース」地域研HPにて一部を公開（原正一郎と共同で開発）。

[データベース作成のための資料収集・整理活動など]

- 2015「石井米雄コレクション」（地域情報学プロジェクト）。蔵書と日誌、旅券、写真などの非図書資料、蔵書約1万2千点を部分的に一般公開（柴山守と共同で開発）。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2016.4.23「〈地域〉を測量（はか）る」、京都大学地域研究統合情報センター創立10周年記念ワークショップ、稲盛財団記念館大会議室（村上勇介、柳澤雅之と共同で統括班長および報告）。

[参加報告]

- 2016.3.5-6 “Progress of Mapping Practices among Theravadins,” CIAS and National University of Arts, Phnom Penh, プノンペン。

[招待講演]

- 2015.7.24「仏教を生きる東南アジアの人びと」、名和会、真宗大谷派名古屋教区名和会、名古屋別院（名古屋市）。

[基調講演]

- 2016.2.13「タイの人はなぜ出家するのか」、日本タイクラブ第6回公開フォーラム、日本タイクラブ（タイ王国大阪総領事館・後援、日本タイ協会・協賛）、大阪（綿業会館）。

⑧ 競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤研究（A）「〈宗教＝社会複合マッピング〉からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」（2014～2017年度）。

⑨ 受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[新聞・テレビ・ネット]

- 2015.8.30, 9.6「東南アジアの生きた仏教」NHK（番

組名「宗教の時間」。

⑩海外調査活動

- 2015.9.7-25 タイ国のChulalongkorn Universityにおいてバンコク都の僧院と出家者のマッピング調査を行った（科研費）。
- 2015.12.8-18 タイ国の東北地方農村において声と文字をめぐる宗教実践の調査を行った（科研費）。
- 2016.3.1-7 タイ国Mahachulalongkorn Rajavidyalayaおよび国家仏教庁にて古文書データベース計画打合せを行った（科研費）。

⑪教育

- 2015年度 龍谷大学（文学部・非常勤講師）。
- 2015年度 早稲田大学（大学院アジア太平洋研究科・博士論文副指導教員）。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015年度 マハーチュラーロンコーン仏教大学仏教研究所（タイ）紀要編集委員。
- 2015年度 雲南民族大学民族文化学院（中国）名誉客座教授。
- 2015年度 大同生命地域研究賞推薦委員。

高次情報処理研究部門 准教授

柳澤 雅之 (やなぎさわ まさゆき)

①専門分野

農業生態学、ベトナム地域研究、東南アジア生態史

②経歴

- 1999年 京都大学東南アジア研究センター（現東南アジア研究所）助手
- 2006年 同助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
- 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) ベトナム紅河デルタ村落研究
- (2) 東南アジアの土地利用変化に関する研究
- (3) 東南アジア生態史研究

④主要業績

- 2016「地域情報学の読み解き：発見のツールとして

の時空間表示とテキスト分析」『地域研究』16巻2号、pp.267-291（高田百合奈・山田太造と共著）。

- 2012「自然科学分野の地域研究：地域情報の限定性を克服するために」『地域研究』12巻2号、pp.116-130。
- 2009「東南アジア生態史」東南アジア学会監修・東南アジア史学会40周年記念事業委員会編集『東南アジア史研究の展開』山川出版社、pp.156-171。
- 2006 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所編『京大式フィールドワーク入門』NTT出版。
- 2004 “Development Process of Cash Crops in the Northern Mountains Region of Vietnam: A Case Study in Moc Chau District of Son la Province, Vietnam,” in Hisao Furukawa, et al., eds., *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigm*, Kyoto University Press, pp.467-479.

⑤出版業績

[編書・共編書]

- 2016『衝突と変奏のジャスティス』（相関地域研究3）青弓社（谷川竜一・原正一郎・林行夫と共編）。
- 2016『せめぎあう眼差し：相関する地域を読み解く』（CIAS Discussion Paper No.56）京都大学地域研究統合情報センター（福田宏と共編）。
- 2016『JCAS公開シンポジウム報告書 境界・境域への挑戦と「地域」』（JCAS Collaboration Series No.13）地域研究コンソーシアム（黒木英充・塩谷昌史と共編）。

[レフリー付雑誌論文]

- 2016「地域情報学の読み解き：発見のツールとして時空間表示とテキスト分析」『地域研究』16巻2号、pp.267-291（高田百合奈・山田太造と共著）。

⑥情報共有化の業績

- 2016「フィールド・アーカイブ（高谷好一フィールドノート・データベース）」の公開。<http://fieldnote.mapping.jp/>

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2016.3.25「誤差か、発見の糸口か？：情報学的分析結果を学際的に評価する」、京都大学地域研究統合情報センター、東京大学空間情報科学研究センター、東京大学史料編纂所大会議室（亀田堯宙・

原正一郎と共同で主たる組織者)。

[参加報告]

- 2015.4.26 「地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦 Area Environments and Global Sustainability Challenges」 京都大学地域研究統合情報センター 2014年度共同利用・共同研究報告会、京都大学稲盛財団記念館 (Wil de Jongと共同で報告)。
- 2015.4.26 「CIAS所蔵資料の利用」 京都大学地域研究統合情報センター2014年度共同利用・共同研究報告会、京都大学稲盛財団記念館。
- 2015.6.20 “Forest Use by Multi-stakeholder and Changes in Local Livelihood System in Central Kalimantan, Indonesia” 日本熱帯生態学会年次大会、日本熱帯生態学会、京都大学。

[招待講演]

- 2015.6.23–24 “Frontier of Human-Nature Interaction: A Trial of a Logging Company Living with Local People in Central Kalimantan, Indonesia,” New Indonesian Frontiers: Resources, Contestation and Livelihood, Radbaoud University, Tanjungpura University, Pontianak, Indonesia.

[その他の役割]

- 2015.4.25 京都大学地域研究統合情報センター2014年度共同利用・共同研究ワークショップ「せめぎあう眼差し」、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館 (福田宏と共同で企画運営)。
- 2015.7.4 トヨタ財団研究発表会、トヨタ財団、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館 (はじめの挨拶、コメント、討論者)。
- 2015.7.7 第1回日伯文化環境研究会 1st Brazil-Japan Seminar on Cultural Environments、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館 (企画およびコメント)。
- 2015.12.6 東南アジア学会公開シンポジウム「フィールドに学ぶ東南アジア：体験学習から研究者・実務家養成まで」、東南アジア学会、東京 (司会および企画)。
- 2016.2.5 音楽データベース研究会、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館 (討論者)。

⑩海外調査活動

- 2015.6.14–18 ベトナムのハノイ国家大学にて日越大学開学準備を行った (JICA)。

- 2014.6.21–26 インドネシアのTanjungpura Universityで開催された国際ワークショップ“New Indonesian Frontiers: Resources, Contestation and Livelihood”にて招待講演を行った。
- 2014.12.22–26 ベトナムのハノイ国家大学において村落研究を行った (私費)。

⑪教育

- 2015年度 京都造形芸術大学集中講義、「世界単位論」担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1–2016.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員。

高次情報処理研究部門 助教

亀田 克宙 (かめだ あきひろ)

①専門分野

情報学

②経歴

- 2013年 情報・システム研究機構特任研究員
- 2014年 京都大学地域研究統合情報センター助教

③研究課題

- (1) 学術資料、論文からの情報抽出とその構造化
- (2) 研究におけるデータベースの利活用支援

④主要業績

- 2013 “Extraction of Semantic Relationships from Academic Papers Using Syntactic Patterns,” The Fifth International Conference on Information, Process, and Knowledge Management (coauthors: Kiyoko Uchiyama, Hideaki Takeda, Akiko Aizawa).
- 2013 “Integrate Japanese Red List into LOD of Species,” PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013 (coauthors: Fumihiro Kato, Utsugi Jinbo, Ikki Ohmukai, Hideaki Takeda).

⑤出版業績

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2015 「地域情報学のこれまでとこれから：地域研究統合情報センターの実践事例を通して」『情報知識

学会誌』25巻4号(特集 第20回情報知識学フォーラム「地域情報学における知識情報基盤の構築と活用」)、pp.325-332。

- 2016「千一問の質問における型」坪内祐司・山本博之編著『『カラム』の時代Ⅶ：コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』(CIAS Discussion Paper No.62) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.40-42。

[その他の刊行物]

- 2015「『巻頭言』博物館資料と情報」、『人文情報学月報』46号(人文情報学月報編集室)(<http://www.dhii.jp/DHM/dhm46-1>)。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2015.9.1-3 The Japanese Association for Digital Humanities 2015, The Japanese Association for Digital Humanities, Kyoto University, Japan (運営委員)。

[参加報告]

- 2015.4.26「学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化」、京都大学地域研究統合情報センター2014年度共同利用・共同研究報告会、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館。
- 2015.12.12「地域情報学のこれまでとこれから：地域研究統合情報センターの実践事例を通して」、第20回情報知識学フォーラム「地域情報学における知識情報基盤の構築と活用」、情報知識学会、同志社大学今出川キャンパス。

[その他の役割]

- 2015.9.17 Gaia Caramellino×谷川竜一ジョイント・セミナー2015、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学地域研究統合情報センターセミナー室(司会)。
- 2016.3.25「誤差か、発見の糸口か?：情報学的分析結果を学際的に評価する」、京都大学地域研究統合情報センター、東京大学空間情報科学研究センター、東京大学本郷キャンパス史料編纂所大会議室(司会)。

⑩教育

- 2013.10-2014.9 湘南工科大学コンピュータ応用学科「テキストマイニングやデータベース構築の実習」。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1-2016.3.31 人文科学とコンピュータ研究会幹事。
- 2015.8-2016.3 総合地球環境学研究所共同研究員。

白眉センター特定准教授

王柳蘭 (おうりゅうらん)

①専門分野

文化人類学、東アジア、東南アジア地域研究

②経歴

- 1994年3月 神戸女学院大学文学部英文学科卒業
- 1996年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了
- 1996年4月 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程進学
- 1997年~2000年 タイ国チェンマイ大学留学
- 2003年11月 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程退学
- 2003年12月 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手
- 2007年4月 同助教(~2009年)
- 2009年4月~2012年11月 日本学術振興会特別研究員 RPD
- 2013年4月 白眉センター特定准教授

③研究課題

中国系移民をめぐる越境、宗教、社会と多元的共生

④主要業績

- 2016『声を繋ぎ、掘り起こす：多声化社会の葛藤とメディア』(CIAS Discussion Paper No. 66)、京都大学地域研究統合情報センター(編著)。
- 2016「雲南系ムスリムディアスポラの境界維持と多元的結合」『境界研究』6巻、pp.53-80。
- 2016「食と宗教：北タイに生きる中国系ムスリム」谷川竜一ほか編『衝突と変奏のジャスティス』(相関地域研究3) 青弓社、pp.67-89。
- 2011『越境を生きる雲南系ムスリム：北タイにおける共生とネットワーク』昭和堂。
- 2010「越境と地域空間：マイクロ・リージョンをとらえる」『地域研究』10巻1号(特集企画代表)。

⑤出版業績

[編書・共編書]

- 2016 『アフロ・ブラジル文化のカポエイラ・アンゴラ』(CIAS Discussion Paper No. 64) 京都大学地域研究統合情報センター (アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ、荒川幸祐と共編)。
- 2016 『声を繋ぎ、掘り起こす：多声化社会の葛藤とメディア』(CIAS Discussion Paper No.66)、京都大学地域研究統合情報センター (編著)。

[レフリー付雑誌論文]

- 2016 「雲南系ムスリムディアスポラの境界維持と多元的結合」『境界研究』6号、pp.53-80。

[単行本の分担執筆]

- 2016 「食と宗教：北タイに生きる中国系ムスリム」谷川竜一・原正一郎・林行夫・柳澤雅之編『衝突と変奏のジャスティス』(関連地域研究3) 青弓社、pp.67-89。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2016 「小さき民の越境の歴史を発掘する：ビルマに住む雲南系ムスリムパンロン人のローカルヒストリーと民族間関係」王柳蘭編著『声を繋ぎ、掘り起こす：多声化社会の葛藤とメディア』(CIAS Discussion Paper No.66)、京都大学地域研究統合情報センター、pp.60-71。

⑦研究集会

[参加報告]

- 2015.5.30 『『脱難民化』へ向けた多元的共生：タイ・ミャンマー国境の華人、ムスリムの比較から多元的結合と下からの共生』(パネル企画「アジアにおける移民・難民の視点から」)、第49回日本文化人類学会、大阪国際交流センター。
- 2015.7.5 “Redefining Ethno-religious Identities and Searching for the Commonality among the Chinese Muslim Diaspora in the Thai/Myanmar Borderland,” in the Panel “Diaspora Reconsidered: Transnational Connectivity and Strategic Identification Among Southeast Chinese and Indian Communities,” The 9th International Convention of Asia Scholars, The 9th International Convention of Asia Scholars, Adelaide, Australia.
- 2015.10.17 「泰緬邊境的中国穆斯林移民于乡情」 in the Panel “Women’s Experiences in Chinese Diasporic Space in Southeast Asia,” The 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese

Overseas Studies, The 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies, アモイ、中国。

- 2016.1.25 「タイに生きる中国系ムスリムの葛藤とさまざまなイスラーム」、「邂逅の作用反作用：歴史・芸術・フィールドの視角から」、京都大学白眉センター、芝蘭会館。

[招待講演]

- 2015.10.23 「内側から見た華人社会：神戸のキリスト教をめぐる繋がりと場の理解に向けて」、同志社大学一神教学際研究センター公開講演会、同志社大学。
- 2016.1.23 「異文化からみた産後の養生」、「多様な文化を生きる：多文化社会の看護を考える」、近畿大学姫路大学看護学部、近畿大学姫路キャンパス。

⑩教育

- 2015年度 京都大学ポケットゼミ「変動するアジア太平洋を読み解く」。
- 2015年度 京都大学全学共通科目「現代人類学」。

⑫社会活動・センター外活動

- 2015.4.1-2016.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員。
- 2015.6.19 同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)の公開講演会「国際協力と宗教」、同志社大学チャペル、三木隆文元JICA職員へのコメント。
- 2015.10.23 同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)の公開講演会「内側から見た華人社会：神戸のキリスト教をめぐる繋がりと場の理解に向けて」、同志社大学チャペル。

特任教授/研究員(特別教育研究(一般))

柴山 守 (しばやま まもる)**①専門分野**

地域情報学

②経歴

- 1982年 京都大学東南アジア研究センター助手
- 1988年 大阪国際大学経営情報学部助教授
- 1993年 同教授
- 1996年 大阪市立大学学術情報総合センター教授

- 2003年 大阪市立大学大学院創造都市研究科教授
 2003年 京都大学東南アジア研究センター教授
 2004年 京都大学東南アジア研究所教授
 2012年 京都大学地域研究統合情報センター特任教授／研究員

③ 研究課題

- (1) 地域情報学の創出とHumanities GISに関する研究
- (2) 東南アジア上座仏教徒社会における寺院マッピングと僧侶の移動遍歴
- (3) 大陸部東南アジアの東西回廊とアジア文明に関する情報学的研究
- (4) ハノイ都市形成過程に関する情報学的研究

④ 主要業績

- 2012 『地域情報マッピングからみる東南アジア：陸域・海域アジアを越えて地域全体像を解明する研究モデル』 勉誠出版。
- 2010 「時空間概念に基づく地域・歴史事象の写像と知識獲得：地域情報学の視点から見る歴史知識学」『人工知能学会誌』25巻1号、pp.42-49。
- 2009 『地域研究のためのGIS』 古今書院（水島司と共編著）。
- 2009 「地域情報学：地域研究と情報学の新たな地平 序論」『東南アジア研究』46巻4号、pp.481-491。
- 1990 *The Computer Concordance to the Law of the Three Seals*, Thailand: Amarin Publications (coauthor: Yoneo Ishii, Aroonrut Wichenkeo).

⑤ 出版業績

[レフリー付雑誌論文]

- 2015 “Medieval East-West Corridor in Mainland Southeast Asia,” *Advancing Southeast Asian Archaeology* 2013, pp.423-431。

⑥ 情報共有化の業績

[ソフトウェア、システム開発]

- 2015 “Archaeo-Ontology,” タイにおける先史時代から現在に至る遺跡・遺物データをオントロジー化した。[データベース作成のための資料収集・整理活動など]
- 2015 「東南アジア考古遺跡情報」、タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスの先史時代から18世紀に至る考古遺跡データ約15,000件をオントロジー化した。

⑦ 研究集会

[参加報告]

- 2015.7.7 “A Preliminary Report on Survey of Kiln Sites, Mon State,” *Eurasea* 15, パリ。
- 2015.11.13 “East-West Cultural Corridor in Mainland Southeast Asia,” IWASTCS 2015, バンコク。
- 2015.11.13 “Creating Archaeo-Ontology Based on the Inventory of Monuments,” IWASTCS 2015, バンコク。

⑧ 受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[新聞・テレビ・ネット]

- 2015.10.17 「アジア巨大遺跡第一集 密林に消えた謎の大都市：カンボジア・アンコール遺跡郡」NHK（番組名「NHKスペシャル」）。タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスの先史時代から18世紀に至る約1万5千箇所の考古遺跡情報を時代、位置と特徴をコンピュータ（GIS）にて分析し、特にアンコール王朝の統治・宗教・文化の影響を明らかにした。

⑩ 海外調査活動

- 2014.5- タイ国京都大学ASEAN拠点員、Medieval East-West Cultural Corridor in Mainland Southeast Asiaをテーマに調査を実施。

⑫ 社会活動・センター外活動

- 2005.5.1- 公益財団法人アジア研究協会評議員。
- 2006.4.1- 文化遺産国際協力コンソーシアム・東南アジア部会委員。
- 2008.7.1- 日本学術会議第21期～第23期連携会員。

特任助教

山田 協太 (やまだ きょうた)

① 専門分野

南アジアの地域居住環境形成史、地域居住環境デザイン

② 経歴

- 2005年 鳥取環境大学環境情報学部環境デザイン学科（助手→助教→講師）
- 2009年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教
- 2015年 京都大学地域研究統合情報センター特任助

③研究課題

- (1) コロンボ（スリランカ）の下町における地域居住環境デザイン
- (2) 近代仏教建築の成立とアジアの都市景観／環ベンガル湾の人の移動と居住環境形成
- (3) 居住環境形成の地球史

④主要業績

- 2014『居住環境類型からメガシティのグローバルな連環と動態を捉える』総合地球環境学研究所・メガ都市プロジェクト（深見奈緒子、内山雄太と編著）。
- 2013「近代仏教建築の形成とアジア／亜細亜の形成・離散 その1：コロンボ（スリランカ）の近代仏教建築」『平成25年度日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画）』、pp.433-434。
- 2012 “Dynamisms in the Hub City of Colombo and the Urban Networks around the Bay of Bengal from the Viewpoint of Daily Activities: The Locations of Religious Architecture from the 17th Century,” Naoko Fukami, ed., *Islam and Multiculturalism: Between Norms and Forms* (Organization for Islamic Area Studies, Waseda University), pp.79-101.
- 2005「第IV章3 オランダ植民都市の転成 3-3 コーチン」布野修司編著『近代世界システムと植民都市』京都大学学術出版会、pp.464-482。

⑤出版業績

[編書・共編書]

- 2016『南アジアの都市と建築に見るイスラームの諸相』（NIHU Research Series of South Asia and Islam 9）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター（深見奈緒子と共編）。

[レフリー付雑誌論文]

- 2016「近代仏教建築の東アジア：南アジア往還」『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』（アジア遊学 196）、勉誠出版、pp.87-105。

[単行本の分担執筆]

- 2016「コロンボ（スリランカ）下町での地域学習施設開設プロジェクト：日常のデザイン行為から地域居住環境を考える」谷川竜一・原正一郎・林行夫・柳澤雅之編著『衝突と変奏のジャスティス』（関連地域研究3）青弓社、pp.186-211。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2016「フラグメンテーションと出会いのインド洋：ナゴール・ダルガーをめぐる考察」（NIHU Research Series of South Asia and Islam 9）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター、pp.67-85。

[シンポジウム・ワークショップなどの発表原稿（レフリー付でないもの）]

- 2015「近代仏教建築から見る南アジア：東アジアの交流と都市景観形成」『シンポジウム「近代建築史の最先端」第11回論文集 東アジア近代建築史研究の回顧と展望：「東アジアの近代建築」から30年』東京、pp.29-30。

⑥情報共有化の業績

- 2015 デリー（インド）に残存する中世イスラーム遺跡の目録作成、およびホームページでの公開準備。

⑦研究集会

[参加報告]

- 2005.11.29「近代仏教建築から見る南アジア：東アジアの交流と都市景観形成」、シンポジウム「近代建築史の最先端」第11回「東アジア近代建築史研究の回顧と展望：『東アジアの近代建築』から30年」、日本建築学会歴史・意匠委員会近代建築史小委員会、東京。
- 2016.3.12 “Modern Buddhism Architecture in Japan and its Linkage to Contemporary Asian Buddhism Movement: Indian Ocean Network and Kyoto,” Buddhism and Contemporary Living Environment over Asia, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University.

⑩海外調査活動

- 2015.8.6-9.16 ミャンマー、タイ、スリランカ、インドのモラトゥワ大学、Indian National Trust for Art and Cultural Heritageにて「近代仏教建築と都市景観形成」「デリーの中世イスラーム遺跡」について調査を行った（科研費、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター共同研究研究経費）。

⑪教育

- 2015.9 京都市まちづくりセンター「景観・まちづくり大学 京のまちづくり史セミナー」講師、「近代仏教と都市景観：アジアと京都のつながり」、京都市景観・

まちづくりセンター。

12 社会活動・センター活動

- 2015.12.10 Yahaya Ahmad氏受入（マレーシア・マラヤ大学、研究テーマ：重要伝統的建造物群保存に関わる法制度とその運用）。

研究員（科学研究）

Andrea Flores Urushima

（アンドレア・フロレス・ウルシマ）

1 専門分野

建築・都市計画史論、地域空間論

2 経歴

- 2000年 Laboratory of Metropolitan Urbanism FAUUSP
サンパウロ大学大都市計画研究所研究員
- 2001年 Architecture and Urbanism Office, ARBRE 建築と都市計画事務所建築家
- 2009年 京都大学地域研究統合情報センター研究員

3 研究課題

- (1) 日本の近現代都市計画史
- (2) 都市化を通じた人間環境空間の変化
- (3) 空間モデルの世界各地域への伝播

4 主要業績

- 2015 *Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogo Brasil-Japão*, São Paulo: Terracota (coeditors: Raquel Abi-Samara, Murilo J. da Costa).
- 2015 “Territorial Prospective Visions for Japan’s High Growth: The Role of Local urban Development,” *Nature and Culture* 1 (1), pp.12–35.
- 2014 “Unavoidable Modernization and the Image of Hell: Visual Planning in Mid-twentieth Century in Japan,” John Pendlebury, Erdem Erten, Peter Larkham, eds., *Alternative Visions of Postwar Reconstruction: Creating the Modern Townscape*, London: Routledge, pp.90–107.
- 2012 “Réévaluation des modes de vie rural et citadin face à la dégradation de l’environnement: un débat national au Japon, 1967-1972,” *Revue des Sciences Sociales* 47, pp.130–138.

- 2011 “A arquitetura moderna latino-americana pelo olhar Japonês,” *Desígnio - Revista de História da Arquitetura e do Urbanismo* 11 (12), pp.89–96.

5 出版業績

[編書・共編書]

- 2015 *Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogo Brasil-Japão*, Terracota Editora (coeditors: R. Abi-Samara, M.J. da Costa).

[編書・共編書]

- 2016 *Urban Modernization and Contemporary Culture: Dialogues Brazil-Japan* (CIAS Discussion Paper No.61), CIAS (coeditors: R. Abi-Samara, M.J. da Costa).
- 2016 *Capoeira Angola, an Afro-Brazilian Culture: The World Connected through Bodies that Dialogue* (CIAS Discussion Paper No.64), CIAS (coeditors: K. Arakawa, L. Wang-Kanda).

[レフリー付雑誌論文]

- 2015 “Territorial Prospective Visions for Japan’s High Growth: The Role of Local Urban Development,” *Nature and Culture* 1 (1), pp.212–235.

[単行本の分担執筆]

- 2015 “A celebração dos cem anos da Revolução Meiji (1968) e o início da disseminação do desenho urbano produzido no Japão em escala global,” A. Flores Urushima, R. Abi-Samara, M.J. da Costa, eds., *Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogo Brasil-Japão*, Terracota, pp.215–229.

7 研究集会

[企画・実施]

- 2015.6.25 Kitayama Sugi Survey 北山杉調査プロジェクト, CIAS Collaboration Project “Area Environments and Global Sustainability Challenges,” EFEO, Kyoto (Wil de Jongと共同でOrganization).
- 2015.7.8 Urban Modernization and Landscape Change Across Areas: Human-Nature Interaction with Rivers, Brazil-Japan Seminar on Cultural Environments/ CIAS Collaboration Project “Area Environments and Global Sustainability Challenges,” Kyoto (Wil de Jong, Masayuki Yanagisawaと共同でOrganizer/ Chairman).

[招待講演]

- 2015.6.13 「西山卯三と1970年日本万博博覧会：未来都市のコアモデル」、エコール・ド・東山、京都大

学大学院若き研究者グループ、ハイアット・リージェンシー京都。

- 2015.10. 4 “Proposals for Eliminating Regional Inequality in Japan’s Postwar Territorial Organization,” International Conference on “Inequality in a Rising Asia: Environment, History and Society,” Development Alternatives/ Toshiba International Foundation, Delhi.
- 2016.1.15 “Everyday and Innovation in the Making of Kyoto into a Cultural Heritage City,” IIAS-CSEAS Winter School “Mapping the Aesthetics of Urban Life in Asia,” IIAS-CSEAS/ Japan Foundation Asia Center, Kyoto.

[その他の役割]

- 2016.3.17 L’homme et les limites: géographie de la fragmentation de l’espace contemporain, Maison Franco Japonaise (Tokyo)/ Japarchi, Tokyo (Christophe Marquet/ Sylvie Brosseauと共同でDiscussante).

⑫社会活動・センター活動

- 2010.10.1–Present Member of Japarchi (Réseau Scientifique Thématique des Chercheurs Francophones sur l’Architecture et la Ville Japonaises).
- 2006.12.10–Present Member of the International Planning History Society IPHS.
- 2015.5.2–Present Member of the Collaborative Research Project “The Studies of Umwelten: The Lives and Lived Worlds of Human and Nonhuman Beings 環世界の人文学：生きもの・なりわい・わざ” at the Institute for Research in the Humanities, Kyoto University.
- 2012.7.1–2015.3.31 Member of the Women Researchers Network, Japan Consortium for Area Studies JCAS, Social Collaboration Section.

2 外部資金による研究活動

科学研究費補助金による研究

中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族「近代化」再考のための視座の構築

研究代表者 帯谷 知可

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2012年度～2015年度

●研究目的と内容

本研究は、旧ソ連中央アジアで、ソ連解体から20年以上を経た今再び「近代」とは何かが問われ、深刻な社会的混乱を招きかねない状況が生じていることを念頭に置きつつ、旧ソ連中央アジア、特に現在のウズベキスタンの領域を研究対象地域として、ソ連期に重点を置きながら、ソ連的=社会主義的「近代化」の過程におけるイスラーム、ジェンダー関係、家族関係の複合的な変容、そのための装置や内的論理の転換過程の多角的検討を通じて、ソ連型社会主義における中央アジアの「近代化」の特質を明らかにし、その上で、ソ連解体後の「近代」からの後退とも受け取れる状況を視野に入れながら、ソ連解体後の激動、市場経済化と民主化という課題、権威主義体制、伝統回帰、イスラーム復興などに揺れるこの地域の「近代化」を今なおアクチュアルな問題群としてとらえなおし、現在の中央アジアを見渡す視座を構築することを目的とした。

本研究は、海外共同研究者として同意を得ているB. ババジャノフ氏（ウズベキスタン、東洋学研究所）との国際共同研究として展開する。日本側では研究代表者、3名の研究協力者（いずれもウズベキスタンで調査を行った経験のある若手研究者）から成る研究グループを形成し、イスラーム・ジェンダー・家族に関連する「伝統」と「近代」をめぐって、ロシア帝政期ならびにソ連期の民族誌的記述と現代のフィールドワークの成果とを批判的に照合する作業を行った。ウズベキスタン側では文書館等資料研究とソ連時代を生きた人々へのインタビュー調査を有機的に結合させて、ソ連期に中央アジアに設置されイスラームを統括する役割を担ったムスリム宗務局の活動とそれに関わる人々の記憶について研究を進めた。それらを総合することによって中央アジアの「近代化」を現在の視点から考える分析枠組みを検討した。また、社会主義のもとでの「近代化」を表象する資料（出版物、プ

ロパガンダ・ポスター、映画DVDなど）を幅広く収集した。

研究のとりまとめとして、2015年12月26日（土）、京都大学において国際ワークショップを開催した。概要は以下の通り。

International Workshop

《Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society》

Moderator: KOMATSU Hisao

Opening remarks: OBIYA Chika

Presentations:

1. "The Politics of the Veil" in the Context of Uzbekistan (OBIYA Chika)
2. *Paradise at the Feet of Mothers and Women: SADUM in the Struggle for Emancipation of Muslim Women* (Bakhtiyar BABADJANOV)
3. Modern Uzbek Family: Marital Relations (Nodira AZIMOVA)
4. Women, Marriage and Market Economy in Rural Uzbekistan (SONO Fumoto)
5. "Jahri Zikr" by Women in Post-Soviet Uzbekistan: Survival of a Sufi Traditional Ritual through Soviet Policies and Its Future (WAZAKI Seika)

Comments: Bakhtiyar ISLAMOV / Shakhzoda KARI-MOVA / KIKUTA Haruka / MURAKAMI Kaoru

Closing Remarks: KOMATSU Hisao

また、この国際ワークショップの成果をまとめ、次の英文論文集を刊行した。

Obiya, C., ed, *Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society* (CIAS Discussion Paper No. 63), Kyoto: CIAS, 2016.

科学研究費補助金による研究

東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く

研究代表者 貴志 俊彦

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2013年度～2016年度

●研究目的と内容

東アジア域内では、歴史認識問題や領土問題を契

機として、相互イメージが悪化し、さまざまな面で緊張した局面が発生している。この種の政治的、社会的な対立が激化する一方で、各地では協調、融和的な社会を築こうとする意識が働きつつあることも忘れてはならない。本共同研究では、近100年間に東アジアで起こった歴史的な事件、あるいは時代の画期となるトピックをとりあげ、それぞれの局面で登場した非文字史料が果たした役割とその受容者の解釈を検討することを目的とする。具体的な方法としては、複数の地域で製作された非文字史料を比較対照するとともに、(a) 図像解釈学的分析、(b) 語彙分析による情報処理、(c) コミュニケーション・パターン分析等を導入して、紛争・協調の時代イメージと非文字史料との因果関係を明らかにする。

科学研究費補助金による研究

学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化

研究代表者 山本 博之

研究種目 挑戦的萌芽研究

研究期間 2013年度～2015年度

●研究目的と内容

地域研究の学術論文（地域誌）を、本文中で言及される地名等をもとに地図上に表示し、これにより地名から学術研究の動向（どのような研究が行われているか）や研究者情報（誰がどのような研究を行っているか）を検索できるようにし、特定地域に関する地域研究の知見の蓄積（＝「地域の知」）を統合的に可視化するシステムについて、対象地域をマレーシアに絞ってプロトタイプを開発する。細分化された分野ごとになされる傾向がある学術研究の蓄積を、地理情報を活用して研究対象地域ごとに分類することで、特定地域に関する情報の全体像を把握することを可能にする。これにより、研究者どうしでの研究成果の相互参照を助けるだけでなく、研究者以外で特定地域の情報を必要とする人々（たとえば報道、外交、行政、企業などの各分野の実務者）が地域研究の知見を活用しやすくなることが期待される。萌芽研究である本研究では、特定地域に関する情報が網羅的に収容されたデータベースの作成そのものを目的とするのではなく、情報技術にそれほど通じていない（ワード、エクセル、メール、ウェブ閲覧等ができる程度）の研究者でも比較的簡便な操作により自身の研究対象地域

に関する地域情報を収集・整理し共有できるような仕組みを作成・公開することを目標とする。

科学研究費補助金による研究

生活世界の変容とジェンダー

インド高齢女性のライフヒストリーを通して

研究代表者 押川 文子

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2013年度～2015年度

●研究目的と内容

2000年代に入って加速した経済成長のもとで、消費社会化などインド社会の変化に注目が集まっている。しかし衣食住や家族関係の変化など生活世界の変容を具体的に検証した研究は少ない。本研究は、経済発展の異なるプネ、デリー、ヴァラーナシー3都市と北部インドのUP州東部農村を取り上げ、1950年前後に生まれ70年代から80年代にかけて家族形成した女性を対象にライフヒストリーの詳細な記録を残すとともに、その分析を通じて生活世界の変化を地域の社会経済の変化の中に位置付けることを試みた。

成果としては

- ①2013年度～2015年度の3年間に、40件（高齢女性とその複数の家族成員へのインタビューを含むものも1件とカウント）のライフヒストリーを聴取し、インタビュー言語および英語による記録を蓄積した。個人情報に十分に配慮したうえで、今後資料としても活用可能な公開を準備している。
- ②地域的特性や経済状況、社会階層によって、過去30～40年間の生活世界の変化には大きな相違があることが確認された。例えば、1970年代には女性の高等教育がほぼ普及していたプネ中間上層の女性たちのその後の経済社会変動への対応、雇用の多様化や政治的発言力を高めた北部農村の中間カースト農民家族の家族関係変化、急激な都市化が進行したデリーにおける地方出身低所得層の家族の変化など、地域社会の変化と家族やジェンダーのかかわりについて具体的に検証することができた。
- ③同時に、全体にほぼ共通する点として、家族内ジェンダー・年齢規範の緩み、生計維持や地位上昇における家族の重要性、妻方親族や姉妹・女性の親族・女性友人など女性ネットワークの果たす役割など、これまで看過されがちだった変化もみ

られる。②および③については、2015年度に実施したワークショップをもとに、学術書の刊行にむけて検討している。

科学研究費補助金による研究

近代仏教建築の展開とアジア／亜細亜の形成・離散

研究代表者 山田 協太

研究種目 基盤研究 (C)

研究期間 2013年度～2015年度

●研究目的と内容

19世紀は、「近代」の担い手を自任して著しい空間的拡大を見たヨーロッパ世界に対して、各地でそれぞれのアイデンティティ構築が模索された時代である。本研究は、この局面をつうじて各地でキリスト教布教への対抗運動として生成し、南アジア、東南アジアから日本を含む東アジアまでを横断的に接合する思想的媒体へと成長した新たな仏教である、「近代仏教」に着目する。近代仏教は、概念としてのアジア／亜細亜を実体化する主要な実践の1つだった。近代仏教建築は、近代仏教の思想を物理的に体現した、寺院や教団施設に関わる建造物である。近代仏教建築は19～20世紀にさまざまな宗派により各地で建設された。各地の近代仏教建築の成立と相互の影響関係を跡付けて地域景観史を描くことで、各地域の位相と連環、国民国家成立後の展開を浮かび上がらせる。近代仏教の運動の展開する主要な拠点となった、コロンボ、コルカタ、ヤンゴン、バンコク、シンガポール、京都、東京の7都市を研究対象とする。

近代仏教建築とその歴史的展開の分析は、空間において生起する出来事や事象を、人、モノ、言葉の異種混交のネットワークとして捉える手法であるアクターネットワーク論を基礎とする。具体的には、(1)モノとしての近代仏教建築、(2)言葉を介して思想が交わされる場としての教団、仏教協会などの近代仏教組織の機関誌、(3)それらを構築、編成した僧や市民仏教家などの具体的人々の結びつきに着目し、その総体を近代仏教世界として捉える。

同時に、物理的環境と人の記憶や思考が融合した存在としての「景観」を焦点とする。

対象都市ごとに、(1)近代仏教建築の建設をつうじた都市景観の変容を跡付け、(2)そこから近代仏教建築の建設に伴う近代仏教世界と都市それぞれの動態

と相互の影響関係を読解し、(3)近代仏教世界と都市それぞれに影響を受けて近代仏教建築に新たな動態が生まれる循環的過程を跡付ける。

科学研究費補助金による研究

〈宗教＝社会複合マッピング〉からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容

研究代表者 林 行夫

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2014年度～2017年度

●研究目的と内容

大陸部東南アジアの上座仏教徒社会の宗教実践をめぐる地域間比較研究。2008～2010年度に実施した中国雲南省（西双版纳と徳宏）、タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマーでの9区画での悉皆調査で得たデータ、2012年度からのスリランカ、各地の補足調査で収集する資料を統合して比較分析するとともに、各地域社会に関わる法制度や文献資料と相関させて可視化することにより、地域社会と宗教実践の動態、その変容と持続のメカニズムを解明する。仏教寺院を主とする宗教施設、出家者や在家者の個人史と移動遍歴、聖地の立地や人のネットワーク等のデータを基礎資料としつつ、センサス、宗教法令、教育政策、地域史、生業経済の情報を統合した〈宗教＝社会複合マッピング〉を構築し、グローバルな社会変化のただ中にある実践の諸相を多面的かつ統一的に解析する。さらに、その手法をモデル化することで、宗教と文化の動態についての新たな地域間比較研究のパラダイムを創出する。なお、本研究は、同じ時期に異なる地域の上座仏教徒社会で臨地調査を行い、実践を軸にパリ仏教の現実を捉える実証研究としては、世界初のものとなる。2015年度は、旧年度中に集積したデータから移動を可視化するツールの制作と更新とともに、新たに実施したミャンマー、スリランカ（キャンディ）、タイの首都教学僧院での臨地調査で得たデータが加わり、宗教実践をめぐるより精緻な地域間比較ができることとなった。

科学研究費補助金による研究

インドネシアの災害後社会における生活再建と女性

研究代表者 西 芳実

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2014年度～2017年度

●研究目的と内容

本研究は、災害後社会の生活再建において女性がどのような課題に直面し、それをどのように克服してきたかを検討することを通じて、女性を社会の「脆弱性」と捉えるのではなく、むしろ社会の脆弱性を克服し、社会のレジリエンスを高めて災害や紛争に強い社会の再建に積極的な役割を担っている側面を明らかにする。そのため、2004年インド洋津波の救援・復興過程に関する研究の蓄積をもとに、現地調査により日常生活に組み込まれた災害対応の実践の抽出を試みる。

2年目にあたる2015年度は、2004年スマトラ島沖地震・津波の被災者証言データベースの整備と国際ワークショップの企画・実施を行った。また、本研究の成果を踏まえて、社会のレジリエンスを歴史的かつ地域横断的に比較・検討する研究書の刊行を行った。

- (1) アチェ州公文書館が編纂した『津波と彼らの物語』に収録されている津波生存者の証言111件について、2014年度に作成したデータベースをもとに、各証言を被災場所もしくは被災時の居住地をもとに地図上に表現する仕組みを作成した。また、バンダアチェ市以外の被災証言63件の日本語への翻訳を行った。
- (2) シネアドボ・ワークショップ「変身するインドネシア：力と技と夢の女戦士たち」を実施し、インドネシアの女性映像制作者が制作・監督した映像作品をもとに、現代インドネシアにおいて、混乱した社会秩序の再建や不公正・不正義状況の克服という課題に対して女性にどのような役割が期待されているかを検討した。このワークショップでの議論を踏まえて、CIAS Discussion Paper Series『たたかうヒロイン—混成アジア映画研究2015』を企画し、フィリピンの事例との比較を行った。
- (3) スマトラとジャワで現地調査を行うとともに、国際会議“International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia”に企画段階から参加し、口頭発

表を行ったほか、フィリピン、マレーシア、インドネシアで災害対応研究を行う女性研究者とのネットワークづくりを進めた。

科学研究費補助金による研究

20世紀北朝鮮の建築・都市通史の解明

研究代表者 谷川 竜一

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2014年度～2018年度

●研究目的と内容

本研究は、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の近現代建築意匠の変遷と主要都市空間変容の解明を通して、同国における20世紀の都市・建築の通史を描くものである。具体的には、1945年以前の当該地域において「近代化」が最も進んでいた都市である平壤、咸興、興南を対象都市とし、日本・ドイツ・ロシア・アメリカ・韓国などで戦後も含めた図像・文献資料調査を行いながら、研究を推進する。最終的には20世紀の北朝鮮建築・都市に関する通史を描くことを目的としている。

科学研究費補助金による研究

新自由主義改革後の中南米における社会紛争事例の総合的調査研究

研究代表者 村上 勇介

研究種目 挑戦的萌芽研究

研究期間 2014年度～2015年度

●研究目的と内容

本研究は、新自由主義改革後のラテンアメリカ（中南米）において増加する社会紛争の発生原因と展開過程を調査分析し、その終結や予防の方策ならびに実施過程について考察することをめざし、ラテンアメリカでも社会紛争の発生件数が多いペルーを対象に調査研究をおこなう。具体的には、(a) 数量的、質的双方の手法をもちいた、紛争の発生と展開過程の総合的な動態分析の実施、(b) その成果をふまえた、紛争の終結と予防のあり方ならびにその実施過程についての考察、(c) 他の中南米諸国との比較検討による、事例分析によってえられた知見の理論化の探究、とといったことを実施した。

科学研究費補助金による研究助成

「学校化」に向かう南アジア

研究代表者 押川 文子
助成種目 研究成果公開促進費
助成期間 2015年度

●研究目的と内容

近年急激に教育普及が進んでいる南アジアは現在、子どもたちが学校に通うことが当然とされ、学校教育が付与する学歴が個人の将来に大きく作用する時代、つまり「学校化」社会に向かう時期を迎えている。しかし同時に、多様かつ格差のある学校が共存し、教育を通じた格差・不平等の再生産や雇用とのミスマッチも顕著にみられる状況にある。したがって、「学校化」の全体像を捉えるためには、制度研究だけでなく、人類学や経済学などを含む学際的アプローチが不可欠である。本科研はこうした視点から、南アジア、とくにインド、バングラデシュ、パキスタンの南アジア3国を中心に、その制度的発展の特色、多種多様な学校の実態や雇用との関連など多面的なアプローチにより「学校化」の現在を捉える学術書の刊行を目的とした。

科研費・基盤研究 (B)「南アジアにおける教育発展と社会変容：『複線型教育システム』の可能性」(代表者：押川文子、2010～2012年度)、および地域研究統合情報センター共同研究「南アジアの教育における新自由主義：私事化、市場化、国際化の国際比較にむけて」(2012年度)、同「ポスト・グローバル化期の教育に関する国際比較」(2013年度)などの研究成果をもとに、あらたな論考も加えて、下記の図書を刊行した。

押川文子・南出和余共編著『「学校化」に向かう南アジア：教育と社会変容』昭和堂、2016年。

日本学術振興会による研究助成

アジアの防災コミュニティ形成のための研究者・実務者・情報の統合型ネットワーク拠点

研究代表者 山本 博之
助成種目 研究拠点形成事業 (Core to Core)
助成期間 2015年度～2019年度

●研究目的と内容

日本を含むアジア諸国は、地震・津波、台風・サイクロン、洪水・地崩れといった自然災害の多発地域で

ある。近年アジア諸国は経済成長が著しく、災害による国内の経済的損失のリスクの規模が拡大しているとともに、産業拠点が被災すると当該国のみならず海外にもその影響が大きくなっている。さらに、アジア域内で労働や教育のための国際移動が進み、従来のように各国内での国民を対象とする防災教育だけでは災害に十分に対応できなくなっている。日本は防災・減災分野の実践において、技術面でも、また行政や住民による自助・共助・公助の点でも優れた実績を有する防災先進国であるが、経済成長を遂げた先進国における防災実践は、人口移動などの社会的流動性が高い開発途上国や、高齢化が進んだ社会の災害対応においては十分に通用しなくなっている。これらの二つのタイプの社会に対する防災の課題を同時に解決するには、社会的流動性の高さを前提として、国境を越えてアジア地域全体での取り組みを可能にするアジア規模での防災コミュニティを作る必要がある。本研究課題は、社会的流動性の高さで知られる海域東南アジアの3か国（インドネシア、マレーシア、フィリピン）を対象に、各国の防災・減災実践に関する情報を整理すると同時に、これに日本とオーストラリアを含む5か国の間で防災・減災実践に関する情報を共有する国際的な人的ネットワークを構築する。海域東南アジア地域の文化・歴史・社会に通じた地域研究分野で豊富な実績を有するオーストラリアと日本の研究者が加わることにより、アジア規模での防災コミュニティを形成するための教育・研究基盤が形成されることが期待される。

京都大学による研究助成

近現代東アジア境界地域の人の移動と農業拓殖の比較史

サハリン島と台湾島を中心に

研究代表者 中山 大将
助成種目 京都大学若手研究者ステップアップ研究費
助成期間 2015年度

●研究目的と内容

本研究の目的は、近現代東アジア境界地域における人の移動と農業拓殖の比較史研究を行うための準備作業を行うことである。地域的にはサハリン島、台湾島を中心に、時期的には日本帝国期およびその直前直後を重点的に取扱い、境界地域における比較史研究を行い、境界地域間の普遍性と特殊性を明らかに

することを旨とした。

特に、代表者のこれまでの研究蓄積から、日本帝国期の農業試験研究機関の展開と冷戦期の残留日本人問題について集中的に調査を行った。日本帝国期の農業史研究機関については、国立台湾図書館、国史館台湾文献館、北海道大学附属図書館北方資料室などで関連資料の調査にあたった。この成果は、日本台湾学会第18回学術大会にて「亜熱帯植民地台湾と亜寒帯植民地樺太の農業試験研究機関：境界地域史の観点からの比較」として報告を行い、台湾史研究者等の意見を受けた。冷戦期の残留日本人問題については、台湾の中央研究院近代史档案館やサハリン北海道人会などでの文書調査のほか、サハリン州におけるインタビュー調査なども行った。今後、比較研究の成果公開の作業を行う。

3 受賞

科学研究費助成事業審査委員表彰

村上 勇介

科学研究費助成事業審査委員表彰は、独立行政法人日本学術振興会が同事業の適正な公平な配分審査のために、年度ごとに第2段審査（合議審査）に有意義な審査意見を付した第1段審査（書面審査）委員を選考し表彰する制度である。2015年度の表彰委員のひとりに村上勇介（地域研准教授）が2015年10月31日付で選ばれた。

日本農業史学会賞

中山 大将

日本農業史学会学会賞は、農業史に関する優れた研究業績を公刊した日本農業史学会の若手会員を表彰し研究の発展を奨励する制度である。2016年3月28日に秋田市民交流プラザにて行われた同学会総会にて、中山大将（地域研助教）と阿部希望（国立公文書館つくば分館非常勤職員）の同時受賞が報告された。なお、中山の受賞対象書籍は、『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』（京都大学学術出版会、2014年）である。

4 シンポジウム・ワークショップ・研究会等

上映・講演会

多色字幕による多言語映画の表現

日時

2015年4月13・15日

会場

シネマート六本木

趣旨・目的

京都大学地域研究統合情報センター・地域情報学プロジェクト「映像データベース」ならびに共同利用・共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」が共同で進めてきた多色字幕による多言語映画の表現の試みについて公開上映会ならびに講演会を行った。

プログラム (4月15日)

講師：山本博之 (京都大学地域研究統合情報センター)

ゲスト：シャリファ・アマニ (主演女優)

ン・チューセン (主演俳優)

石坂健治 (日本映画大学／東京国際映画祭プログラミング・ディレクター)

共同研究ワークショップ

せめぎあう眼差し：関連する地域を読み解く

日時

2015年4月25日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター

趣旨・目的

インターネットが爆発的に普及した現在では、世界を知ることはかつてなく容易になった。検索さえすれば、一瞬で大量の情報を得られる。だが、そこには様々な見方が含まれている。中には誤解や偏見に満ちた情報もあるだろう。私たちは、何でも知り、自由に発言できるようでいて、実際には、一面的な情報に依拠したり発信したりする度合いが増えているだけなのかもしれない。情報量の増大が、相互の理解ではなく対立を煽っているとすれば、それは大いなるパラドックスである。

とすれば、地域を理解し、社会を理解するとは一

体何だろうか。言うまでもないことだが、私たちは神の視点に立って他者を見ているわけではない。個人と個人の間であれば、両者は具体的な関係性の中でお互いを理解していく (或いは、理解したと認識する)。集団間においては、それが更に多層的となる。職場や学校、自治体などのレベルから、国家や宗教、ヨーロッパやアジアといった地域のレベルにおいても、人々は関係性の網の目の中で他者を理解する。

つまり、地域や社会を読み解くとは、厳密に言えば対象そのものを読み解くことではない。それは、関係性の網の目に囚われた自己と他者を意識しつつ、「私たち」と「彼ら／彼女ら」の眼差しを読み解く試みである。ただし、「私たち」と「彼ら／彼女ら」という区分そのものも、実際には相対的である。或る現象を単純に欧米とイスラムの対立と表現したとき、中間的立場の存在は捨象されてしまう。極端な場合、人々はどちらかの陣営につくことを迫られる危険性すらある。

本ワークショップでは、誰が何をどのように見ているのか、すなわち、眼差しがせめぎあう具体的な現場を題材にして、社会や経済、国際政治、文化の側面から、関連する地域を読み解くことを目的とした。当然のことながら、関係性の網の目は複雑であり、かつ動的である。ここでは、自己と他者の相対性に留意しつつ、世界の各地域へと迫った。

プログラム

はじめに 原正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター長)

趣旨説明 福田宏 (京都大学地域研究統合情報センター)

・「アメリカの核戦略と放射能汚染の『地球的思考』」樋口敏広 (京都大学白眉センター)

・「ドヴォジャークの『辺境』とチェコから見た『新世界』」福田宏

・「ゴリラから読み解くカメルーン：狩猟と農耕の相関性」大石高典 (総合地球環境学研究所)

・「ボリビアの豊富な資源と『国有化』をめぐるねじれ」岡田勇 (名古屋大学大学院国際開発研究科)

コメントおよび総合討論

コメンテータ：栗本英世 (大阪大学大学院人間科学研究科)、村上薫 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

おわりに 貴志俊彦 (京都大学地域研究統合情報センター副センター長)

ジョイント・ワークショップ

ポール・バークレー×中山大将 ジョイント・ワークショップ2015

日時

2015年5月28日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター

プログラム

- 挨拶 原正一郎（京都大学地域研究統合情報センター長）
- “Picture Postcards as Historical Evidence: Comparisons and Connections in Taiwan, Karafuto and Korea under Japanese Rule, 1900–1945”（歴史資料としての絵葉書：日本統治下の台湾・樺太・韓国の比較研究および共通点をめぐって） Paul Barclay（Lafayette College, USA）
 - 「帝国／植民地史研究から境界地域史研究へ：サハリン島史研究から再考する東アジア近現代史」中山大将（京都大学地域研究統合情報センター）

セミナー／研究会

現代コロンビアに関するセミナー／研究会

日時

2015年6月1日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合同共同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」

趣旨・目的

コロンビア・ロスアンデス大学で教鞭をとる政治学者カルロ・ナシ博士を囲んで、「内戦をめぐる和平過程の動向」をテーマに現代コロンビアに関するセミナー／研究会を開催した。

プログラム

“El proceso de paz con las FARC en Colombia” Dr. Carlo Nasi（Universidad de Los Andes, Colombia）

シンポジウム

ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題

日時

2015年6月22日

会場

上智大学中央図書館

主催

上智大学イベロアメリカ研究所、京都大学地域研究統合情報センター

後援

ラテンアメリカ協会

趣旨・目的

過去30年間、ラテンアメリカ諸国は、国家社会関係のあり方について模索を続けている。1970年代までの約半世紀は、輸入代替工業化を中心とする国家主導の経済開発に代表される「国家中心モデル」が支配的であった。同モデルは1970年代までに破綻し、1980年代からは、グローバル化の進展を背景にネオリベラリズムへの転換が図られ、国家の役割を縮小させる「市場中心モデル」が基調となった。しかし、「市場中心モデル」のもとでは、マクロ経済レベルの安定と発展は可能となったものの、歴史的、構造的にラテンアメリカ諸国が抱えてきた格差や貧困を克服するまでには至らなかった。そのため、1990年代末以降、ネオリベラリズムの見直しを求める勢力が台頭し、多くの国で政権を握る「左傾化」現象が観察されてきた。ネオリベラリズムが支配的であった時期は過ぎたという意味で、現在のラテンアメリカはポストネオリベラリズム期にある。

ポストネオリベラリズム期のラテンアメリカは、現在までのところ、全体として一定の支配的な方向に向かいつつあるというよりは、まだら模様の状態であるといえる。ネオリベラリズムに関しては、ネオリベラリズムを堅持している国が存在する一方、「国家中心モデル」への回帰を志向する場合（「急進左派」）や、市場原理の原則は維持しつつも社会政策などで国家の役割を強める場合（「穏健左派」ないし中道左派）がある。他方、ネオリベラリズム改革からポストネオリベラリズムへの展開過程において、様々な矛盾を抱えつつも政党政治が安定的なあるいは安定化した国もあれば、社会紛争を克服し調和を実現する糸口が見いだせず不安定な状態にある国もある。

本シンポジウムは、ラテンアメリカにおけるネオリベラル改革後の政治展開において、政党政治が安定的な事例と不安定なケースの相違に焦点を合わせ、それぞれについて、いくつかの代表的な国を取りあげ、近年の政治動向ならびに現状を分析するとともに、今後の展望を描いた。安定的ないし安定化した例として、ブラジル、メキシコ、チリ、不安定な国としてコロンビア、ベネズエラ、ペルーをみた。

(参考文献：村上勇介編『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』(地域研究のフロンティア5、京都大学学術出版会、2015年)

プログラム

開会の挨拶 幡谷則子 (上智大学イベロアメリカ研究所長)
原正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター長)

趣旨説明「今世紀のラテンアメリカ政治：ネオリベラリズム期以降の政党政治を中心に」村上勇介 (京都大学地域研究統合情報センター)

第1部 安定的な政党政治とその課題

- ・「近年のブラジル政治における二大政党化への収斂と『幸運な自由化』の反転」舛方周一郎 (神田外語大学外国語学部)
- ・「三大政党制の融解?：近年のメキシコ政治にみるPRDの危機と左派再編の可能性」馬場香織 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- ・「形骸化の進むチリの民主主義：硬直した政党政治と投票率の低下」安井伸 (慶應義塾大学商学部)

第2部 格差や紛争に直面する民主主義

- ・「ポストネオリベラリズム期のコロンビアにおける政治の不安定化：国内紛争と和平プロセスの視点から」千代勇一 (上智大学イベロアメリカ研究所)
- ・「チャベスなきチャベスモ：権威主義化を強めるベネズエラ・マドゥロ政権」坂口安紀 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- ・「小党分裂化するペルー政治」村上勇介

コメント・討論

コメント 岡本正明 (京都大学東南アジア研究所)
幡谷則子

閉会の挨拶 村上勇介

緊急研究集会

東南アジアの移民・難民に関する緊急研究集会

日時

2015年7月19日

会場

東京大学山上会館大会議室

主催

地域研究コンソーシアム (学会連携プログラム)

京都大学地域研究統合情報センター

東南アジア学会

日本マレーシア学会

東京大学グローバル地域研究機構持続的平和研究センターCDR

趣旨・目的

2015年4月以降、ロヒンギャ難民の受け入れをめぐるマレーシア、タイ、インドネシアの対応が話題になっている。東南アジアの新たなポートピアブルとして国際的な注目を集めるなかで地域の複数の国が共通の課題として取り組まざるを得なくなっており、東南アジア諸国の知恵が問われている。

本研究集会では、このような地域横断的な課題への人々の対応について検討するために、関係する国々を専門とする地域研究者が集まり、難民・移民の受け入れ状況や各国の対応についての情報を共有した。また、この地域がもともと出身地・宗教・言語の異なる人たちを絶えず受け入れながら社会づくりを進めてきた歴史的経験を持っていることを踏まえて、インド洋東部から東南アジア海域部にかけての地域の社会のあり方や人の移動について、特に東南アジア諸国におけるイスラム系の移民・難民の受け入れについて地域研究の立場から検討し、堅実な議論をしていくための情報共有と論点の整理を行った。

プログラム

趣旨説明 西芳実 (京都大学地域研究統合情報センター)

第1部

- ・「越境的課題としての人の移動：タイにおける非正規移民に関する制度とその歴史的背景」青木 (岡部) まき (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- ・「ミャンマーからのマレーシアへの人口移動とその就業」水野敦子 (九州大学)
- ・「越境者受け入れ地域としてのマレーシア：歴史的経緯と今日の世論」篠崎香織 (北九州市立大学)

第2部

- ・「土着性をめぐる包摂と排除：ミャンマーの国民概念を考える」長田紀之 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- ・「バングラデシュから見たロヒンギャ問題：人の移動の文脈から考える」高田峰夫 (広島修道大学)
- ・「大量難民の発生要因と国際社会の対応：ベトナム難民の事例から」古屋博子 (Gallup)

総合討論

コメント 佐藤安信 (東京大学)、弘末雅士 (立教大学)

Media Cultures of Wartime and Postwar East Asia

日時

2015年9月15日

会場

Georgetown University, Intercultural Center (ICC)

主催

The Asian Studies Program, Georgetown University
The Japan Society for the Promotion of Science (JSPS)
CIAS Joint Usage / Research Center, Kyoto University

プログラム

Chair: Jordan SAND, Georgetown University

- "Reading the Record of a Hundred Years of Intra-East Asian Conflict and Cooperation through Research in Audio-Visual Materials" Toshihiko KISHI (貴志俊彦), Kyoto University
- "USCAR-Produced Films and Okinawa under US Occupation" Risa NAKAYAMA (名嘉山リサ), National Institute of Technology, Okinawa College
- "Wartime American Research on Colonial Geographies of Japan" Hidekazu SENSUI (泉水英計), Kanagawa University
- "Visualizing the Mudan Incident (牡丹社事件): Transformations in Monuments, Memorial Statues and Photography from 1874 to 2015" Paul BARCLAY, Lafayette College

Comments Jordan SAND

Discussion

ジョイント・セミナー

Gaia Caramellino×谷川竜一 ジョイント・セミナー2015

日時

2015年9月17日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター

プログラム

- 挨拶 原正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター長)
- "Shaping the Middle Class City: A Comparative Study on Ordinary Residential Architecture, 1950s-1970s" Gaia Caramellino (Politecnico di Torino, Italy)
 - 「近現代建築史からみた日本による20世紀アジア開発とその連鎖」谷川竜一 (京都大学地域研究統合情報センター)
- 司会: 亀田堯宙 (京都大学地域研究統合情報センター)
コメンテーター: 林憲吾 (総合地球環境学研究所、京都大学東南アジア研究所)

変身するインドネシア：力と技と夢の女戦士たち

日時

2015年9月20日

会場

キャナルシティ博多ビジネスセンタービル

主催

マレーシア映画文化研究会
混成アジア映画研究会

共催

アジアフォーカス・福岡国際映画祭

国際交流基金アジアセンター

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「危機からの社会再生における情報源としての映像作品」
科研費・基盤研究 (B) 「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」

趣旨・目的

インドネシアでスハルト体制が崩壊してから17年。強い指導者のもとで豊かさや安定を求める体制が否定されたことは、経済危機、国家分裂、紛争、災害、テロとの戦いといった様々な試練に人びとが直接さらされるようになったことも意味していた。そのようなインドネシアで『シェリナの冒険』や『虹の戦士たち』といった夢と希望にあふれた映画を制作し、スハルト体制後のインドネシア映画界をけん引してきたマイルズ・フィルムズの最新作『黄金杖秘聞』は、スンバ島の独特の景観を舞台に伝統武術シラットが炸裂する武俠大作となった。

本ワークショップでは、アジアフォーカス・福岡国際映画祭で『黄金杖秘聞』をはじめとするインドネシア映画が一挙公開されるのにあわせて、マイルズ・フィルムズを代表するミラ・レスマナ氏とリリ・リザ氏、さらにインドネシアのポピュラー文化や芸能・音楽に詳しい小池誠氏と福岡まどか氏をパネリストとして迎え、『黄金杖秘聞』の魅力に迫るとともに、インドネシアでいま人びとが求めている強さや力、正しさとは何かを考えた。

※シネアドボとは、フィクション、ドキュメンタリーを問わず映像作品を通じて世界の課題を考え、よりよい社会づくりをめざすシネマ・アドボカシーの略称。

プログラム

開会挨拶 篠崎香織 (北九州市立大学)
パネルトーク 小池誠 (桃山学院大学)

福岡まどか（大阪大学）
ミラ・レスマナ（『黄金杖秘聞』『ビューティフル・デイズ』プロデューサー、『クルドサッカー』監督）
リリ・リザ（『黄金杖秘聞』プロデューサー、『クルドサッカー』『シェリナの大冒険』『虹の兵士たち』監督）

総合討論

司会：西芳実（京都大学地域研究統合情報センター）
通訳：亀山恵理子（奈良県立大学）

日本学術会議公開シンポジウム

亀裂の走る世界の中で：地域研究からの問い

日時

2015年10月3日

会場

早稲田大学大隈小講堂

主催

日本学術会議地域研究委員会地域研究基盤整備分科会・多文化共生分科会

早稲田大学イスラーム地域研究機構

共催

地域研究コンソーシアム（JCAS）

地域研究学会連絡協議会（JCASA）

京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）

NIHUプログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点（TIAS）

趣旨・目的

ここ数年、世界各地ではさまざまな「亀裂」や「断絶」が、暴力的な形で表面化している。このような「亀裂」は人種対立や「原理主義・過激主義」といった言葉で説明されたり、理解を越える異世界の問題として描かれたりすることが多い。しかし、問題の背景には人種・民族や宗教だけでなく、貧困と格差、包摂と排除、安全保障や利権対立に加え、歴史的経緯が複雑に絡み合っている。そのような問題意識から、本シンポジウムでは、中東、ヨーロッパ、アフリカ、米国、ラテンアメリカ、東南アジア、東アジア・日本を対象とする地域研究の専門家を招いてそれぞれの地域にみられる「亀裂」や「暴力」について語ってもらう。地域研究者の対話を通じて、地域間の対比や関連性を考えるとともに、「亀裂」の暴力化を防ぎ、緊張緩和を導く方策についても議論した。

プログラム

総合司会 桜井啓子（日本学術会議第一部連携会員、早稲

田大学）

第1部

- 趣旨説明 西崎文子（日本学術会議第一部会員、東京大学大学院総合文化研究科）
- 基調報告「イスラームからみた『亀裂』のあり方」内藤正典（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科）

第2部 パネルディスカッション「地域からの視点」

- 司会 貴志俊彦（日本学術会議第一部連携会員、京都大学地域研究統合情報センター）
- ヨーロッパ 宮島喬（日本学術会議第一部連携会員、お茶の水大学名誉教授）
 - アフリカ 武内進一（日本学術会議第一部連携会員、日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター長）
 - 米国 中條献（桜美林大学人文学系）
 - ラテンアメリカ 大串和雄（日本学術会議第一部連携会員、東京大学大学院法学政治学研究科）
 - 東南アジア 宮崎恒二（日本学術会議第一部会員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究科、副学長）
 - 東アジア・日本 外村大（東京大学大学院総合文化研究科）

総合討論

閉会の辞 小松久男（日本学術会議第一部会員、東京外国語大学大学院総合国際学研究院特任教授）

シンポジウム

BRICs諸国のいま：2010年代世界の位相

日時

2015年10月10日

会場

あすか会議室日本橋会議室

主催

京都大学地域研究統合情報センター

趣旨・目的

今世紀にはいり、世界の政治経済の全ての面でBRICs諸国は着実にその存在感を増してきた。中国経済のつまづきが世界経済を震撼させているように、いまやこれらの諸国の動きを視野にいれずに世界の未来を語ることはできない。

その一方で、2010年代になると、これら諸国の成長の背後にある課題も明らかになってきた。「21世紀の担い手」といった手放しの成長神話はいまや色あせている。BRICsを命名したエコノミストの「BRICsから、ロシアとブラジルが脱落するだろう」との見通しが象徴するようなBRICs諸国の中の成長力の違いだけでなく、急激な成長を支えてきたガバナンスのあり方や国内の格差などが顕在化し、経済成長に大きな影を落としている。トップを走り続ける中国ですら、「新常态」という表現で—世界のなかでは未だ高い水準ではあ

るものの—2000年代までの高成長期とは異なる局面にはいつていることを認めている。もはや、右肩上がりの順調な経済発展を中長期の前提とすることはできない。BRICs諸国の今後、そしてBRICs諸国がグローバルな政治経済変動の重要なアクターとなった世界の今後を考える上で、経済成長を政治社会の動きのなかに位置づけ、その現状と課題を分析することが必要である。

本シンポジウムは、BRICs各国の政治、経済、社会の現状をパノラミックに分析し、直面する課題を明らかにしたうえで、今後を展望した。BRICs諸国間、あるいはBRICsと先進国ないし他の発展途上諸国とのあいだの共通性や相違点を照射することで、2010年代世界の今日的位相を考察する足がかりとなることを期待した。

プログラム

趣旨説明「BRICsのいまを分析する意義」村上勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

- ・「経済成長下のインド社会と政治：『中間層』と民主主義」押川文子（京都大学名誉教授）
- ・「権威主義ロシアの『帝国』化の賭け：旧ソ連諸国統合・反米主義・対中接近」宇山智彦（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）
- ・「高度成長期後の中国の姿：開放をめざす経済政策と締め付ける政治」渡邊真理子（学習院大学経済学部）
- ・「混迷化するブラジルの政治社会と世界経済の政治的トリレンマ」舩方周一郎（神田外語大学外国語学部）

コメント 武内進一（日本貿易振興機構アジア経済研究所）
大津留智恵子（関西大学法学部）

討論

閉会の挨拶

JCAS年次集会一般公開シンポジウム

境界領域への挑戦と「地域」

日時

2015年11月1日

会場

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

主催

地域研究コンソーシアム

趣旨・目的

2014年、「イスラム国」は100年前に英仏が引いた国境線を抹消すると称してイラク・シリア間の国境検問所を爆破した。一方、内戦で分解に向かうシリア国内には何千というチェックポイントが築かれ、イラクではクルディスタン自治区が国家的領域の形成に向けて

歩を進めてきた。パレスチナにおいてイスラエルが占領地拡大のために建設してきた分離壁、ガザ地区を完全封鎖する軍事境界線は人の移動を徹底的に封じ込めようとする。スーダン新しい長大な国境線で南北に二分された。このように近年の中東地域を眺めると、国境が部分的に消滅したり、境界線が激増したりと、大きな変動が暴力を伴う形で起こっており、その暴力自体、グローバルな規模での様々なパワーが絡み合い、合成されて衝突した結果であるように見える。もちろん、これは中東に限った現象ではなく、黒海北岸地域やカシミールなどにも見られるし、日本においても沖縄を初め島嶼部にてその胎動が感じられる。また時間的スパンを長くとれば、同様の現象は世界各地で国民国家形成期に数多く見られたことであった。それでは、動的な境界地域に住む人々はこの動きに翻弄されるばかりなのだろうか。「境域」に生きる人々がしなやかに獲得してきた越境的空間・地域は新たな現実のなかでどのように立ち現れるのか。本シンポジウムでは、世界各地における事例研究を通じて、これらの問題を議論した。

プログラム

趣旨説明 黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

- ・「まっすぐな国境線：アラビアのロレンスとイスラム国」保坂修司（日本エネルギー経済研究所）
- ・「見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防：国家承認、エルサレム、和平分割案」錦田愛子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
- ・「ボーダーを堅牢化しない紛争：ウクライナほか環黒海地域の経験から」松里公孝（東京大学）
- ・「アフリカの国境は紛争の主因か？」武内進一（日本貿易振興機構アジア経済研究所）
- ・「ボーダーの形成と越境のダイナミクス：東南アジア海域世界の事例から」床呂郁哉（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

コメント 清谷典子（国際移住機関（IOM）駐日事務所）、
岩下明裕（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

シンポジウム

「近代建築史の最先端」第11回

東アジア近代建築史研究の回顧と展望：「東アジアの近代建築」から30年

日時

2015年11月29日

会場

建築会館

主催

日本建築学会建築歴史・意匠委員会近代建築史小委員会

後援

京都大学地域研究統合情報センター

名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター

金沢大学新学術創成研究機構

趣旨・目的

1985年開催のシンポジウム「東アジアの近代建築」(東京大学生産技術研究所村松貞次郎先生退官記念事業会主催)を契機とし、東アジア地域の近代建築史研究は、少数の研究者による個別研究から、組織的・国際的研究にシフトしていった。それから30年、都市・地域間の建築関係史や、各建築の意味が多角的に明らかになる中で、近代建築に対するひとつの理解や愛着も格段に深まった。本シンポジウムでは、東アジア近代建築研究の歩みを振り返りつつ、その現代的課題と可能性を議論した。

プログラム

司会 西津泰彦(名古屋大学/近代建築史小委員会前主査)
田所辰之助(日本大学/近代建築史小委員会幹事)

序 東アジア近代建築研究の回顧

- ・回顧1 黄俊銘(中原大学)
- ・回顧2 尹仁石(成均館大学)
- ・回顧3 西津泰彦
- ・回顧4 山形政昭(大阪芸術大学)
- ・回顧5 包慕萍(東京大学)

第1部 東アジア近代建築史研究の現在

- ・基調講演1 藤森照信(東京大学名誉教授)
- ・発表1 谷川竜一(金沢大学)
- ・発表2 白佐立(東京大学)
- ・発表3 砂本文彦(広島国際大学)
- ・発表4 水田丞(広島大学)
- ・発表5 陳零蓮(ウルフソン・カレッジ/ケンブリッジ大学)
- ・スライドショー 増田彰久作成「写真にみる東アジア近代建築」

第2部 世界の中の東アジア近代建築史研究

- ・基調講演2 村松伸(東京大学)
- ・発表6 角哲(北海道大学)
- ・発表7 林憲吾(総合地球環境学研究所)
- ・発表8 山田協太(京都大学)
- ・発表9 徐東千(韓国国立中央博物館)
- ・発表10 鮎川慧(京都大学)

意見交換 角哲、砂本文彦、谷川竜一、林憲吾、山田協太
まとめ 内田青蔵(神奈川大学/近代建築史小委員会元主査)

International Workshop

Toward Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia**日時**

2015年12月15-16日

会場

Inamori Building, Kyoto University

主催

JSPS Core to Core Program on Disaster Risk Management

プログラム

15 Dec.

Session 1 : Opening Session

Welcome Speech Prof. Dr. Shoichiro Hara, Director of Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

Opening Remarks Dr. Hiroyuki Yamamoto, CIAS, Kyoto University (Project Leader of JSPS Core to Core Program on Disaster Risk Management)

- ・ Keynote Speech "Interdisciplinary Approaches to Disasters Research at the Ateneo de Manila University" Prof. Dr. Filomeno Jr. V. Aguilar, former Dean of the School of Social Sciences, Ateneo de Manila University, Philippines

- ・ Keynote Speech "Building Knowledge Capacity in Disaster Management: A Post-tsunami Initiative at Syiah Kuala University, Banda Aceh, Indonesia" Dr. Khairul Munadi, Director of Tsunami and Disaster Mitigation Research Center, Syiah Kuala University, Indonesia

- ・ Keynote Speech "Human Element in Managing Disasters: A Malaysian Perspective" Dr. SH. Mohd Saifuddeen bin SH. Mohd Salleh & Dr. Mohd Farid bin Mohd Shahrhan, the Centre for Science and Environment Studies, Institute of Islamic Understanding Malaysia

Comment: Prof. Dr. Shimizu Hiromu, Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University

Panel 1

- ・ Speaker 1 "The Strategic Research Environment of Silliman University in Negros Island Region in Central Philippines" Prof. Dr. Enrique Oracion, Director, Research and Development Center, Department of Sociology and Anthropology, Silliman University

- ・ Speaker 2 "Preliminary Geophysical Investigation for Paleoseismological Studies of the Great Sumatran Fault along the Seulimuem Segment" Dr. Nazli Ismail, Research Coordinator for Secretary of Graduate Program in Disaster Science, Syiah Kuala University

- ・ Speaker 3 "Clean Water Supply to Flood Victim in Malaysia: An Overview" Ms. Habibah binti Abdul Wahid, Department of Fiqh and Usul, Academy of Islamic Studies, University of Malaya

Discussion

16 Dec.

Panel 2

- ・ Speaker 4 "Exacerbating and Mitigating Factors to Water-related Disaster in Negros Oriental, Central Philippines" Dr. Robert Guino-O, Biology Department, Silliman University

- Speaker 5 “Community-based Disaster Resilience in the Philippines: Its Strength and Weakness” Dr. Naomi Hosoda, Kagawa University
 - Speaker 6 “School-based Disaster Preparedness Program: Lesson Learned from Aceh Province, Indonesia” Mr. Ibnu Rusydy, Tsunami and Disaster Mitigation Research Center (TDMRC), Syiah Kuala University
 - Speaker 7 “Aid as Entry Activities in Post-disaster Societies: Two Experiences in Aceh, Indonesia and East Timor” Dr. Eriko Kameyama, Nara Prefectural University
 - Speaker 8 “Community Disaster Preparedness in Malaysia: An Overview”
- Discussion

研究協議会 華北交通写真第2回協議会

日時

2015年12月20日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター

プログラム

司会 貴志俊彦（京都大学）

全体報告

- 「JCII展覧会について」 白山真理（日本カメラ博物館）
- 「論文集・写真集について」 竹中朗（国書刊行会）

各論報告

- 「華北交通と占領地の鉱工業」 富澤芳亜（島根大学）
- 「華北交通株式会社による新規鉄道建設」 萩原充（釧路公立大学）
- 「北支占領地の学校教育が写真で記録されることの意味：『北支』と『華北交通写真』との比較を通して」 山本一生（東京大学）
- 「華北交通写真と民俗表象」 菊地暁（京都大学）
- 「華北交通写真にみる日中戦争期の史跡調査」 向井佑介（京都府立大学）
- 「中国共産党の華北イメージ：『晋察冀画報』を中心に」 梅村卓（明治学院大学）
- 「宣撫官と愛路運動」 太田出（広島大学）
- 「華北交通写真に見る戦前期観光業」 瀧下彩子（東洋文庫）
- 「華北交通写真データベース：仕様と実装」 西村陽子（花園大学）

選定写真の紹介

- 「写真集第1部：引き伸ばし写真（分類写真）について」 竹中朗、白山真理
- 「写真集第2部：軍報道課（部）検閲済印付写真について」 貴志俊彦

International Workshop

Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society

日時

2015年12月26日

会場

Inamori Center, Kyoto University

主催

Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

Research Unit “Socialist Modernization and Today's Society in Central Asia” (CIAS Joint Usage/Research Project)

KAKENHI Grant-in-aid Project “Islam, Gender and Family in Central Asia” (Kiban (B), 24310184)

趣旨・目的

This workshop focuses on Uzbekistan, one of the former Soviet Central Asian countries, where Soviet socialist modernization and Islam crossed over. After the collapse of the Soviet Union and independence of Central Asian countries, we have observed general difficulty of dialogue between those who had internalized Soviet secularism together with scientific atheism even now, and those who were influenced by Islamic revivalism and now try to live a better Muslim way of life. Such a situation may deepen serious social cleavages in the society in a new nation state.

In the early days of Sovietization, in 1920s, according to the Soviet ideology Islam and patriarchy in Central Asia were regarded as “bad tradition” to be liquidated for the construction of socialism. In this discourse, women became the subject of Soviet authority's interest. The existence of “liberated” (unveiled, educated, working, mothering children...) women became a symbol of a progressive socialistic Soviet nation (natsiia). But generally, as many academic works have proved already, Soviet policies could not change “traditional” gender and family norms deeply, and in turn, this “tradition” became a good thing, one of the most important pillar of the nation-building after the independence.

From such standpoints, the aim of this workshop is, firstly, to examine the ideals and realities of Soviet modernization regarding Islam and gender relations, and

secondly, to discuss what kind of influences Soviet modernization brought to today's Uzbek society, and finally, getting over emotional negative attitude toward Soviet regime, to try to find out a reasonable discussion ground for the question of Islam and gender for Uzbek society in contemporary local and global context.

プログラム

- Organizer: OBIYA Chika (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, Japan)
 Moderator: KOMATSU Hisao (Tokyo University of Foreign Studies, Japan)
 Speakers: Nodira AZIMOVA (Institute of History, Academy of Sciences, Uzbekistan)
 Bakhtiyar BABADJANOV (Center for the Study of Oriental Manuscripts, Uzbekistan)
 OBIYA Chika
 SONO Fumoto (National Museum of Ethnology, Japan)
 WAZAKI Seika (Chubu University, Japan)
 Commentators: Bakhtiyar ISLAMOV (Tashkent Branch of Russian University of Economics named after G. V. Plekhanov, Uzbekistan)
 Shakhzoda KARIMOVA (Sharkh va Tavsiya Sociology Center, Uzbekistan)
 KIKUTA Haruka (Center for Slavic-Eurasian Studies, Hokkaido University, Japan)
 MURAKAMI Kaoru (Institute of Developing Economies, Japan)

ワークショップ／研究会

現代アルゼンチンに関するワークショップ／研究会

日時

2016年1月23日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト

複合共同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」

個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争」「体制転換における軍と政党」

趣旨・目的

アルゼンチン・トルクアトディテラ大学で教鞭をとる政治学者エンリケ・ペルソティ (Enrique Peruzzotti) 氏を囲んで、「キルチネル政治の遺産とマクリ新政権の誕生の意味 (Del kirchnerismo al 'macrismo': legados,

continuidades y rupturas)」をテーマに現代アルゼンチンに関するセミナー／研究会を開催した。

Los resultados de la última elección pusieron un sorpresivo fin a la experiencia política del kirchnerismo, instaurando en el gobierno a una fuerza política novedosa, el PRO, organizada alrededor de la figura de Mauricio Macri. La novedad del triunfo no solamente radica en la derrota del actor que domino la escena política argentina desde 2003 sino también en que resulta en la llegada al gobierno de una fuerza política que es un producto orgánico del proceso democrático iniciado en 1983: por primera vez, la política argentina se encuentra en manos de un elenco gubernamental que no proviene fundamentalmente de las filas del radicalismo o del peronismo.

¿Que perspectivas abre para la política argentina y regional la llegada del PRO al poder? ¿Cuál es el legado que la larga década kirchnerismo le deja al nuevo gobierno? ¿Que continuidades y rupturas se pueden esperar con respecto a las políticas públicas que marcaron la experiencia kirchnerista? Estos son algunos de los interrogantes alrededor de los cuales se organizara la presentación.

プログラム

- “Del kirchnerismo al ‘macrismo’: legados, continuidades y rupturas” Enrique Peruzzotti

国際ワークショップ

東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ

2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ

日時

2016年2月3-4日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学大学院文学研究科

共催

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

京都大学大学院人間・環境学研究科

京都大学地域研究統合情報センター

趣旨・目的

本ワークショップは、京都エラスムス計画による本学若手研究者の南京大学派遣をきっかけとして、2011年度より始まった本学と南京大学の若手研究者交流のための国際ワークショップである。今回は、台湾大学、上海交通大学など海外からの参加校を増やしたほか、社会学、人類学に限らず文学、哲学、歴史学などの人文社会科学諸分野の若手も招いて開催した。今回は「学知と地域・国家・社会を考える」と題した討論会も試み、国籍、分野を越えた若手人文社会科学者間のさらなる交流が図られた。

プログラム

2月3日 個別報告会「境界から観える東アジア」

第1部 移動する人と境界

- ・「戦前における『中間層』の日本人女性の『越境』と『境界』」顔杏如（台湾大学）
- ・「郷土の境界：農村土地収用問題の比較から」蕭仕豪（南京大学）
- ・「地域住民が『共振者』になるとき：難民の受け入れがもたらしたもの」瀬戸徐映里奈（京都大学）

評者：巫観（京都大学）、坂梨健太（龍谷大学）、許燕華（京都大学）

第2部 小さな中心から観る東アジア

- ・「漢代西北辺境の研究：居延漢簡と京都大学」野口優（京都大学）
- ・「家族の離散とつながり：中国雲南省におけるラフ女性の遠隔地婚出」堀江未央（京都大学）
- ・「孤独なパフォーマー：ナシ族トンパ文化継承の研究」和川軍（南京大学）

評者：楊維公（京都大学）、柳建坤（南京大学）、郭まいか（京都大学）

第3部 思想・情報と境界

- ・「中国における日本道徳教育研究の現状と展望」林子博（上海交通大学）
- ・「東アジアにおける国家有機体説：明治期日本の国家観と北朝鮮の『社会政治的生命体』論との比較」姜海日（京都大学）
- ・「大規模災害における情報の境界線：阪神大震災・東日本大震災を事例に」矢内真理子（同志社大学）
- ・評者：テン・ヴェニアミン（京都大学）、江俊億（台湾大学）、羅太順（京都大学）

第4部 研究紹介と総合討論

- ・研究紹介：第2日目の提起者・討論者5名
- ・総合討論

2月4日 討論会「学知と地域・国家・社会を考える」

研究紹介：第1日目の評者9名

議題提起：中山大将（京都大学）

討論者：陳威璿（台湾中央研究院）、王楠（南京大学）、福谷彬（京都大学）、楊菁華（南京大学：原稿のみ）

全体討論

International Workshop

Toward Social History of Malay Muslims: Islamic Principles and Local Practices from the Perspective of Majalah Qalam (1951-1969)

日時

2016年2月22日

会場

Sanggar Za'ba, Level 1, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur, Malaysia

主催

CIAS Joint Research Project "Social History of Muslims in Southeast Asia during the 1950s and 60s"

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

Dewan Bahasa dan Pustaka Malaysia

Klasika Media

プログラム

- ・"Reform and Reaction: Transition of Qalam's Approaches over Matrimonial Issues" Dr. Ayumi Mitsunari (Religious Information Research Center, Japan)
- ・"Everyday Forms of Islamic Practices in Multi-ethnic Malaya" Dr. Yuji Tsuboi (Toyo Bunko (The Oriental Library), Japan)
- ・Q & A

国際ワークショップ

東亜学術論壇2016：交錯する東アジア像

日時

2016年2月23日

会場

石川県政記念しいのき迎賓館

主催

京都大学地域研究統合情報センター複合共同研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」

公益財団法人東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班

金沢大学新学術創成研究機構

科研費・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」

プログラム

司会：貴志俊彦（京都大学）

趣旨説明 貴志俊彦

第1部 研究構想報告

- ・「戦後日本における『新中国』音楽の伝播：台湾出身者と大陸帰還者の交錯」岡野翔太（大阪大学）
- ・「マイノリティから『本土宗教』へ：チベットの宗教の現

代中国における位置づけをめぐって」小西賢吾（金沢星陵大学）

- 「北朝鮮における発電所と都市の関係：赴戦江から水豊へ」谷川竜一（金沢大学）
- 「大正期における日本の対中宣伝政策とジャーナリズム」土屋礼子（早稲田大学）

ディスカッション1

第2部 研究準備報告

- 「Ceremonyとしての親子ラジオ譲渡式：琉球列島米国民政府（USCAR）写真資料を読み解く」大城由希江（神戸大学）
- 「日中戦争時期における日本の中国観光：華北交通写真をてがかりに」瀧下彩子（東洋文庫）
- 「現代中国の一带一路構想にみる『鄭和』言説の作られ方：南京とマラッカから見る」松本ますみ（室蘭工業大学）

ディスカッション2

第3部 研究成果報告

- 「日本占領下シンガポールで描かれた戦争：従軍漫画家による作品の検討」松岡昌和（東京芸術大学）
- 「中国：キリスト教徒に対する許容と排斥の境界」貴志俊彦

ディスカッション3

International Symposium

Illegal Timber of the Global East: A Dialogue between the Private Sector, Civil Society Organizations and Academia

日時

2016年2月29日

会場

Inamori Center, Kyoto University

趣旨・目的

On February 29, a group of people with interest in addressing illegal timber in Asian supply chains gathered at the Inamori Center, Kyoto University Kyoto Japan. The group represented the private sector, civil society organizations and academia. During the day six presentations were given on topics related to illegal timber in the region, and participants at the event discussed implications, especially for illegal timber policies in the regions consumer countries. The PowerPoint, this summary and comments on presentations can be viewed at: <http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/event/?p=426>.

プログラム

- “Introduction: Situating Asia in the Efforts for a Legal Global Forest Sector” Wil de Jong (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)
- “The EU Policy on Forest Law Enforcement Governance and

Trade (FLEGT) in the Asia-Pacific” Vincent van den Berk (EU FLEGT REDD Facilities)

- “Timber Legality In China: Practices & Perspectives” Jeff Cao
- “Illegal Logging in Eastern Russia and Implications for Wood Products Sourcing in China” David Gehl (Eurasia Programs Coordinator, Environmental Investigation Agency, U.S.)
- “Combating Illegal Logging and Enhancing Biodiversity in Japan’s Paper Industry” Kiyoshi Kamikawa (Japan Paper Association)
- “Korea’s Efforts for Regulating the Distribution of Illegally Logged Timber” Min, Kyung-Taek (Korea Rural Economic Institute)

Comment: Mari Momii

International Conference-Workshop

Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia

日時

2016年3月2-3日

会場

ノボテル・マニラ・アラネタセンター・ホテル（2日）
アテネオ・デ・マニラ大学（3日）

主催

日本学術振興会研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアの防災コミュニティ形成のための研究者・実務者・情報の統合型ネットワーク拠点」

アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所
京都大学地域研究統合情報センター

共催

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「アジア・アフリカの持続型生存基盤研究のためのグローバル研究プラットフォームの構築」
京都大学東南アジア研究所共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」「災害対応を通じた新しい公と私の創出：フィリピン台風災害を事例として」

プログラム

2 March 2016

Welcome Remarks

Dr. Fernando T. Aldaba (Dean, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

Dr. Marita C. Guevara (Director, Institute of Philippine Culture, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

- “On CIAS Kyoto University and its JSPS Core-to-Core Program on Disaster Risk Management” Dr. Hiroyuki Yamamoto (Center for Integrated Area Studies (CIAS),

Kyoto University; Visiting Research Associate, Institute of Philippine Culture, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

Overview of the Conference and Introduction of Keynote Speakers: Dr. Filomeno V. Aguilar Jr. (Department of History and Institute of Philippine Culture, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

Theme: Disasters, Floods, Resilience, and Management Approaches

- Keynote Address: “Ateneo de Manila University Multidisciplinary Typhoon and Flooding Disaster Research Program” Dr. Armando M. Guidote Jr. (Department of Chemistry, School of Science and Engineering, Ateneo de Manila University)

- Keynote Address: “Interrogating Risk and Resilience in Climate Disasters Research: Focus on Coastal Cities at Risk” Dr. Emma Porio (Department of Sociology and Anthropology, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

Comments: Dr. Enrique Oracion (Research and Development Center and Department of Sociology and Anthropology, Silliman University)

- “Toward a Holistic Approach to Effective Flood Disaster Risk Management in Malaysia” Dr. Sheikh Mohd Saifuddeen bin Sheikh Mohd Salle and Dr. Mohd Farid bin Mohd Shahrhan (Centre for Science and Environment Studies, Institute of Islamic Understanding Malaysia)

- “Lessons Learned from the 2013 Flooding of Bayawan City, Negros Oriental in Central Philippines” Dr. Robert S. Guino-o II (Center for Tropical Studies, Department of Biology, Silliman University)

- “Preparedness Plan for Floods: Lesson Learned from Malaysia’s East Coast Flood 2014” Dr. Nur Nafhatun binti Md. Shariff (Universiti Teknologi MARA)

- “Flood Management in Japan: From Levee Construction to Holistic Flood Management” Dr. Norio Maki (Kyoto University)

Theme: Culture, Knowledge, and Rationality in Disasters Research

- Keynote Address: “Developing Culturally Nuanced Mental Health and Psychosocial Support (MHPSS) Interventions: The Philippine Experience” Dr. Maria Regina Hechanova (Chair, Department of Psychology, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

Comments: TBC

- “Disaster, Faith-based NGOs, and Reconfiguration of ‘the Social’: A Case of the Flood-prone Community in Marikina City” Dr. Koki Seki (Hiroshima University)

- “Knowledge Management-based Approach for Disaster Risk Reduction: Perspective from Aceh, Indonesia” Dr. Khairul Munadi (Tsunami and Disaster Mitigation Research Center, Syiah Kuala University)

- “Disaster Preparedness among Students in Banda Aceh: A Decade after the 2004 Tsunami” Dr. Intan Dewi Kumala (Tsunami and Disaster Mitigation Research Center, Syiah Kuala University)

- “Discoursing Disaster” Dr. Agustin Martin Rodriguez (Department of Philosophy, School of Humanities, Ateneo de Manila University)

Theme: Disasters Management and Methodologies

- “Comparative Assessment of Methodologies and Tools for Interdisciplinary, Cross-sectoral and Participatory Disaster Risk Reduction Applicable to the Negros Island Region” Dr. Jorge Emmanuel (Silliman University)

- “Disaster Management Studies at CIAS, Kyoto University: ICT for Bridging Knowledge and Experiences” Dr. Yoshimi Nishi (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

Highlights of the Day’s Presentations

Dr. Khairul Munadi, Dr. Enrique Oracion, and Dr. Hiroyuki Yamamoto

3 March 2016

Theme: Disasters, Vulnerability, and Economic Analysis

- “Assessing Indirect Vulnerability to Climate Variability and Change Using a Supply Chain Framework: A Pilot Study of Metro Manila” Dr. C. Kendra Gotangco (*1), Ms. Abigail Favis (*1), Ms. Aileen Guzman (*1), Mr. Marion Tan (*2)

*1 Department of Environmental Science, School of Science and Engineering; *2 John Gokongwei School of Management, Ateneo de Manila University

- “Accounting the Damages of the 2012 Earthquake Using Total Economic Value (TEV) Approach: The Case of Negros Oriental, Philippines” Ms. Wilma M. Tejero (*1), Roy Olsen de Leon(*2), Mirabelle J. Engcoy(*3), Andrea G. Soluta(*4), Betty Jane Y. Martinez (*5), Silvestre S. Alforque (*6), Stella F. Lezama (*6), Tabitha E. Tinagan (*7) (*1 Department of Economics; *2 Biology Department and Institute of Environment and Marine Sciences; *3 Management Department; *4 Center for Gender and Development; *5 Accountancy Department; *6 Entrepreneurship Department; *7 School of Public Affairs and Governance, Silliman University)

Theme: Technical and Physical Infrastructures and Disasters

- “Seismicity Analysis in Northern Sulawesi” Dr. Nazli Ismail (Graduate Program in Disaster Science, Syiah Kuala University)

- “Analysis of Potential Man-Made Disasters in the Metro Manila Road Network” Dr. Kardi Teknomo and Mr. Jacob Chan (Department of Information Systems and Computer Science, School of Science and Engineering, Ateneo de Manila University)

- “Social Capital and Facebook Use of Tacloban City after Super Typhoon Haiyan” Ms. Arla E. Fontamillas (Development Studies Program, School of Social Sciences, Ateneo de Manila University)

Theme: Sustainable Development and Disasters

- “Mangrove Rehabilitation Effort in Carey Island, Malaysia” Mr. Ahmad Bakrin Sofawi bin Abu Bakar (University of Malaya)

- “Post-tsunami Disaster Recovery as Windows of Opportunity for Sustainable Development” Dr. Ella Melianda (Tsunami and Disaster Mitigation Research Center, Syiah Kuala University)

- “An Indigenous Forest Rehabilitation and Research Project from the Philippines for Biodiversity Inventory, Conservation and Sustainable Use” Dr. Hendrik Freitag (*1), Clister V. Pangantihon (*1), Princess Spica M. Cagande (*1), Jhoana M. Garces (*1), Anthony M. Baylon (*1), Dennis Renan L.

Valencia (*1), Arrel P. Pascual (*1), Joseph Gabriel Anthony E. Lim (*1), Rodel S. Sescar (*2) (*1 Department of Biology, School of Science and Engineering, Ateneo de Manila University, *2 Brgy. San Vicente Council, San Vicente, Roxas, Oriental Mindoro)

Highlights of the Day's Presentations

Dr. Sheikh Mohd Saifuddin bin Sheikh Mohd Salleh and Dr. Hiroyuki Yamamoto

Discussion

Closing Remarks

Dr. Marita C. Guevara and Dr. Hiroyuki Yamamoto

セミナー／研究会

現代グアテマラに関するセミナー／研究会

日時

2016年3月5日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター地域研究ハブ形成プロジェクト、複合共同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「ラテンアメリカにおける社会紛争：発生・終結プロセスの比較研究」

趣旨・目的

Instituto Nacional Democráticoのグアテマラ代表で政治学者のエドワルド・ヌニェス博士を囲んで最近のグアテマラ政治の動向をテーマとしたセミナー／研究会を開催した。

プログラム

- “Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas” Dr. Eduardo Nuñez (Instituto Nacional Democrático-Guatemala)

コメント：村上勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

シンポジウム

大阪アジア映画祭連携シンポジウム「“手に職系”女子とフォーエバー・ポギー」

日時

2016年3月11日

会場

国立国際美術館講堂

主催

京都大学地域研究統合情報センター

混成アジア映画研究会

大阪映像文化振興事業実行委員会（大阪アジア映画祭）

共催

国立国際美術館

趣旨・目的

フィリピン映画『ないでしょ、永遠』（#Walang Forever）からゲストを迎え、現代アジアにおける女子の自立やパートナー関係をめぐる課題を考えた。

プログラム

パネリスト：コンペティション部門『ないでしょ、永遠』（#Walang Forever）

ダン・ヴィリエガス（監督）（Director: Dan VILLEGAS）

アントワネット・ハダオネ（脚本）（Screenplay: Antoinette JADAONE）

ジェリコ・ロザレス（主演）（Cast: Jericho ROSALES）

モデレーター：山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）

International Symposium

Buddhism and Contemporary Living Environment over Asia

日時

2016年3月12日

会場

Inamori Building, Kyoto University

プログラム

Opening Remarks

- Presentation 1: “Modern Buddhism Architecture in Japan and its Linkage to Contemporary Asian Buddhism Movement: Indian Ocean Network and Kyoto” Kyota Yamada (Kyoto University)
- Presentation 2: “Buddhism and Daily Life, Contemporary Living Environment in Thailand” Nawit Ongsavangchai (Chiang Mai University)
- Presentation 3: “Myths, Beliefs and Transformation of Sri Lankan Buddhist Monastic Living Environments” Samitha Manawadu (University of Moratuwa)

General Discussion

シンポジウム

誤差か、発見の糸口か？：情報学的分析結果を学際的に評価する

日時

2016年3月25日

会場

東京大学史料編纂所

主催

京都大学地域研究統合情報センター複合共同研究ユニット「『地域の知』の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開」

共催

東京大学空間情報科学研究センター

趣旨・目的

時空間という切り口でデータを整理・分析する地域情報学や空間情報科学は、地域の知を情報として表現するにあたって大きな役割を担うことが期待される。これら学際的な性質を持った情報科学の実践においては、データの取得や分析の段階だけでなく、分析結果の評価にも分野を超えた協働が本来不可欠である。しかし、扱うデータ量が膨大なだけでなく、文書や非文字資料など、さまざまな種類のデータを扱うため、分析結果の妥当性について、分野を超えた評価が難しくなっている。

データ量が膨大なビッグデータの分析では、得られた結果の妥当性を個別に地域の専門家の目で判断することが難しいし、数学的处理に工夫を要する文書や非文字資料の分析結果の妥当性についても、複雑な処理を経た分析結果を他の分野の専門家が判断することは困難が伴う。

本研究会では、人文社会科学のデータや地理空間データを題材にして、分析結果が単に情報学の技術を適用しただけの結果なのではなく、得られた結果が当該分野における妥当性を持つためにどのような工夫がありうるのかについて議論した。

プログラム

開会の辞、趣旨説明

- 「人流データを用いた感染症数理モデルの、エラーに対する頑健性」藤原直哉（東京大学空間情報科学研究センター）
- 「明治8（1875）年の足柄県における種痘の普及：希少史料から歴史像・地域像・民衆像を提案する道程」川口洋（帝塚山大学）
- 「考古学現場における高精細計測の最新動向と景観復元の試み」早川裕式（東京大学空間情報科学研究センター）
- 「小地域統計による長期的な都市内部構造の変化の分析」桐村喬（東京大学空間情報科学研究センター）

• 「地域情報学の読み解き：発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析」柳澤雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

コメント 原正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）、小口高（東京大学空間情報科学研究センター）

パネルディスカッション

閉会の辞

司会：亀田堯宙（京都大学地域研究統合情報センター）

III. 国際交流

- 1. 国外客員教員招へいプログラム
- 2. 学術交流協定
- 3. 国際ハブ形成



CENTER FOR INTEGRATED AREA STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

地域研究統合情報センター（地域研）は、地域研究の分野において国際的交流のセンターとしての役割を果たすため、国内のみならず、国際的な研究協力と交流を幅広くまた活発に実施している。近年では、地域研究に関する史資料の現地との共有化の要請が高まっており、この分野での交流や協力も期待されている。このような交流や協力を実現するためには、地域研の目的や関心を共有する世界各地の研究機関ならびに個々の研究者との間に地域研のスタッフが持つネットワークを制度化していくことが特に重要である。

こうした制度化の試みは、具体的には、学術交流協定の締結、国際共同研究の実施、成果公開のための国際研究集会の組織などによって進められている。並行して、国外客員教員招へいプログラム（CIAS International Visiting Scholars Program, CIAS IVSP）を定め、これによって国外客員教員の招へいが行われている。さらに、2009年度から、地域研究の国内外の結節点としての機能を強化する目的で国際ハブ形成の事業を始動した。

1 国外客員教員招へいプログラム

地域研究の分野での国際的研究交流の活性化を目的に、国外客員教員を招へいするための制度として、2008年度より国外客員招へいプログラムが開始された。このプログラムに従って、公募または推薦によって毎年1~2名程度の外国人研究者を選考し、3~6ヶ月の間、地域研に招いて研究を行う機会を提供している。

2015年度は国外客員教員としてGaia Caramellino氏

（トリノ工科大学上級研究員）を招へいた。同氏は2015年8月1日から10月31日まで滞在し、「中規模都市の形成：1950~70年代中間層向け一般的住宅建築の比較研究」について研究を行った。また、9月17日に地域研の谷川竜一助教（当時）とジョイントセミナーを企画し、報告“Shaping the Middle Class City: A Comparative Study on Ordinary Residential Architecture, 1950s-1970s”を行った。

2 学術交流協定

海外の研究機関との間で部局間の学術交流協定を締結することによって、共同研究の実施、国際研究集会の組織、研究者交流、史資料の共有化などの国際的学術交流活動を進めている。2016年3月末までに地域研の締結した協定は21件となった（締結機関の所在国・地域と件数は、インドネシア3、カンボジア2、タイ4、ペルー1、台湾1、ネパール1、ブータン1、マレーシア2、ラオス3、英国2、アゼルバイジャン1）。2015年度には、英国のロンドン大学東洋アフリカ学院（School for Oriental and African Studies (SOAS), London University）、アゼルバイジャン共和国のアゼルバイジャン外交アカデミー大学公共学国際学院（The School of

Public and International Affairs (SPIA), ADA University, Azerbaijan）、およびタイ王国のマハーチュラーロンコーン仏教大学仏教研究所（Buddhist Research Institute (BRI), Mahachulalongkornrajavidyalaya University, Thailand）との協定を締結した。今後も国際的な学術協力協定を拡充していく予定である。

アゼルバイジャン外交アカデミー大学公共学国際学院との協力関係では、帯谷知可准教授が協力教員として主指導教員を務める大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の大学院生1名が本MOUを基盤として先方において4ヶ月間の研修およびフィールドワークを実施した。

3 国際ハブ形成

地域研は、その前身である国立民族学博物館地域研究企画交流センターが、ペルーで最も歴史のある人文社会系の研究機関であるペルー問題研究所 (Instituto de Estudios Peruanos) と学術交流協力協定を締結して実施してきた国際共同地域研究「現代ペルーの総合的地域研究」(通称ペルー・プロジェクト)を引き継ぎ、ラテンアメリカ研究の国際ハブ形成を目指した「ペルー・プロジェクト」を2009年度まで実施した。2010年度からは、この事業を地域研究の国際ハブ形成と位置づけなおし、ラテンアメリカに焦点を合わせた国際研究集会の組織を柱とする活動を行っている。

2105年度には、ラテンアメリカから研究者を招へいし、二つのワークショップを京都大学地域研究統合情報センターにて実施した。一つ目は、2016年1月23日に Seminario “Del kirchnerismo al ‘macrismo’: legados,

continuidades y rupturas” (セミナー「キチネリスモから『マクリスモ』へ：遺産、継続性と断絶)と題し、アルゼンチン・トルクアトディテラ大学のエンリケ・ペルソティ (Enrique Peruzzotti) 氏の報告をもとにキルチネル政治の遺産とマクリ新政権の誕生の意味について議論した。もう一つは、2016年3月5日に、米国民主義研究所グアテマラ支部 (Instituto Nacional Democrático-Guatemala) 代表のエドワルド・ヌニェス (Eduardo Nuñez) 氏を招へいし Seminario “Una lectura crítica sobre los procesos de cambio político en Guatemala y América Central: desempeño institucional y dinámicas ciudadanas” (セミナー「グアテマラと中米における政治変動過程に関する批判的分析：制度の役割と市民の動態)を実施し、グアテマラを中心とする中米諸国の政治社会変動について幅広い考察を行った。

IV. 広報出版

1. 出版

- 1 CIAS 叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」
- 2 CIAS 叢書サブシリーズ「相関地域研究」
- 3 CIAS ブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」
- 4 雑誌『地域研究』
- 5 CIAS Discussion Paper Series
- 6 JCAS Collaboration Series
- 7 スタッフの刊行物

2. 情報発信



1 出版

1 CIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」

CIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」は、京都大学地域研究統合情報センターの災害対応の地域研究プロジェクトの成果をまとめたものであり、2015年度に第5巻、第4巻が刊行され、全5巻のシリーズとして完結した。

対象地域を時間と空間の広がりの中で立体的に捉える地域研究の方法により、被災後だけ、被災地だけにとどまらないこれからの災害対応のあり方を提示するとともに、災害（災い）を社会の潜在的な課題が顕在化する契機と捉えて検討することで、地域社会への理解を深めることを狙いとする。各巻は地域研究、防災、人道支援、情報学など分野の異なる専門家の協働により執筆されている。

災害対応の地域研究4
歴史としてのレジリエンス：
戦争・独立・災害
川喜田敦子・西芳実 編著
京都大学学術出版会
A5並製・380頁・税込 3,672円
ISBN: 9784814000104
2016年3月



災害対応の地域研究5
新しい人間、新しい社会：
復興の物語を再創造する
清水展・木村周平 編著
京都大学学術出版会
A5並製・402頁・税込 4,320円
ISBN: 9784876988990
2015年12月



2 CIAS叢書サブシリーズ「関連地域研究」

CIAS叢書サブシリーズ「関連地域研究」は、地域アイデンティティを新たに構築するための視点・思考を磨き上げる京都大学地域研究統合情報センターの関連地域研究プロジェクトの成果を中心にまとめたものである。2015年度に第2、3巻が刊行され、全3巻のシリーズとして完結した。

21世紀の地域とは、連動し、影響しあい、それゆえ容易に変化する空間である。こうした急激に変化する地域を理解するため、各地域の特性を明らかにするとともに、その地域がある種アイデンティティを持ち得ていることを捉え、同時に、連鎖する複数地域とともに、世界においていかなる役割と意味をもっているのかについて、比較と関係性という二つのキーワードを用いて研究を試みるのが「関連地域研究」の手法のひとつである。

関連地域研究2
融解と再創造の世界秩序
村上勇介・帯谷知可 編著
青弓社
A5並製・216頁・税込 2,808円
ISBN: 9784787234001
2016年3月



関連地域研究3
衝突と変奏のジャスティス
谷川竜一・原正一郎・林行夫・
柳澤雅之 編著
青弓社
A5並製・260頁・税込 2,808円
ISBN: 9784787234018
2016年3月



3 CIASブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」

2014年度よりCIASブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」の刊行を開始した。本シリーズは、京都大学地域研究統合情報センターの地域情報学プロジェクトの成果を踏まえている。

コンピュータを駆使した最新の情報技術では、設計者は満足させられたとしても多様な現実世界を十分に捉えることは難しい。世界には情報処理や通信のインフラが十分に整っていない地域があることに加え、社会に置かれた事物を扱う以上は機械的に計測可能な情報だけでなく人々の思惑も考慮せざるを得ないためでもある。このような考えのもと、現場の利用者にとって意味がある情報処理の方法を分野や素材ごとに集め、主に大学の新生向けに研究生生活のガイドの意味を込めてまとめたものが「情報とフィールド科学」シリーズである。



情報とフィールド科学2
灯台から考える海の近代
谷川竜一 著
京都大学学術出版会
A5並製・80頁・税込 756円
ISBN: 9784814000036
2016年3月



情報とフィールド科学3
雑誌から見る社会
山本博之 著
京都大学学術出版会
A5並製・64頁・税込 756円
ISBN: 9784814000043
2016年3月



情報とフィールド科学4
被災地に寄り添う社会調査
西芳実 著
京都大学学術出版会
A5並製・72頁・税込 756円
ISBN: 9784814000371
2016年3月

4 雑誌『地域研究』

地域研究コンソーシアム（JCAS）におかれた編集委員会が編集する『地域研究』を年2回刊行している。地域研究の視点から世界の課題を考える特集と論文（査読有）によって構成されている。特集企画と論文は公募している。



15巻1号
[総特集] グローバル・アジアにみる
市民社会と国家の間：危機とその克服
[第I部] 暴力が壊す社会、生み出す絆
[第II部] 災害が壊す社会、生み出す絆
[第III部] 選挙が壊す社会、生み出す絆
昭和堂
A5判・208頁・税込 2,592円
ISBN: 9784812215128
2015年4月

16巻1号

[総特集] ロシアとヨーロッパの狭間：
ウクライナ問題と地域史から考える
[第Ⅰ部] ウクライナをみる視角
[第Ⅱ部] 両大戦間期の中央ヨーロッパ
昭和堂

A5判・300頁・税込 2,592円

ISBN: 9784812215197

2015年11月



16巻2号

[総特集] 中ロの台頭と欧米覇権の将来
[第Ⅰ部] マネー：ドル基軸通貨体制
の黄昏

[第Ⅱ部] 安全保障と資源の確保：米
国の後退と中ロの台頭

[第Ⅲ部] 国力としての科学技術：ノー
ベル賞を視野に入れる中国

昭和堂

A5判・315頁・税込 2,592円

ISBN: 9784812215494

2016年3月



5 CIAS Discussion Paper Series

地域研の教員や研究員などの研究成果や共同研究の成果を、迅速に公開することを目的として刊行するシリーズである。論文のみならず、調査報告、資料、文献解題、ワークショップやシンポジウムの記録など多彩な研究成果を、執筆者（编者）の地域研究統合情報センター教員の責任のもとに随時公開している。

No.55

2004年スマトラ沖地震・津波復興史Ⅱ
山本博之・西芳実・篠崎香織 編
A4判・214頁
2015年5月



No.56

せめぎあう眼差し：相関する地域を読み解く
福田宏・柳澤雅之 編
A4判・52頁
2016年3月



No.57

BRICs諸国のいま：2010年代世界の位相
村上勇介 編
A4判・44頁
2015年3月



No.58

EVALUACIÓN HISTÓRICA DE LAS RELACIONES ECONÓMICAS JAPÓN-CUBA.
Takashi Tanaka
A4判・18頁
2016年1月



No.59

森をめぐるコンソナンスとディソナンス：熱帯雨林帯地域社会の比較研究
竹内潔・阿部健一・柳澤雅之 編
A4判・84頁
2016年3月



No.60

たたかうヒロイン：混成アジア映画研究2015
山本博之・篠崎香織 編著
A4判・112頁
2016年3月



No.61

都市の近代化と現代文化：ブラジル・日本の対話から
アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ／ハケル・アビサマラ／ムリロ・ジャレリノ・ダコスタ 編
A4判・122頁
2015年3月



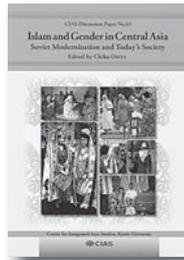
No.62

『カラム』の時代VII：コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践
坪井祐司・山本博之 編著
A4判・96頁
2016年3月



No.63

Islam and Gender in Central Asia : Soviet Modernization and Today's Society
Chika Obiya (ed.)
A4判・78頁
2015年3月



No.64

アフロ・ブラジル文化のカポエイラ・アンゴラ：対話する身体がつなく世界
アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ／荒川幸祐／王柳蘭 編著
A4判・102頁
2016年3月



No.65

HONDURAS: POLÍTICAS DE AJUSTE, INEQUIDAD Y CRECIMIENTO 1980-2013
Braulio Serna Hidalgo
A4判・34頁
2016年2月



No.66

声を繋ぎ、掘り起こす：多声化社会の葛藤とメディア
王柳蘭 編著
A4判・92頁
2016年3月



6 JCAS Collaboration Series

地域研では、地域研究コンソーシアムと共同し、活動成果を2010年度より『JCAS Collaboration Series』として刊行している。

No.12

緊急研究集会報告書
東南アジアの移民・難民問題を考える：地域研究の視点から
西芳実・篠崎香織 編
地域研究コンソーシアム
京都大学地域研究統合情報センター
東南アジア学会
日本マレーシア学会
東京大学グローバル地域研究機構持続的平和研究センター
A4判・56頁
2015年10月



No.13

JCAS公開シンポジウム報告書
境界・地域への挑戦と「地域」
黒木英充・塩谷昌史・柳澤雅之 編
地域研究コンソーシアム
京都大学地域研究統合情報センター
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
A4判・65頁
2016年3月



7 スタッフの刊行物

地域研の教員や研究員などによる刊行物。センターの研究対象地域の拡がりに比例した広範なエリア、トピックを扱っている。専門書から一般書まで幅広い読者に向けて、研究成果を発信し、研究の社会還元を目指している。

増補改訂 戦争・ラジオ・記憶
貴志俊彦 著
吉川弘文館
A5判・632頁・税込 7,344円
ISBN: 9784585221197
2015年7月



フィールドから考える地球の未来 (地球研叢書)
関野樹 監修
原正一郎・貴志俊彦・柴山守・村上勇介・
山本博之・谷川竜一他共著
昭和堂
A5判・286頁・税込 2,700円
ISBN: 9784812215517
2016年3月



Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogos Brasil-Japão
Andrea Yuri Flores Urushima,
Raquel Abi-Samara, Murilo Jardelino
da Costa (eds.)
São Paulo: Terracota Editora
16x23cm・240頁・税込 2,700円
ISBN: 9788583800286
2016年3月



2 情報発信

地域研究統合情報センターは、ウェブサイト (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>) やニューズレター等を通じて、同センターが主催・共催するシンポジウムや各種研究会等の活動、また図書ならびに映像資料等の所蔵、データベース公開に関する情報提供を行っている。地域研の各種出版物については、デジタル・アーカイブ化により、ウェブサイト上で公開を行っている。

また、新聞・雑誌の取材を受けたり、テレビ・ラジオ等に出演したりした地域研の教員や研究員等の記事（カッコ内に名前を記載）は以下のとおり。

2015年4月26日

「関連地域研究シリーズ第1巻『記憶と忘却のアジア』『京都新聞』

2015年5月4日

「ミャンマーの窯跡発掘調査へ 現地当局と奈文研・京大」『朝日新聞デジタル』（柴山）

2015年5月21日

「ラジオ放送90年上 有事にも海外とつなぐ短波」『毎日新聞』夕刊（貴志）

2015年7月18日

「CIAS叢書〈地域研究のフロンティア5〉『21世紀ラテンアメリカの挑戦』について」『図書新聞』

2015年7月18日

「東京クラッソ！『首都大東京日本の未来を切り開く研究—最新デジタルアーカイブ』」TOKYOMXTV（柳澤）

2015年8月15日

「サハリン残留日本人問題について」『朝日新聞』夕刊（中山）

2015年8月15日

「あのとき それから サハリン残留 離別望郷翻弄された住民」『朝日新聞』（夕刊・東京版）（中山）

2015年9月28日

「サハリン 心をつなぐ25年 一時帰国民間が支え」『読売新聞』夕刊（中山）

2015年10月3日

「世界深層 サハリン残留 揺れる望郷」『読売新聞』（中山）

2015年10月3日

「懐かしの斑鳩、後世に 収集写真300点、ネットで公開 撮影者の記憶も紹介／奈良」『毎日新聞』地方版（谷川）

川）

2016年10月14日

「『斑鳩の記憶データベース』（チエノワ・イカル）を正式に公開」カレントアウェアネス・ポータル（谷川）

2015年10月15日

「暮らし、文化を伝えて-『斑鳩の記憶』写真 データベース公開」『奈良新聞』（谷川）

2015年10月16日

「国原譜」『奈良新聞』（谷川）

2015年10月17日

「東西回廊プロジェクト」NHK（柴山）

2015年10月17日

「『昭和の奈良・斑鳩』 ネット公開 生活風景や町並みの写真300点」Yahoo!ニュース（谷川）

2015年10月17日

「よみがえる昭和の斑鳩、なつかしの写真データベース公開」『産経新聞』奈良支局（谷川）

2015年10月21日

“Sakhalin Japanese mark 25 yrs of renewed ties,” *The Japan News*（中山）

2015年11月19日

「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ソ連抑留 遠かった祖国」『岐阜新聞』（中山）

2015年11月19日

「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国」『東奥日報』（中山）

2015年11月20日

「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③シベリア抑留」『神奈川新聞』（中山）

2015年11月23日

「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国」『山陰新聞』（中山）

2015年11月24日

「私たちはどこへ 戦後70年 幸福追求 踏みにじる国家」『山形新聞』（中山）

2015年11月25日

「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任」『新潟日報』（中山）

2015年11月25日

「私たちはどこへ 戦後70年 第8部 責任 ③遠い祖国」『高知新聞』（中山）

2015年11月25日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国」『愛媛新聞』(中山)

2015年11月25日
「私たちはどこへ 戦後70年 (35)大陸に置き去り」『北國新聞』夕刊(中山)

2015年11月25日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 遠い祖国」『日本海新聞』(中山)

2015年11月27日
「(奈良)懐かしい写真募り『斑鳩の記憶』公開 町立図書館」『朝日新聞』(谷川)

2015年11月27日
「昔の写真 呼び起こす記憶」『朝日新聞』(中山)

2015年11月28日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国」『秋田さきがけ』(中山)

2015年11月30日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③国家の冷酷 遠い祖国」『福井新聞』(中山)

2015年12月6日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③終戦から始まる悲劇」『埼玉新聞』(中山)

2015年12月6日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国」『静岡新聞』(中山)

2015年12月6日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任」『佐賀新聞』(中山)

2015年12月7日
「私たちはどこへ 戦後70年 第9部 責任 ②遠い祖国」『中國新聞』(中山)

2015年12月10日
「北海道@ユジノサハリンスク 残留日本人 地道に調査」『北海道新聞』(中山)

2015年12月15日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 下」『沖縄タイムス』(中山)

2015年12月19日
「私たちはどこへ 戦後70年 第5部 責任 ③日ソのはざままで人生翻弄」『熊本日日新聞』(中山)

2015年12月19日
「私たちはどこへ 戦後70年 第6部 責任 ③終戦後始まる悲劇 日ソのはざまで翻弄」『南日本新聞』(中山)

2016年1月9日
「あの日神戸は 阪神大震災 市がデータ公開 アプリ開発進む」『読売新聞』大阪版(西・山本)

2016年1月11日
「私たちはどこへ 戦後70年 第11部 責任 ③遠い祖国」『大分合同新聞』(中山)

2016年3月4日
「JSPS学術基盤研究拠点形成事業による防災国際セミナーの活動」『まにら新聞』(西・山本)

2016年3月15日
「比映画3作品を上映 最優秀は韓国、比勢入賞逃す 大阪アジア映画祭」『まにら新聞』(西・山本)



2015年度の記録

- 2015年 4月13日 「多色字幕による多言語映画の表現」上映・講演会
～15日
- 2015年 4月25日 2014年度共同研究ワークショップ「せめぎあう眼差し：相関する地域を読み解く」開催
- 2015年 4月26日 2014年度共同利用・共同研究報告会開催
- 2015年 5月28日 ポール・バークレー×中山大将 ジョイント・ワークショップ2015開催
- 2015年 6月 1日 現代コロンビアに関するセミナー／研究会開催
- 2015年 6月22日 シンポジウム「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治：現状と課題」開催
- 2015年 7月 2日 英国のロンドン大学東洋アフリカ学院（School for Oriental and African Studies (SOAS)）との部局間交流協定（学術協力協定）締結
- 2015年 7月13日 第1回運営委員会
- 2015年 7月13日 奈良学園高等学校（SSH 指定校）の高校生の研究に協力
8月19日
- 2015年 7月19日 東南アジアの移民・難民に関する緊急研究集会開催
- 2015年 7月23日 第1回協議委員会
- 2015年 8月 1日 国外客員教員としてGaia Caramellino氏（トリノ工科大学上級研究員）を招へい
～10月31日
- 2015年 8月 4日 福岡県立鞍手高等学校（SGH 指定校）の生徒が地域研を訪問
- 2015年 9月15日 公開シンポジウム“Media Cultures of Wartime and Postwar East Asia”開催
- 2015年 9月17日 Gaia Caramellino×谷川竜一 ジョイント・セミナー2015開催
- 2015年 9月20日 九州シネアドボ・ワークショップ「変身するインドネシア：力と技と夢の女戦士たち」開催
- 2015年 9月30日 谷川竜一助教離任（金沢大学新学術創成研究機構助教）
- 2015年10月 3日 日本学術会議公開シンポジウム「亀裂の走る世界の中で：地域研究からの問い」開催
- 2015年10月10日 シンポジウム「BRICs諸国のいま：2010年代世界の位相」開催
- 2015年11月 1日 地域研究コンソーシアム2015年度年次集会・シンポジウム「境界領域への挑戦と『地域』」開催
- 2015年11月29日 シンポジウム「『近代建築史の最先端』第11回 東アジア近代建築史研究の回顧と展望：『東アジアの近代建築』から30年」開催
- 2015年11月30日 アゼルバイジャン共和国のアゼルバイジャン外交アカデミー大学公共学国際学院（The School of Public and International Affairs (SPIA), ADA University, Azerbaijan）との部局間交流協定（学術協力協定）締結
- 2015年12月15日 国際ワークショップ“Toward Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia”開催
～16日
- 2015年12月20日 華北交通写真第2回協議会開催
- 2015年12月26日 国際ワークショップ“Islam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society”開催
- 2016年1月23日 現代アルゼンチンに関するワークショップ／研究会開催
- 2016年 2月 3日 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ（2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ）開催
～ 4日
- 2016年 2月 5日 第2回協議委員会
- 2016年 2月22日 国際ワークショップ“Toward Social History of Malay Muslims: Islamic Principles and Local Practices from the Perspective of Majalah Qalam (1951-1969)”開催

- 2016年 2月23日 ワークショップ「東亜学術論壇2016：交錯する東アジア像」開催
- 2016年 2月29日 国際シンポジウム“Illegal Timber of the Global East: A Dialogue between the Private Sector, Civil Society Organizations and Academia”開催
- 2016年 3月 2日 第2回運営委員会
- 2016年 3月 2日 国際会議／ワークショップ“Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction
～ 3日 in Asia”開催
- 2016年 3月 4日 タイ王国のマハーチュラーロンコーン仏教大学仏教研究所（Buddhist Research Institute (BRI), Mahachulalongkornrajavidyalaya University, Thailand）との部局間交流協定（学術協力協定）締結
- 2016年 3月 5日 現代グアテマラに関するセミナー／研究会開催
- 2016年 3月11日 大阪アジア映画祭連携シンポジウム「手に職系」女子とフォーエバー・ポギー」開催
- 2016年 3月12日 国際シンポジウム“Buddhism and Contemporary Living Environment over Asia”開催
- 2016年 3月25日 ワークショップ「誤差か、発見の糸口か?：情報学的分析結果を学際的に評価する」開催

京都大学

地域研究統合情報センター年報（平成二十七年度）

発行日 2016年6月30日

発行者 京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL：075-753-7302（代表）
Fax：075-753-9602
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

印刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通藪屋町東入
TEL：075-343-0006
Fax：075-341-4476

Annual Report 2016

CENTER FOR INTEGRATED AREA STUDIES, KYOTO UNIVERSITY



Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

京都大学地域研究統合情報センター年報(平成二十七年度)

発行日 2016年6月30日

発行者 京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

TEL:075-753-7302(代表)

Fax:075-753-9602

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>